甲南大生のキャンパス・ライフ・デザイン

2011 年度　調査実習報告書
（社会調査実践研究　②クラス）

2012 年 2 月

甲南大学　文学部　社会学科

目　　次

はじめに／2012年度調査実習の概要 1

第１章　就活のホンネ：大学生活と就職活動の関連性 3

第２章　大学生の集団行動とその要因 11

第３章　大学生の防災に関する意識 21

第４章　大学生とSNS：mixiの持つ魅力とは 29

第５章　大学生の意識調査：青春時代の語り口 39

第６章　大学生の金銭意識 49

第７章　大学生の職種選択に与える影響 59

第８章　大学生の海外旅行に対する意識 69

第９章　大学生の時間の使い方 77

第10章　大学生の余暇活動としてのボランティア 85

第11章　大学生の食生活への影響 95

第12章　大学生活とストレス 103

第13章　大学生のおしゃれ意識 111

第14章　大学生の友人関係形成における男女間の違い 121

資料　調査票 129

はじめに／2011 年度調査実習の概要

本報告書は甲南大学文学部社会学科の専門教育科目「社会調査実践研究」（社会調査士資格 G 科目）②クラス（アンケート法）において行った調査実習の結果をとりまとめたものである。

調査テーマは、「キャンパス・ライフ・デザイン」を全体の統一的なキーワードとして設定し、そのなかで履修者が個々の関心に応じて決定している。実習の大まかな内容とスケジュールは以下のとおりである。前期は調査テーマの設定と仮説の設定、測定と尺度構成に関する講義を行った後、①研究テーマとリサーチ・クエスチョンについて、②先行研究の知見とそれに基づく仮説について、③質問項目について、履修者がそれぞれ数回のプレゼンテーションを行い、夏期休暇中の課題として履修者全員の質問項目を含む調査票を作成した。後期はサンプリングと実査の種類・方法について講義を行った後、調査票の配布と回収の分担を割り当てて、2 週間の実査期間を設けた。なお本調査実習の調査対象者は、履修状況など学校生活に関する個人属性を統制している方が集計や分析結果の解釈が容易になることから、本学学生のなかでも文学部社会学科に所属する 1～3 年生とした（就職活動に関する設問が含まれていることから、調査対象から 4 年生を除いた）。1 年生は必修科目「社会調査基礎演習Ⅱ」の授業時間内に集合調査を行い、2・3 年生は所属ゼミを通じた留置調査を行った。よって 2・3 年生については今年度の後期にゼミを開講していない研究室に所属する学生に調査票を配布・回収できていないが、ほぼ悉皆調査に近い状態のデータを収集することができている。この間、履修者は調査員として調査の説明と依頼、調査票の配布と回収、内容に関する質疑応用のすべてを担当した。また、調査テーマに理系学生との比較研究を含む履修者がいたことから、当該テーマを選択した学生は理系学部所属の学生が履修する科目担当の教員に協力依頼を行い、指示された日時の授業において集合調査を担当した。実査後は、回収された調査票の記入内容を履修者全員で点検してからデータ入力し、統計ソフト（SPSS）による分析を行った。大まかな分析が終わった時点で、仮説の検証結果に関するプレゼンテーションを行い、そこで受けた指摘を踏まえて報告書の執筆を行った。

最後になったが、履修者 14 名分の質問項目が盛り込まれた冗長なところがないわけではない調査票に記入してくれた調査対象者の学生の皆さんに御礼申し上げたい。

2012 年 2 月

2011 年度「社会調査実践研究（②クラス）」担当
星　敦士（甲南大学文学部准教授）

第１章　就活のホンネ：大学生活と就職活動の関連性

1. はじめに

現在の社会において学生が就職する際に必要不可欠なものが、「就職活動」である。では、そもそも就職活動とは何か。

広辞苑で就職活動の意味を調べてみると、「就職活動：求就先を得るために、求人先に働きかけること。会社訪問など」とある。しかし、現在では就職サイトでエントリーを申し込んだ後、入社試験当日まで会社に訪問しない人も存在する。

私は、「大学生と就活」をゼミナールの調査テーマに行ってきた。その中で、「就職活動に対する不安とフリーターやニートの増加」の関連について調べてみようと思った。

理由は、2009 年のリーマンショックの影響からいまだに立ち直れていない日本では、不景気による就職難で、年々就職のための競争が激しくなっている。競争の激化の影響で、就職活動に対する不安が増大し、就職活動の敷居を高くなり、フリーターやニートなどの「大卒無業者」が増加しているのではないかと考えたからである。

2. 先行研究

「就職活動日対する不安とフリーターやニートの増加」の関連について、「大学生における就職活動不安が就職活動に与える影響」(松田侑子 2007)を参考にした。この調査は、近年、就業できない（しない）大学生＝大卒無業者の増加を受けて、大学生が就活に感じる不安の内容と不安が就活の進み具合に与える影響を明らかにすることを目的とし、３つの大学の 3 年生、計 306 名に対し無記名方式のアンケート調査を行ったものである。

調査の結果、

① 企業や業界に対する知識量が少ない＝「準備不足不安」

② 自己分析が不足しているのではないか＝「アピール不安」

③ 就職活動を支えてくれる人や施設が周囲にいない＝「サポート不安」

以上 3 つの不安を感じる大学生が多く、これらの不安が就職活動の敷居を高くし、学生が就職活動を始める時期を遅くし、就職活動を始めること自体を放棄してしまう原因となっていることを明らかにした。

だが、調査結果を受けた考察において、「これらの不安への対処方法を見出すことが期待される。」と締められており、調査の結果により判明した 3 種類の不安をどのようにして解消すればよいのか、について触れられていなかった。

今まで、就職活動に関する調査を行ってきたが、以前行ったインタビュー調査の中で、就職活動に限らず、学生生活で不安や悩みがある時は「友達に相談する」という話を聞い

た。また、2000 年ごろからの日本における「IT 革命」の後、急速に発達したインターネットを通じたコミュニケーションが現在積極的に行われており、代表的なサイトとして 2002 年に始まった「mixi」や、2006 年に始まった「twitter」と「Face book」がある。

中でも、2004 年 5 月に楽天に買収された「みんなの就職活動日記」（通称：みん就）では、掲示板方式で同じ世代の就職活動を行う仲間と、就職に関する情報交換や就職活動で感じる不安や悩みの相談が積極的に行われていることがわかった。

3. 仮説

以上の先行研究に基づき「就職活動で発生する不安への対処方法」として、私は２つの仮説を立てた。

1 つ目が、「キャリアセンターを多く利用している学生は、利用していない学生と比べ、就活に対する不安は少ない」という仮説である。

キャリアセンターでは年間を通じて、学生に応じた「キャリア・デザイン」というキャリアの支援プログラムを行っている。キャリア・デザインの内容は、1、2 年生を対象とした支援プログラムと 3、4 年生を対象とした支援プログラムの二つに大きく分かれている。

1、2 年生を対象とした支援プログラムでは、適正テストや進路発見ガイダンスが多く行われており、主に学生の「進路研究や自己の発見」をテーマとした講座やイベントを行っている。また、3、4 年生を対象とした支援プログラムでは、エントリーシート・SPI テストの対策講座や学内での企業セミナーといった「就職活動本番」をテーマとした講座やイベントを行っている。

キャリアセンターが主催する講座やイベント以外に、キャリアセンターでは学生が抱える就職活動の悩みや疑問をキャリアセンターの職員に相談することができる。キャリアセンターでは職員ごとに担当する業界が違っており、学生の抱える悩みや疑問に応じて最も適した職員が相談に乗ることが出来るようになっている。この相談は事前に予約が必要だが一年を通して受け付けており、講座やイベントといった支援プログラムと違ってどの学年の生徒も受けることが可能である。

以上の理由から私は、キャリアセンターを多く利用することで、企業や業界に対する知識が身につき、不安を解消することができるのではないかと考えた。

2 つ目に「就職活動の苦楽を共有できる仲間がたくさんいる学生は、仲間が少ない学生と比べ、就活に対する不安は少ない」という仮説を立てた。

就職活動で感じる不安・不満を相談する相手がいないことでストレスがたまり、「私はこのまま就職活動を続けることができるのだろうか」という不安が発生する。この不安に関して、同じ学生と就職活動の悩みを相談することで不安の解消となるのではないかと考えた。

なぜなら、先行研究の中で、悩みや不安があるときに腹を割って話しやすい「同年代の仲間」が相談相手として選ばれることが多いと知り、悩みや不安があるときに相談するこ

とができる「就職活動仲間」がたくさんいるほど悩みやストレスが取り除かれ、不安を解消することができるのではないか、と考えたからである。

また、2000 年以降急速に発達しているインターネットを利用した、「twitter」や「Face book」を使用し就職の相談をしている人もいるのではないかと考え、日常で直接であって会話する場合とインターネットを利用し相談した場合の二種類の調査を行った。

4. 分析結果

4.1 キャリアセンターの利用(相談)と不安の関連性

仮説 1 を証明するために、「Q34：就職活動への不安」を従属変数に、「Q35a：キャリアセンターの利用（相談）[1]」と「Q35b：キャリアセンターの利用（講座）[2] 」とのクロス集計を行った。

クロス集計の前に「Q34：就職活動への不安」の回答を(1.不安)と(2.やや不安)を「１.不安」に変換し、(3.あまり不安ではない)と(4.不安ではない)を「2.不安ではない」に変換した。また、相談と講座それぞれのキャリアセンターの利用頻度について、(1.よく利用している)と(2. ときどき利用している)を「1.利用している」に、(3.あまり利用していない)と(4.ほとんど利用していない)を「2.利用していない」に変換した。

表1 キャリア(相談) と 不安 のクロス集計表

	不安	不安でない	合計
利用している	19	3	22
	86.40%	13.60%	100%
利用していない	240	36	276
	87.00%	13.00%	100%
上段:実数　下段:パーセント			

また、調査対象から 1 年生を省いたものが以下の表である。

表２ キャリア（相談） と 不安 のクロス表(2～4回生)

	不安	不安でない	合計
利用している	15	3	18
	83.3%	16.7%	100.0%
利用していない	126	9	135
	93.3%	6.7%	100.0%
上段:実数　下段:パーセント			

[1] キャリアセンター職員との就職に関する相談のこと。
[2] キャリアセンターが主催のイベント・セミナー・講座のこと。

まず、「キャリアセンター職員との相談と不安の関係」についてクロス集計を行った。二つの結果に共通していたのが、「不安に感じている」と答えた人が「不安を感じない」と答えた人に比べて多いことである。

次に、「全生徒の調査結果」と「1 年生を省いた調査結果」を比較すると、キャリアセンター職員と相談したことがないと答えた人が 100 人以上の差が開いている事が分かる。

また、「全生徒の調査結果」ではキャリアセンター職員との相談を行ったことがあるかないかに関わらず、「不安に感じている」と「不安を感じない」との割合がほぼ同じ数値であるのに対し、「1 年生を省いた調査結果」では、相談を行ったかどうかで、「不安に感じている」と「不安を感じない」の割合に差が見られた[3]。

4.2　キャリアセンターの利用(講座)と不安の関連性

「Q35a：キャリアセンターの利用（相談）」の調査の次に、「Q34：就職活動への不安」と「Q35b：キャリアセンターの利用（講座）[4]」とのクロス集計を行った。

分析の前に「Q35a：キャリアセンターの利用（相談）」と同じく、キャリアセンターの利用頻度について、(1.よく利用している)と(2. ときどき利用している)を「1.利用している」に、(3.あまり利用していない)と(4.ほとんど利用していない)を「2.利用していない」に変換した。

表３ キャリア（講座） と 不安 のクロス表

	不安	不安でない	合計
利用している	54	4	58
	93.1%	6.9%	100%
利用していない	205	35	240
	85.4%	14.6%	100%
上段:実数　下段:パーセント			

また、調査対象から 1 年生を省いたものが以下の表である。

表４ キャリア（講座） と 不安 のクロス表（2～4回生）

	不安	不安でない	合計
利用している	52	3	55
	94.5%	5.5%	100.0%
利用していない	89	9	98
	90.8%	9.2%	100.0%
上段:実数　下段:パーセント			

[3] 「全生徒の調査結果」が両者 87%：13%だったが、「１年生を省いた調査結果」は利用者した人が 83%：17%、利用していない人が 93%：7%であった。

今回も 2 つの結果に共通していたのが、「不安に感じている」と答えた人が「不安を感じない」と答えた人に比べて多いことである。また、「全生徒の調査結果」と「1 年生を省いた調査結果」を比較すると、キャリアセンター主催の講座を利用した人と利用したことがない人の間に 100 人以上の差が開いている点も同じであった。

先ほどの「キャリアセンターの利用（相談）」の調査結果と大きく異なる点が、キャリアセンターが主催する講座を「利用する」と答えた人の方が「利用していない」と答えた人に比べて「不安である」と答えた割合が高いということである[5]。

4.3　就活仲間（オフライン）と 不安の関連性

仮説 2 の証明のために「Q8n2：就職活動に対する不安や悩みを話せる友人の人数」と「Q34：就職活動への不安」の関連性の調査を行う。1 年生を調査の対象から外し、「Q8n2：就職活動に対する不安や悩みを話せる友人の人数」の人数について 3 種類のクロス集計を行った。

①　「0～3 人以下」、「4～9 人」、「10 人以上」の 3 つに分けた場合。

表5 就活仲間（オフライン）と 不安 のクロス表

	0～3人	4～9人	１０人以上	合計
不安	36	68	8	142
	25.4%	47.9%	5.6%	100%
不安でない	6	2	1	12
	50.0%	16.7%	8.3%	100%

上段：実数　下段：パーセント

②　「0～4 人」、「5～8 人」、「9 人以上」の 3 つに分けた場合。

表6 就活仲間（オフライン）と 不安 のクロス表（その2）

	0～4人	5～8人	9人以上	合計
不安	77	27	8	112
	68.8%	24.1%	7.1%	100%
不安でない	7	1	1	9
	77.8%	11.1%	11.1%	100%

上段：実数　下段：パーセント

[5] 「利用している」と答えた人の方が「利用していない」と答えた人より、4～8％高い

③ 「0～2 人」、「3～7 人」、「8 人以上」の 3 つに分けた場合。

表７ 就活仲間（オフライン）と 不安 のクロス表（その３）

	0～2人	３～7人	8人以上	合計
不安	36	66	10	112
	32.1%	58.9%	8.9%	100%
不安でない	6	2	1	9
	66.7%	22.2%	11.1%	100%
上段:実数 下段:パーセント				

調査の結果、今回も「不安に感じている」と答えた人が「不安を感じない」と答えた人に比べて多かった。三つの調査結果についてだが、表 5 の「0～3 人以下」、「4～9 人」、「10 人以上」の 3 つに分けた場合と表 7 の「0～2 人」、「3～7 人」、「8 人以上」の 3 つに分けた場合がほぼ同じ数値だったのに対して、表 6 の「0～4 人」、「5～8 人」、「9 人以上」の 3 つに分けた場合が他の二つと異なる結果になった。

4.4 就活仲間（ネット）と 不安の関連性

日常で直接であって会話する場合との比較をするためにインターネットを利用した就活での悩み相談の場合の調査を行った。1 年生を調査の対象から外し、「Q8n2：就職活動に対する不安や悩みを話せる友人の人数」と「Q36：就職活動に関するオンラインでの悩み相談」のクロス集計を行った。

表8 不安 と 就職活動に関するオンラインでの悩み相談 のクロス表

	頻繁にしている	まあまあしている	あまりしていない	ほとんどしていない/まったくしていない	合計
不安	5	2	18	116	142
	3.5%	1.4%	12.7%	81.7%	100%
不安でない	0	1	1	10	12
	.0%	8.3%	8.3%	83.3%	100%
上段:実数 下段:パーセント					

調査の結果、ネットでの就職活動で感じる不安や悩みの相談をほとんどの人が行っていないことが分かった。「ほとんどしていない/まったくしていない」以外の回答をした人で見ると、相談をしている人の方が、相談をしていない人と比べて不安だと感じる人が多いことが分かった。

5. 考察

この調査は「どうすれば就職活動の際に感じる不安が解消されるのか」を目的として行った。調査を行うにあたり、「キャリアセンターを多く利用している学生は、利用してい

ない学生と比べ、就活に対する不安は少ない」という仮説と「就職活動の苦楽を共有できる仲間がたくさんいる学生は、仲間が少ない学生と比べ、就活に対する不安は少ない」という仮説を立てた。

その結果、両方の仮説に関する調査において「不安を感じていない」人よりも、「不安を感じている」人のほうが圧倒的に多いことが分かった。仮説別にみると、仮説 1 の場合、キャリアセンターの利用をしていない人と比べて、キャリアセンターの講座やイベントに参加し、就活での悩みの相談をしている「キャリアセンターを利用している人」の方が「不安を感じている」と答えた人の割合が多いことが分かった。

キャリアセンターの講座やイベントでは、「現在の日本における就職がどれほど難しいか」また、「新卒で就職が決まらないと、後でどんなに苦労するか」に関する話がよくされていることや、就活での悩みの相談の際に、自分が目指している業界に就職することが難しいことを伝えられ、「キャリアセンターを利用している人」の方が、現在の日本の就職難について深く知ったことで、キャリアセンターや悩みの相談をしていない人よりも就職活動に対して不安を覚えてしまったのではないだろうか。

仮説 2 の場合、実際に会って就職活動の悩みの相談をする場合とネット上での相談した場合それぞれを調査をしたが、ネット上で悩みの相談をする人が少ないことが分かった。これは、自分の人生に関わる「就職」という問題に関しては、ネット上の文字だけのやり取りではなく、実際に面と向かいながら、肉声で話し合いたいのではないだろうか。

また、実際に会って就職活動の悩みの相談をする人数についてだが、その人数が 4 人に集中している事が分かった。相談する相手が 4 人ということは相談する本人を含めて 5 人となる。この 5 人という多くも少なくもない人数が就職活動の悩みを相談する相手としてちょうどよいのではないだろうか。

今回の調査で行った質問を見て「抽象的な問いが多くどのように答えればよいかが分かりづらい」と感じた。次にアンケートによる調査を行う際には、質問項目を具体的にし、相手が答えやすい質問項目の作成を心がける。

文献

池上彰，2011，『池上彰の就職読本：就職難もまたチャンス』オクムラ書店.

石川壮一郎・オバタカズユキ，2010，『会社図鑑 2011：天の書』ダイヤモンド社.

石川壮一郎・オバタカズユキ，2010，『会社図鑑 2011：地の書』ダイヤモンド社.

石渡嶺司他，2010，『就活のバカタレ！企業・親・学生が聞きたい&言いたい本当の話』PHP 研究所.

石渡嶺司・大沢仁，2010，『就活のバカヤロー』光文社.

松田侑子，2007，「大学生における就職活動不安が就職活動に与える影響」『日本教育心理学会総会発表論文集』52(49): 543.

第 2 章　大学生の集団行動とその要因

1. はじめに

人間社会というものは常にグループを形成により成立し、その中で人は生きている。私たちが生きる世界にはたくさんの集団があり、その中で人はその集団に応じた自らの役割を探し出し、集団に順応することで自分の居場所を見つけ生きていく。古くから日本人には協調性や、謙虚さが心の性質としてあり、「みんなが同じであることが望ましい」とする傾向がある。その、日本人が集団において協調性・同調性を頑なに守ろうとする姿勢はいまだに崩れず存在する。

もちろん集団行動がいけないものだという気はない。協調性や謙虚さというのは日本人の良いところでもある。協調性や謙虚さを重んじるあまり、他者からの逸脱、集団からの逸脱は日本人にとって恐れるべきものになってしまったのではないだろうか。

私自身の学生生活を振り返ってみても、日本人の集団を重んじる姿勢はいたるところで垣間見ることができる。小学校、中学校、高校でも「仲良しグループ」が存在し、休み時間やお昼ごはんは毎日決まった人と過ごしていて、それが義務のように感じることもあった。時には友人とともにトイレに向かうという「連れション」という現象も学生生活の中では珍しくなかった。小学校から高校までの間はクラスという縛りが存在し、30 人程度の集団の中で生活しなくてはならず、その集団の中で円滑な交友関係を築くため、人は協調性を実生活で身に着ける。しかしそれは自由であるはずの大学生活に関してもあまり変化は見られない。学生は友人とともに行動し、食事を取り、受講する講義をあわせようと計画を立てる。私はなぜ人が集団行動にそこまで依存するのかということと共に「集団行動をとる人に何らかの特徴があるのではないか」と感じた。そこで本稿では大学生の集団行動の有無と集団行動を積極的に行う学生にどういった特徴があるのかを調べていく。

2. 先行研究

集団行動に関する問題に関しては多くの学者が研究を行い、それを文献にのこしてきた。私は学生が集団行動をする理由や目的について知りたいと考え、そのことについて述べている学者の論文を先行研究に用いることにした。

まず、日本心理学会の楠見幸子は大学生のグループ行動と被調査者である学生のグループ間の友人関係に対しどのような姿勢であるかを研究していた。この文献から以下のことがわかった。①学生の約 9 割が大学生活において何らかのグループに所属していること②学生がグループ行動をする理由は「楽しさ」であることである。一方「一人でいたくない」や「時には一人でいるほうが楽に感じる」など、マイナスの感情を抱く学生も存在する③

男子学生より女子学生のほうがグループに属している割合が高く、また、男子学生は複数のグループに所属しているケースが女子学生に比べ多く見られたこと④大学において男女ともに行動を共にする「共行動」の傾向が見られ、女子高生特有の行動であるとされていた「同調行動」はもはや特有の行動とは言えなくなっているということ。また男子の共行動は大学の男女比率において男子が女子よりも圧倒的に少ない場合に顕著にその傾向が見られることがわかった。以上のことがこの論文からわかった。

次に、さきほど取り上げた論文にも述べられていた「友人関係における同調行動」について高校生 320 名に対し質問紙調査に関する論文を先行研究文献としてあげる。この論文の中で著者である葛西・松本はこう述べている。「青年において自分が我慢しても他者と同じであることを重視しており、さらに、他者と同じであることに安心感を覚えているのではないか」（葛西・松本 2010）この論文は質問項目に「親しい友達と同じような格好や行動がしたい」「流行遅れになるのは嫌だ」など私自身の研究に近い質問項目が掲載されていたため、質問を作成する際もとても参考になった。

また、高坂康雄は青年期の友人関係における異質なものとして見なされる事への恐怖心（被異質視不安傾向）と異質な存在を拒否する傾向（異質拒否傾向）について調査を行い、そこから青年の変化と友人関係満足度の関連に関して研究していた。この文献からわかったことを 4 つにまとめてみた。①被異質視不安傾向は青年期と通じて減少していくこと②友人関係満足度に関して、高校生は女子よりも男子のほうが、友人関係満足度が高く、女子に関しては高校生時よりも中学生の時のほうが、友人関係満足度が高い③中学生男子および大学生男子以外の被調査者は異質拒否傾向の有無と友人関係満足度の低下が比例している④高校生女子は被異質視不安傾向と異質拒否傾向の両方が関連しているケースが多かったため、そこから高校生女子の友人関係構築の困難さが伺えた。

以上の 3 つの文献が今回の私の研究に使用した先行研究である。学生の集団行動をする動機や友人関係に「不安」というものが関連していることがわかった。しかし、先行研究は大学生を取り扱うものが少なく、中学生や高校生など今回自らが調査する大学生とはやや年代的にも生活環境的にも異なり、それが調査に影響するか否かはわからないが、念頭においておく必要を感じた。

3. 仮説

多くの先行研究から、9 割以上の大学生が学生生活において何らかのグループに所属していることや、その集団行動は当事者にとって必ずしもプラスの感情を与えているのではなく、「一人でいたくない」や「友達と一緒にいることで得られる何らかの恩恵」、などほかの目的やマイナスの要素が含まれることがわかった。さらに、青年期の友人関係構築において「集団行動」「共行動」がキーワードとなり、青年期における学生は集団に属することを非常に重要視し、自分を押し込んででもその集団にあわせた行動をとり、友人と同じであることに安心感を抱くことがわかった。そして、高校生女子の友人関係に関しては異

質視不安傾向と異質不安傾向を両方備え持つ傾向があることが明らかとなり、そこに女子の友人関係の構築の困難さが伺えた。これらの先行研究から以下の 2 つの仮説を導き出すことができる。

仮説 1　流行を取り入れようとする傾向がある人ほど集団行動を行う。

集団行動をする人間の特徴を表面的なもので測ることができないかと考え、二つ目の先行研究からヒントを得た。服装という外見から判断できるひとつのカテゴリに他者と自分との間に共通点を見出し、自分と同じ傾向を持つ人と行動をともにするのではないかと考える。

仮説 2　異質視不安傾向が高い人ほど集団行動をする傾向がある

「一人でいること」が学生たちにとって異質視不安を与える原因となり、その結果周囲の人間に異質なものと認識されたくないという感情が働きやすい人間ほど不安を払拭するため集団行動をとりやすいと考えた。また、仮説 1 仮説 2 共に性差があり、いずれも男子よりも女子のほうがその傾向が顕著に現れるということも仮説とし、調査していく。

4. 分析結果

4.1　流行に関する意識の測定

仮説 1 については、従属変数となる流行への関心は「ファッションに関して、流行をどの程度取り入れようとする傾向があるか」という質問項目に対し、「1.あてはまる」「2.あてはまらない」の 2 つの回答項目を設け、当てはまるもの 1 つを回答してもらい、その結果を基に測定を行った。

4.2　異質視不安傾向得点の測定

仮説 2 については、従属変数となる異質視不安傾向の有無を「1. できるだけ友人と同じであろうと気を使うことがある」「2. 友人から自分がどう見られているか気になる」「3. あまり目立つようなことはしたくない」「4. 友人から変わった人だと思われたくない」という 4 つの項目を設け、それぞれの質問項目に対し「1. 当てはまる」「2. ややあてはまる」「3. あまりあてはまらない」「4. あてはまらない」という 4 つの傾向の強弱をはかるための回答項目を設け、その回答により測定を行った。また、分析を行うにあたり、量的な変数として測定した質問項目をあらかじめ「数値が高ければ高いほど得点が高くなる」ように数値の再設定を行った。異質視不安傾向を測るため、質問項目に「他の変数への値の再割り当て」を行い「1.そう思う」「2.ややそう思う」「3.あまりそう思わない」「4.そう思わない」といった尺度を「1.そう思わない」「2.あまりそう思わない」「3.ややそう思う」

「4.そう思う」という方向に変換した。また、非回答や無回答など無効となる質問項目をまとめて集計してしまい出た数値に誤差が生じないようにするため、「9999」「9998」等の欠損値の設定し、仮説の分析へと進んだ。なお、表 1、表 2 は上記の測定方法を用いて行った男女別の異質視不安傾向得点である。

表1　異質視不安傾向の（男子）

	平均値	度数	標準偏差
男子	5.84	104	2.84

表2　異質視不安傾向の平均値（女子）

	平均値	度数	標準偏差
女子	6.45	141	2.43

4.3　大学生活におけるグループ行動の測定

仮説 1、仮説 2 ともに独立変数となる集団行動の頻度は「普段の大学生活においてグループ行動をしていると思うか」という質問に対し、「1.大抵の場合している」「2.日によるもしくは場合による」「3.大抵の場合していない」という回答を設け、当てはまるものを 1 つ回答してもらうことで測定を行った。

4.4 仮説の検定

仮説 1 の分析には「集団行動の有無」と「流行への関心」を用いてクロス集計による分析を行った。「集団行動の有無」を行、「流行への関心」を列に挿入し分析を行った。その結果が表 3、表 4、表 5 である。

表3　流行を取り入れようとする傾向とグループ行動（男女）

		大抵の場合していると思う	日による/場合による	大抵の場合していないと思う	合計
流行を取り入れようとする	はい	63	29	3	95
		66.3%	30.5%	3.2%	100.0%
	いいえ	84	54	17	155
		54.2%	34.8%	11.0%	100.0%
合計		147	83	20	250
		58.8%	33.2%	8.0%	100.0%

上段：実数　下段：パーセント

表4　流行を取り入れようとする傾向とグループ行動（男子）

		大抵の場合していると思う	日による/場合による	大抵の場合していないと思う	合計
流行を取り入れようとする	はい	20	7	2	29
		69.0%	24.1%	6.9%	100.0%
	いいえ	33	27	17	77
		42.9%	35.1%	22.1%	100.0%
合計		53	34	19	106
		50.0%	32.1%	17.9%	100.0%

上段：実数　下段：パーセント

表5　流行を取り入れようとする傾向とグループ行動　（女子）

		大抵の場合していると思う	日による/場合による	大抵の場合していないと思う	合計
流行を取り入れようとする	はい	43	22	1	66
		65.2%	33.3%	1.5%	100.0%
	いいえ	51	26	0	77
		66.2%	33.8%	.0%	100.0%
合計		94	48	1	143
		65.7%	33.6%	.7%	100.0%

上段：実数　下段：パーセント

表 3 は男女全体の流行への関心とグループ行動をクロス集計した結果である。各項目の中でもっとも割合を占めていたのは集団行動を日常的に行いかつ流行を取り入れようとしていると回答したグループであった。また、「日による／場合による」または「大抵の場合していない」と回答したグループはいずれも比較的流行を取り入れようとする傾向がなかった。

表 4、表 5 は男女それぞれのデータを選び出し、それぞれ抽出したデータを使用して男女それぞれの流行への関心とグループ行動の有無に関しクロス集計を行った結果である。表 4 の男子のデータからわかったことは「大抵の場合集団行動をしている」と答え、かつ「流行を取り入れようとする傾向がある」と回答したグループの割合がもっとも高く「大抵の場合集団行動をしている」と回答し尚且つ「流行を取り入れようとする傾向はない」と回答したグループと比較すると 26.1 パーセントの差が生じていた。女子の同じグループで比較を行っても男子の方がその割合は高かった。それに対し表 5 の女子のデータからは「大抵の場合集団行動をしている」と答え、かつ「流行を取り入れようとする傾向がない」と答えたグループがもっとも割合が高かったものの、「大抵の場合集団行動をしている」と答え、かつ「流行を取り入れようとする傾向はある」と答えたグループとの差がほとんど見られなかった。また、集団行動を学生生活において「大抵の場合していない」と回答した学生がほとんどおらず、女子の場合は集団行動をするかしないかというよりもむしろ集

団行動をどの程度しているかに焦点を絞ることができることがわかった。

続いて仮説 2 の分析に移る。仮説 2 は仮説 1 とは異なり、グループの平均を用いて全体の異質視不安傾向得点を算出し、さらに男女それぞれの異質視不安傾向得点の算出も行った。その結果が以下の表となった。

表6　集団行動と異質視不安傾向得点（男女）

	平均値	度数	標準偏差
大抵の場合 していると思う	6.40	144	2.52
日による /場合による	5.90	82	2.64
大抵の場合 していないと思う	5.65	20	3.30
合計	6.17	246	2.63

表7　集団行動と別異質視不安傾向得点（男子）

	平均値	度数	標準偏差
大抵の場合 していると思う	5.87	53	2.79
日による ／場合による	5.97	33	2.67
大抵の場合 していないと思う	5.50	18	3.38

表8　集団行動と別異質視不安傾向得点（女子）

	平均値	度数	標準偏差
大抵の場合 していると思う	6.70	91	2.31
日による ／場合による	5.94	48	2.60
大抵の場合 していないと思う	7.00	2	2.83

表 6 は全体の集団行動と異質視不安傾向をグループの平均化した結果のグラフである。全体で見ると「大抵の場合集団行動をしている」と回答したグループがもっとも異質視不安得点が高かった。しかし表 7、表 8 において男女で比較した場合、男子は「集団行動を日によって／場合によってする」と答えたグループがもっとも異質視不安得点が高かったのに対し、女子の場合を見ると「集団行動を大抵している」と答えたグループがもっとも異質視不安得点が高かった。集団行動を大抵しない人の異質視不安得点が一番高いという風にグラフには出たのだが、対象者が 2 人しかいなかった。よって、分析すること事態にあまり意味がないと考えられたので、今回は考察からはずした。今回はなお、単純に男女それぞれの異質視不安得点を算出した場合にも男子より女子のほうが、得点が高いという結果となった。

5. 考察

本稿では学生の集団行動に関する調査を目的として、集団行動と流行への関心、異質視不安傾向この 2 つの関連を分析した。先行研究より、集団行動をする学生にはどのような特徴があるのかを研究し、「なぜ集団行動をするのか」「どういった人間が集団行動をとる傾向があるのか」という疑問を軸に大きく 2 つの仮説を構成した。それが以下の仮説だ。

仮説 1　流行を取り入れようとする傾向がある人ほど集団行動を行う。
仮説 2　異質視不安傾向が高い人ほど集団行動をする傾向がある

また、これらの仮説には性差があると考え仮説 1、仮説 2 共に女子のほうがその特徴は顕著に現れるとして仮説も構成した。

今回の調査は甲南大学の学生 251 名を対象とし、質問紙を配布し回収した後、SPSS という統計ソフトを用いた分析を行った。いくつかの先行研究を元に私が立てた仮説は大きく 2 つに分けられる。

まず、仮説 1 の分析結果を述べる。結論から先に述べると仮説 1 は成立した。仮説 1 はクロス集計を用いて分析を行った。先行研究にあげた「青年期の友人関係における同調行動」で著者である葛西・松本は青年期にある学生の友人関係において、彼らは集団行動を非常に重要視しており、友人と自分が同じであることに安心感を得るということを述べていた。調査の結果、集団行動を日常的に行っている学生は流行を取り入れようとしている傾向を持つ学生がもっとも多い割合を占めていた。しかし、性別で分けて分析した場合女子よりも男子のほうが集団行動を日常的にし、かつ流行を取り入れようと意識している割合が高かったため、性差に関しては仮説と異なる結果となった。「流行」という今最も旬で受け入れられやすい服装を身につけることで、周囲の友人と「同じ」服ようになることが可能となり、それが安心感を学生に与えるのではないか。男子学生の割合がより高かったのは、男子のファッションの幅が女子に比べて狭く、女子ほどめまぐるしく流行の変動が

ないため、今の流行に乗り遅れることが簡単に人と違うことにつながってしまい、学生はそこにさらなる不安を感じるようになり集団行動をとるのではないだろうか。人から異質なものに見られたくないという不安が生じるという点で、後に出てくる被異質視不安傾向が男子にも見られるようになって来ているのかもしれない。

仮説 2 に関しても、調査の結果、その成立が明らかとなった。仮説 2 は異質視不安傾向をはかる質問の尺度をそのまま得点化できるように値の再割り当てをしなおし、その得点のグループの平均の比較によって分析した。先行研究に用いた高坂の調査結果と同様、男子よりも女子のほうが被異質視不安傾向が強く、また、女子の中で集団行動を日常的にとるグループがもっとも異質視不安得点が高かった。対照的に男子は集団行動を日によってもしくは場合によって行う学生がもっとも異質視不安を感じる傾向があることがわかった。ここで注目すべき点は性別ごとの集団行動と異質視不安得点の散らばりである。前でも述べたように女子は集団行動を日常的に行っている学生がもっとも異質視不安得点が高く、男子は日によって場合によって集団行動を行う学生がもっとも強く感じていた。そこには 3 つ目の先行研究であげた高坂の文献を元に考えることが考えられた。高坂の文献には高校生女子は被異質視不安傾向と異質拒否傾向の両方を併せ持っているため、友人関係の構築が一層複雑なものになるのではないかと述べていた。その結果を引用し今回の調査においても同様のことが言えるのではないだろうか。女子の場合、異質な存在としてみなされることへの恐怖心と異質なものを拒否する傾向を持つ女子は、男子に比べ「異質なもの」に対する抵抗力が大きいのではないだろうか。そのため、常に一緒に行動していても安心することができないため、得点が高くなっているのではないだろうか。逆に男子学生の場合は集団行動の頻度が不安定であることから、安心感を得る機会が少ないため集団行動を日によって行う学生がもっとも異質視不安を感じるということが考えられる。

以上が今回調査した仮説の考察である。また、今回の調査では質問項目の練り方が甘く、仮説の検証を行うには不十分なものだと調査・分析を通じて感じた。次回、再び学生の集団行動への意識に関して調査する際は、現代の学生がいかに集団行動を重要視し、依存しているかの尺度をはかるような意識調査を行ってみたい。

文献

葛西真記子，松本麻里，2010,「青年期の友人関係における同調行動：同調行動尺度の作成」『鳴門教育大学研究紀要』25: 189-203.

高坂康雄，2010,「青年期の友人関係における被異質視不安と異質拒否傾向—青年期における変化と友人関係満足度との関連—」『教育心理学研』58(3): 338-347.

楠見幸子，1986,「友人概念の発達的研究：中学生と大学生の友人概念の構造比較」『日本教育心理学学会発表論文集』478-479.

岡林春雄，2005,「親友という名の他者：現代若者の人間関係」『教育実践研究：山梨大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要』10: 41-50.

吉田浩子，2003,「大学生の友人関係：5 つの大学におけるグループの特徴に関する調査から」『川崎福祉学会誌』13(1): 173-186.
和田秀樹，2010,『なぜ若者はトイレで「ひとりランチ」をするのか』，祥伝社.

第 3 章　大学生の防災に関する意識

1. はじめに

2011 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災。東北を中心とする広範囲に渡り、甚大な被害をもたらした。M9.0、宮城県北部では震度 7 を観測するという過去最大規模の巨大地震となった。このような未曾有の災害を受け、今日本全体で防災に対する意識の高まりがみられる。こういった災害による防災意識の変化は 17 年前に兵庫県南部を中心として発生した、阪神淡路大震災でも同様に見られたはずだ。

今回の調査対象者は甲南大学の学生である。甲南大学は神戸市東灘区に位置し、神戸市内はもちろんのこと大阪や京都などの他県や明石、加古川といった東西から様々な学生が集まる場所に位置している。この特性を活かして、今回は阪神淡路大震災を経験した学生とそうでない学生との間には防災対策に関してどのような意識的な隔たりがあるのかということを調査した。また防災対策に関する意識だけではなく、ボランティア活動への参加経験や参加意欲といった学生の意識や行動にも、阪神淡路大震災の経験の有無が関わっているのかということもあわせて調査した。

2. 先行研究

阪神淡路大震災に関する研究は大変多く行なわれているが、地震の被害規模や被災者の心理的変化を調査したものが多かったため、直接的に関連のない研究が多くなってしまった。

先行研究①「阪神・淡路大震災後における住民の防災意識の変容」

目的：阪神・淡路大震災の被災者の防災意識・実態、地域コミュニティのあり方の変化を調査する。

方法：神戸市内の防災コミュニティ結成済みの 6 地区の住民 1,500 世帯を対象。調査方法はアンケート法。

結果：震災により甚大な被害を受けた地域に住む住民は震災直後の防災意識の風化は見られないが、被害が少なかったり被害がなかった地域に住む住民は、震災直後に比べ意識の低下が見られる。また被害の大きかった地域の住民ほど、コミュニティ活動への参加の度合いが大きい

先行研究②「小学生に対する防災教育が保護者の防災行動に及ぼす影響」

目的：防災教育の具体的な効果を調査する。

方法：大規模地震対策特別措置法によって地震防災対策強化地域に指定されている愛知県内の小学生(5 年生、6 年生)135 名が対象。小学校の体育館で全校児童を対象とした地震に関する一斉教育を実施。調査方法は質問紙調査。事前、事後、3 カ月後の 3 回に渡る調査。（恐怖感情、脅威への臆弱性、脅威への深刻さ、反応効果性）

結果：防災教育直後には地震に関する子どもの感情や認知に変化が現れることが示されたが、3 カ月後まで持続することはなく元(事前)の水準に戻ってしまう。子どもの地震に対する恐怖感と保護者への効力感が保護者への伝達意志に影響し、伝達が促され結果的に保護者の防災行動が促進される。

先行研究③「老年期に焦点をあてた死生観・終末期医療に関する意識調査」

目的：老年期の死生観と終末期医療に対する意識を明らかにする。

方法：対象は 65 歳以上の在宅生活をしている人 245 名。質問紙調査。

結果：「死に関する意識」25 項目を因子分析して「死を考える」因子、「死の不安、恐怖」因子を確認し、各因子について男女比較を行なった結果、女性の方が両因子ともに有意に高く、男性に比べて女性の方が死の不安・恐怖感が強かった。

先行研究④「災害後の心理的変化と対処方法」

目的：阪神淡路大震災から半年後の被災者の心理状況を調査する。

方法：対象は A 大学において行われたオープンセミナー受講者を中心とした近隣地域在住者 374 名と、A 大学の 1 回生から 4 回生までの学生 228 名の計 602 名。調査方法は質問票を使った集団法。

（性別、被災状況、立ち直りのための対処方法、災害観、人生観の変化など）

結果：災害観においては「自然現象」と理性的に捉える男性が多いのに対して、女性は「自然の仕返し」であると感じる人が多い。女性は生活の基盤が「家族・家族」が主であるため被害を受けた際の影響が男性よりも大きい。また家屋の損傷がひどい人ほど人生観が変化している。

先行研究①では災害による被害が大きかった地域に居住していた人は意識の風化は見られない一方で、被害が少なかったり被害がなかった地域に住む住民は震災直後に比べ意識の低下が見られる。先行研究②では防災教育を受けた直後は、地震に関する子どもの感情や認知に変化が現れることが示されたが、3 カ月後まで持続することはなく元(事前)の水準に戻っていた。また先行研究④では大きな被害を受けた人ほど、その後の人生観に変化があったとされている。これら 3 つの先行研究を通して、やや被災経験があったり防災教育を受けたとしても実際に被災を経験した人とは防災に対する意識が大きく異なるのではないだろうか。

また先行研究③では女性の方が死に対して不安・恐怖を感じるという結果が出ており、

先行研究④においても女性の方が被災の影響を受けやすいという結果が出ている。以上のことから心理的な不安には性差があるのではないだろうか。

3. 仮説

以上のような先行研究から、防災対策の意識のあり方は被災経験が影響していると考えられる。また女性の方が男性より不安を感じやすいという先行研究に基づき、防災対策の意識に関しては性差があるのではないだろうかと考えた。またボランティア活動を行なう要因として、過去に自分が助けてもらった経験が影響しているのではないかと考えた。昨年の東日本大震災の際に、阪神淡路大震災で被災した経験を持つ神戸の人たちがボランティアとして支援に向かったというニュースや新聞記事を多く見かけた。神戸市にある私の出身高校も東北でのボランティア活動を行なっていた（『神戸新聞』2011.07.15）。これらの理由から以下二つの仮説を立てた。（今回は被災経験というものを、震災発生時の「居住地域」と「支援を受けた経験」のふたつの観点から測ることにした。）

仮説１　阪神淡路大震災の際、被害が大きかった地域に居住していた学生の方が防災に対する意識が高く、その中でも男子より女子の方が防災に対する意識が高い。
（ここで、被害の大きかった地域は神戸市内とする）

仮説２　阪神淡路大震災の際、被害が大きかった地域に居住していた学生の方がボランティア活動に対する意識が高い。

4. 分析結果

4.1　防災対策の選択数、ボランティア参加経験・意欲の測定と分布

表１は防災対策の選択数に関する度数分布表である。防災意識は防災対策の選択肢 1～6 の中での選択数で測った。分布については選択数 0 が最も多く、選択数 6 が最も少ない結果となった。また選択した内容に関しては「懐中電灯の準備」が最も多かった。

表1　防災対策の選択数(度数分布表)

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	0	89	29.7	30.4	30.4
	1	60	20.0	20.5	50.9
	2	55	18.3	18.8	69.6
	3	46	15.3	15.7	85.3
	4	24	8.0	8.2	93.5
	5	14	4.7	4.8	98.3
	6	5	1.7	1.7	100.0
	合計	293	97.7	100.0	
欠損値	不詳	7	2.3		
合計		300	100.0		

表 2 は現在または過去にボランティア活動への参加経験があるかの度数分布表である。ボランティア参加経験は選択肢の変更は特に行なっていない。ボランティア活動に参加している、もしくは参加していたことのある人は全体の 3 分の 1 程度であった。

表2　現在または過去にボランティア活動への参加経験(度数分布表)

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	参加している/していた	94	31.3	32.1	32.1
	参加したことはない	199	66.3	67.9	100.0
	合計	293	97.7	100.0	
欠損値	不詳	7	2.3		
合計		300	100.0		

表 3 はボランティア参加意欲に関する度数分布表である。ボランティア参加意欲については選択肢 1、2 を合わせて「参加したい」3、4 を合わせて「参加したくない」とした。分布に偏りがあったため選択肢 1 を「参加したい」2、3、4 を「参加したくない」に分類してみたところ、「参加したい」は 12%に留まった。

表3　ボランティアの参加意欲(度数分布表)

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	ぜひ参加したい 機会があれば参加したい	215	71.7	71.9	71.9
	あまり参加したくない 参加したくない	84	28.0	28.1	100.0
	合計	299	99.7	100.0	
欠損値	9	1	0.3		
合計		300	100.0		

4.2　居住地、支援経験の測定

居住地については選択肢 1～9 を「神戸市内」、10～13 を「兵庫県内のその他の市町村」、14 で大阪府内の市町村と記入があった場合は「大阪府内の市町村」、それ以外の記入があった場合は「その他の市町村・外国」と 4 つのカテゴリに分類した。支援経験については選択肢 1、2 を合わせて「支援を受けた」。3、4 を合わせて「支援を受けていない」とした。

4.3　仮説の検定

以上のような従属変数と独立変数の関連について、「3. 仮説」で述べた 2 つの仮説それぞれについて分析を行なった。

表 4 にある居住地と防災対策の選択数には関連が見られた。「神戸市内」の平均値が「2.16」と最も高い値をとっている。しかし一方で「兵庫県内のその他の市町村」が「1.40」と、最も低い値となっていた。

表4　　居住地×防災対策の選択数(平均値)

居住地	平均値	度数	標準偏差
神戸市内	2.16	51	1.51
兵庫県内のその他の市町村	1.40	84	1.37
大阪府内の市町村	1.88	52	1.55
上記以外の都道府県・外国	1.84	55	2.00
合計	1.76	242	1.61

表 5 は男女別に見た居住地と防災対策の選択数の平均値である。全ての地域において男性より女性の方が防災対策の選択数は多く、地域別に見ると「神戸市内」が最も多い結果となった。

表5　　男女別　居住地×防災対策の選択数(平均値)

性別	居住地	平均値	度数	標準偏差
男性	神戸市内	1.94	16	1.69
	兵庫県内のその他の市町村	1.28	32	1.55
	大阪府内の市町村	1.81	21	1.72
	上記以外の都道府県・外国	1.83	30	1.82
	合計	1.67	99	1.69
女性	神戸市内	2.26	35	1.44
	兵庫県内のその他の市町村	1.48	52	1.26
	大阪府内の市町村	1.94	31	1.45
	上記以外の都道府県・外国	1.92	24	2.26
	合計	1.85	142	1.56
合計	神戸市内	2.16	51	1.51
	兵庫県内のその他の市町村	1.40	84	1.37
	大阪府内の市町村	1.88	52	1.55
	上記以外の都道府県・外国	1.84	55	2.00
	合計	1.76	242	1.61

表 6 は居住地と現在または過去にボランティア活動の参加経験があるかについてのクロス表である。ボランティア活動の参加経験は「上記以外の都道府県・外国」に居住する人の割合が最も多かった。次に「神戸市内」に居住する人が多い結果となった。また「兵庫県内のその他の市町村」と「大阪府内の市町村」に関してはあまり変わらない結果となった。

表6　　居住地×現在または過去のボランティア活動への参加(クロス表)

			現在または過去のボランティア活動への参加		合計
			参加している/していた	参加したことはない	
居住地	神戸市内	度数	17	33	50
		居住地の	34.0%	66.0%	100.0%
	兵庫県内野その他の市町村	度数	23	62	85
		居住地の	27.1%	72.9%	100.0%
	大阪府内の市町村	度数	14	38	52
		居住地の	26.9%	73.1%	100.0%
	上記以外の都道府県・外国	度数	26	29	55
		居住地の	47.3%	52.7%	100.0%

表 7 は居住地とボランティア活動への参加意欲についてのクロス表である。「兵庫県内のその他の市町村」と「大阪府内の市町村」に居住する人がボランティア活動への参加意欲が高いという結果になった。一方「神戸市内」と「上記以外の都道府県・外国」に居住する人の割合にあまり変わらない結果となった。

表7　　居住地×ボランティア活動への参加意欲(クロス表)

			ボランティア活動への参加意欲		
			ぜひ参加したい 機会があれば参加したい	あまり参加したくない 参加したくない	合計
居住地	神戸市内	度数	35	18	53
		居住地の	66.0%	34.0%	100.0%
	兵庫県内のその他の市町村	度数	67	18	85
		居住地の	78.8%	21.2%	100.0%
	大阪府内の市町村	度数	41	11	52
		居住地の	78.8%	21.2%	100.0%
	上記以外の都道府県・外国	度数	38	17	55
		居住地の	69.1%	30.9%	100.0%

表 8 は支援を受けた経験と現在または過去にボランティア活動への参加経験があるかについてのクロス表である。支援を受けた経験とボランティア活動の参加経験の有無に有意な差は見られなかった。支援を受けた人も支援を受けていない人も、ボランティア活動の参加経験の割合は変わらなかった。

表8　　支援×現在または過去にボランティア活動への参加があるか(クロス表)

			現在または過去のボランティア活動への参加		
			参加している/していた	参加したことはない	合計
支援	支援を受けた すこし受けた	度数	19	38	57
		居住地の	33.3%	66.7%	100.0%
	あまり受けていない 支援を受けていない	度数	62	123	185
		居住地の	33.5%	66.5%	100.0%

表 9 は支援を受けた経験とボランティア活動への参加意欲についてのクロス表である。支援を受けた経験のある人の方がボランティア活動への参加意欲がやや高い結果となったが、あまり大きな差は見られなかった。

表9　　支援×ボランティア活動への参加意欲(クロス表)

			ボランティア活動への参加意欲		
			ぜひ参加したい 機会があれば参加したい	あまり参加したくない 参加したくない	合計
支援	支援を受けた すこし受けた	度数	44	14	58
		居住地の	75.9%	24.1%	100.0%
	あまり受けていない 支援を受けていない	度数	135	52	187
		居住地の	72.2%	27.8%	100.0%

5. 考察

今回の調査では被災経験がある学生と、被災経験がない学生では防犯対策やボランティ

ア活動への関心にどのような差があるのかということを調査した。
仮説 1 に関しては予測と当てはまる結果となった。地震の被害が大きかった地域に居住していた学生の方が防災対策の合計得点が高く、さらにその中でも女子学生の方が男子学生に比べて点数が高かった。やはり被災経験のある人の方が、次に起こりうる災害に対して備えようとする意識が高く、自らが被災したことによって災害に対する意識的な風化が少ないのではないだろうか。また性差に関しても、女子の方が男子と比べて不安を感じやすいという先行研究とも当てはまる結果となった。不安という感情を持つことにより、二次的にその不安に対する対策を取ろうとするのではないだろうか。

一方で仮説 2 の被災経験とボランティア活動への関心の関連性については当てはまらない結果となった。被災した地域に居住していたとしても、必ずしもボランティア活動に参加した経験が多いというわけではなかった。またボランティア活動に対する参加意欲に関しても関連は見られなかったが、表 6 において参加経験があると答えた割合の多かった「上記以外の都道府県・外国」、「神戸市内」に居住していた人たちは表 7 において参加意欲が低かった。一方で表 6 で参加経験があると答えた割合の少なかった「兵庫県内のその他の市町村」、「大阪府内の市町村」は表 7 において参加意欲が高かった。

今回の調査では調査対象が大学生のみであったが、現在の大学生は阪神淡路大震災が起きた当時 5、6 歳ということで震災に関する記憶がはっきりあるとは言いがたい。もう少し調査対象者の年齢層が高ければ、ボランティア活動の項目に関してはまた違った結果となったかもしれない。

文献

二宮和弘・越山建治・北後明彦・室崎益輝，1996,「阪神・淡路大震災後における住民の防災意識の変容」『日本建築学会近畿支部研究報告集』39: 513-516.

豊沢純子・唐沢かおり・福和伸夫，2010,「小学生に対する防災教育が保護者の防災行動に及ぼす影響」『教育心理学研究』58(4): 480-490.

田中愛子・岩本晋，2002,「老年期に焦点をあてた死生観・終末期医療に関する意識調査」『山口県立大学看護学部紀要』6: 119-125.

日下菜穂子・中村義行・山田典子・乾原正，1997,「災害後の心理的変化と対処方法 : 阪神・淡路大震災 6 か月後の調査」『教育心理学研究』45(1): 51-61.

第 4 章　大学生と SNS：mixi の持つ魅力とは

1. はじめに

今日、SNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）は多くの人々に利用されている。それは大学生においても同様であり、2010 年末の調査では大学生の 9 割が日本最大の会員数を持つ mixi（ミクシィ）を利用しているということが明らかになった。それほどの数の大学生が利用しているということは、彼らのキャンパスライフデザインの中で mixi は大きな役割を担っていると思われる。しかしその利用頻度は人によってさまざまであるため、わたしは何か利用頻度に影響を与えている要因があるのではないかと考えた。そこで今回は、どのような大学生が mixi をより多く利用しているのかという点を調査する。この調査により mixi を多く利用する人の傾向が明らかになれば、SNS の存在意義を再認識することができる。また、SNS をあまり利用していない、もしくは利用したことがない人々にとっても魅力的な SNS を生み出す上で参考になるのではないだろうか。

2. 先行研究

SNS についての研究には、日本における SNS の利用状況や意識を明らかにしたもの（川浦・坂田・松田 2005; 梅田・内藤・野崎・江島 2008）や、人間関係構築における SNS の役割について明らかにしたもの（尾上 2007）などがある。

川浦・坂田・松田（2005）によると、mixi の主な利用内容は「他人の日記を読む」「日記を書く」「他人の日記にコメントをつける」といった日記関連行動が多いようだ。また、日記を書けば必ずコメントが付くという状況の人が日記を作成している人の 8 割にのぼることから、日記を介したコミュニケーションの隆盛がうかがえるとされている。この日記を介したコミュニケーションの隆盛は、梅田・内藤・野崎・江島（2008）も、SNS 上で日記を作成する目的は自己表現よりもコミュニケーションにあると、同様のことを示している。そしてそこには自分自身を周囲に理解してもらいたいタイプ（自己開示タイプ）、友人との交流を第一の目的と考えるタイプ（交流主体タイプ）、日記から友人のことを知りたいタイプ（友人情報取得タイプ）の 3 つのタイプが存在するとしている。

尾上（2007）は女子学生が人間関係構築において SNS を積極的に利用し、新たな出会いにも繋げているということを明らかにしている。さらに、自己隠蔽傾向の高い人ほど SNS 利用時間が長くなるという傾向を示している。その理由としては、対面コミュニケーションで自己をさらけ出したくない気持ちが、非対面性の SNS の利用時間を長くするのではないかと考えている（尾上 2007: 21）。

3. 仮説

先行研究から、SNS 上での「他人の日記を読む」「日記を書く」「他人の日記にコメントをつける」といった日記関連行動にはコミュニケーションが存在することがわかる。そしてそこには自己開示や交流、情報取得といった目的があることが示唆されている。これらから、利用者がいかにコミュニケーションを求めているかという点が mixi の利用頻度にも大きく影響すると考える。対人接触を求めるときの大きな要因に寂しさがあげられる。そうすると普通の人よりも敏感に寂しさを感じる傾向が強い人ほど mixi の利用頻度は高いと導かれる。その上で、男性は女性に比べ、孤独に対する耐性が強い（広沢 2002）ことから、それに性差を考慮して 1 つの仮説をたてる。

仮説 1　「寂しがりや」の傾向が強い人ほど、mixi の利用頻度は高い。またこの関係は男性に比べ、女性の方が強い。

ここでの「寂しがりや」とは、普通の人よりも敏感に寂しさを感じる人と定義する。

また、自己隠蔽傾向の高い人ほど SNS の利用時間が長いということから、尾上（2007）の考えるように、対面コミュニケーションで自己をさらけ出したくない気持ちが、非対面性の SNS の利用時間を長くしていると思われる。このことから現実世界で自己をさらけ出せない、つまり現実世界での友人関係が浅い人ほど mixi の利用頻度は高いと導かれる。その上で、人間は環境に適応していく性質を持つことから、友人関係が浅い環境に慣れた高学年の人間は、あまり mixi に依存しなくなるのではないかと考え、学年差を考慮して 1 つの仮説をたてる。

仮説 2　現実世界での友人関係が希薄な人ほど、mixi の利用頻度は高い。またその関係は上級生に比べ、下級生の方が強い。

仮説 1 と 2 の mixi の利用内容は、「他人の日記を読む」「日記を書く」「他人の日記にコメントをつける」「コメントを読む」といった日記関連行動とする。

以下では、実際にデータを用いてこれら 2 つの仮説を検証していく。

4. 分析結果

4.1　mixi の利用頻度の測定と分布

今回の調査で従属変数となる mixi の利用頻度を測るため、「他人の日記を読む」「日記を書く」「他人の日記にコメントをつける」「コメントを読む」といった目的での mixi の利用頻度について、利用回数を「利用していない・ほとんどしない」「月に 1～2 回程度」「週に 1～2 回程度」「1 日に 1 回程度」「1 日に 2～3 回程度」「1 日に 4 回以上」の選択肢から回答を求めた。その上で「利用していない・ほとんどしない」と答えた人以外には、利用時

間についても「1 分以内」「5 分以内」「10 分以内」「30 分以内」「1 時間以内」「それ以上」の選択肢から回答を求めた。図 1、2 はそれぞれの分布である。

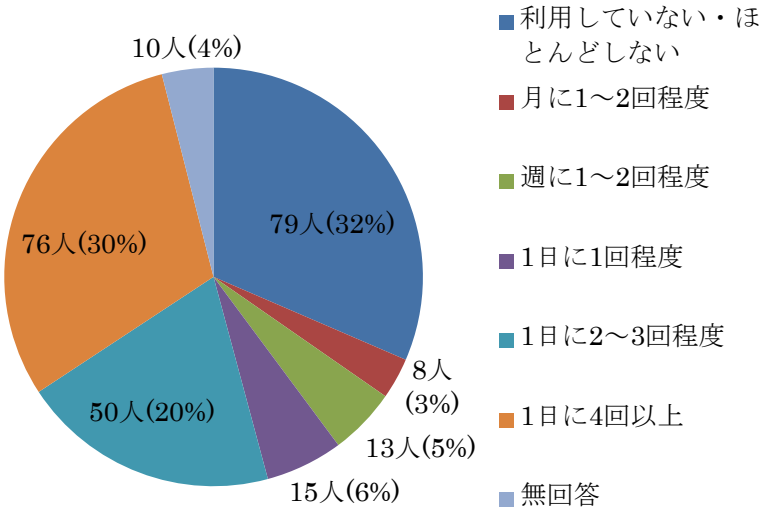


図 1　mixi の利用回数の度数分布

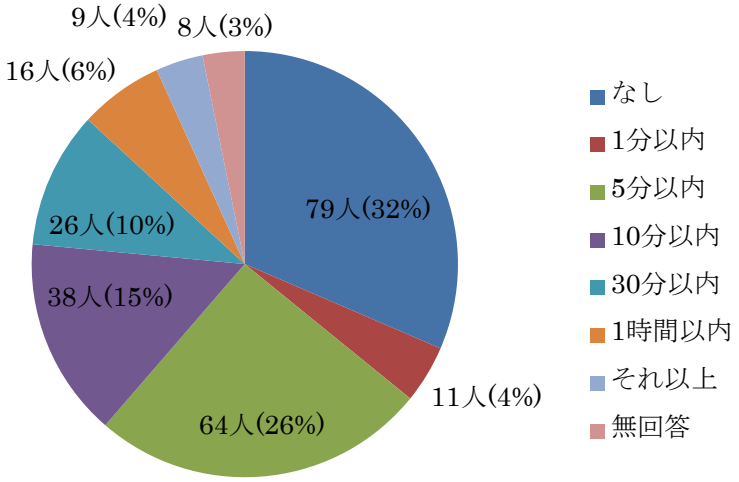


図 2　mixi の利用時間の度数分布

図 1 の利用回数の分布では「利用していない・ほとんどしない」と「1 日に 4 回以上」の回答が他の回答に比べかなり多く、まったく利用していない人と非常に多く利用している人という両極端に集中していた。その次に多かったのが「1 日に 2～3 回程度」であり、残りの 3 つは「1 日に 1 回程度」「週に 1～2 回程度」「月に 1～2 回程度」の順に多かったも

のの、これらの中間の回答は少数であった。

図 2 の利用時間の分布では、図 1 の利用回数において「利用していない・ほとんどしない」の回答数が多かったため、非該当（利用していないため利用時間もなし）の割合が多くを占めている。回答されたものの中で最も多かったのが「5 分以内」で、「10 分以内」「30 分以内」「1 時間以内」と続いた。残りの回答は「1 分以内」「それ以上」の順に多かったが、特に大きな差は見られなかった。この分布では利用回数とは反対に中間の回答に数が集中し、両極端の回答はごく少数であることがわかる。

利用回数と利用時間のクロス表が以下の表 1 である。

表 1　mixi の利用回数と利用時間のクロス表

mixi 利用回数		mixi 利用時間							
		なし	1 分以内	5 分以内	10 分以内	30 分以内	1 時間以内	それ以上	合計
利用していない	度数	79	0	0	0	0	0	0	79
	%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
月に 1～2 回程度	度数	0	0	6	1	1	0	0	8
	%	0.0%	0.0%	75.0%	12.5%	12.5%	0.0%	0.0%	100.0%
週に 1～2 回程度	度数	0	2	3	5	3	0	0	13
	%	0.0%	15.4%	23.1%	38.5%	23.1%	0.0%	0.0%	100.0%
1 日に 1 回程度	度数	0	1	8	4	1	0	1	15
	%	0.0%	6.7%	53.3%	26.7%	6.7%	0.0%	6.7%	100.0%
1 日に 2～3 回程度	度数	0	2	18	16	6	3	5	50
	%	0.0%	4.0%	36.0%	32.0%	12.0%	6.0%	10.0%	100.0%
1 日に 4 回以上	度数	0	6	28	12	15	12	3	76
	%	0.0%	7.9%	36.8%	15.8%	19.7%	15.8%	3.9%	100.0%
合計	度数	79	11	63	38	26	15	9	241
	%	32.8%	4.6%	26.1%	15.8%	10.8%	6.2%	3.7%	100.0%

利用回数にかかわらず（利用していないは除く）、利用時間は中間の回答の割合が高い傾向にある。しかし、利用回数が多くなるにつれ利用時間が長い人の割合も高くなっているので、利用回数と利用時間の両方が多い人、つまり非常に多く利用している人がいるということである。

今回利用回数と利用時間を使用して従属変数を作成しようと考えていたが、互いの結果が極端な分布であったため、今回は利用回数のみを従属変数に使用する。また、利用回数の分布が中間の回答に集中していたため、今回は「月に 1～2 回程度」「週に 1～2 回程度」「1 日に 1 回程度」「1 日に 2～3 回程度」をひとくくりにし、3 つの分類で測定を行う。

4.2　各独立変数の測定

仮説 1 の「寂しがりや」の傾向を測るため、5 つの状況を提示しその状況にいる場合にどの程度孤独を感じるかについて回答を求めた。提示した状況は孤独感を測定する上で用いられる「改訂版 UCLA 孤独感尺度（工藤・西川 1983)」の質問項目のうち 5 項目を参考にし、「周囲の人たちとうまくいかない」「人との付き合いが少ない」「親しい仲間達の中で自分の存在意義をあまり感じない」「とても親しいと言える人があまりいない」「周囲の人たちとの関係が上辺だけ」という 5 つの状況を作成した。4 つの選択肢の「とても感じる」を 3、「まあまあ感じる」を 2、「あまり感じない」を 1、「まったく感じない」を 0 に得点化し、それぞれを合算したものを「寂しがりや」のレベルとする。得点が高いほど寂しがりやということになる。

仮説 2 の現実世界での友人関係の希薄さを測るため、5 つの行動を提示しその行動を同じ大学に所属しているもっとも親しい友人に対してどの程度しているか回答を求めた。提示した行動は、友人や自分自身の評定を求める上で用いられる「友人関係尺度（岡田 1999)」の質問項目のうち 3 項目を参考にした「盛り上がれるように気を使っている」「誘われたときはできるだけ応じる」「会話の内容は流行や当たり障りのないものにしている」という 3 つの行動、さらに大学生の友人関係で多く見られる外出と相談という行動を考慮し、「一緒に外出する」「悩み事を相談する」という 2 つの行動、計 5 つの行動を提示した。「盛り上がれるように気を使っている」「誘われたときはできるだけ応じる」「会話の内容は流行や当たり障りのないものにしている」の 3 つの場合は、4 つの選択肢の「よくする」を 3、「時々している」を 2、「あまりしていない」を 1、「ほとんどしていない」を 0 に得点化し合算、「一緒に外出する」「悩み事を相談する」の 2 つの場合は「よくする」を 0、「時々している」を 1、「あまりしていない」を 2、「ほとんどしていない」を 3 に得点化し合算したものを友人関係の希薄レベルとする。得点が高いほど友人関係は希薄ということになる。

4.3　仮説の検定

2 つの仮説の従属変数と独立変数の関連について分析を行った。仮説 1 は mixi の利用頻度別に「寂しがりや」レベルの平均値を見るため、平均値の比較を行った。その結果が以下の表 2 である。

表 2　mixi の利用頻度別に見た「寂しがりや」レベルの平均値

mixi 利用頻度 3 パターン	平均値	度数	標準偏差
利用していない・ほとんどしない	8.51	79	3.81
月に 1、2 回～1 日に 2、3 回	9.24	86	3.48
1 日に 4 回以上	10.49	75	3.96
合計	9.39	240	3.81

表から、利用頻度が増加するとともに「寂しがりや」の平均値も増加していることがわかる。つまり、「寂しがりや」の傾向が強いほど、mixi の利用頻度は高くなるということである。

次に、男性と女性それぞれの平均値の比較を行うことで、性差について分析したものが以下の表 3、4 である。

表 3　mixi の利用頻度別に見た「寂しがりや」レベルの平均値（男性）

mixi 利用頻度 3 パターン	平均値	度数	標準偏差
利用していない・ほとんどしない	7.21	34	4.14
月に 1、2 回～1 日に 2、3 回	8.54	39	3.60
1 日に 4 回以上	9.54	26	3.85
合計	8.34	99	3.93

表 4　mixi の利用頻度別に見た「寂しがりや」レベルの平均値（女性）

mixi 利用頻度 3 パターン	平均値	度数	標準偏差
利用していない・ほとんどしない	9.49	45	3.25
月に 1、2 回～1 日に 2、3 回	9.83	47	3.29
1 日に 4 回以上	11.17	48	3.83
合計	10.18	140	3.52

男性と女性どちらも利用頻度とともに寂しがりやの平均値も増加している。しかし「利用していない・ほとんどしない」の平均値から「1 日に 4 回以上」の平均値までの増加量を見てみると、男性は 2.33、女性は 1.68 と、男性の方が高かった。つまり、「寂しがりや」の傾向が強いほど mixi の利用頻度が高いという関係は、男性の方が強いことがわかった。また各平均値から、女性の寂しがりやの平均値は男性に比べてかなり高く、女性は男性に比べ敏感に寂しさを感じることがわかった。

次に仮説 2 は mixi の利用頻度別に友人関係の希薄レベルの平均値を見るため、平均値の比較を行った。その結果が以下の表 5 である。

表 5　mixi の利用頻度別に見た友人関係の希薄レベルの平均値

mixi 利用頻度 3 パターン	平均値	度数	標準偏差
利用していない・ほとんどしない	7.87	79	2.13
月に 1、2 回～1 日に 2、3 回	7.02	84	2.04
1 日に 4 回以上	7.32	76	2.11
合計	7.4	239	2.11

表から、平均値は「利用していない・ほとんどしない」が最も高く、「1 日に 4 回以上」「月に 1、2 回～1 日に 2、3 回」と続いたため、利用頻度が増加しても友人関係が希薄になるわけではないことがわかった。またこの結果から、まったく利用していない人と非常に多く利用している人という両極端の人の友人関係が希薄な傾向にあることがわかる。

次に学年別の比較だが、今回の調査の対象のうち 1 年生の人数が若干多かったため、今回は 1 年生と 2、3 年生の 2 つに分類して平均値の比較を行うことで、学年差について分析を行った。その結果が以下の表 6、7 である。

表 6　mixi の利用頻度別に見た友人関係の希薄レベルの平均値（1 年生）

mixi 利用頻度 3 パターン	平均値	度数	標準偏差
利用していない・ほとんどしない	8.7	30	1.84
月に 1、2 回～1 日に 2、3 回	6.68	31	2.32
1 日に 4 回以上	7.24	34	2.22
合計	7.52	95	2.28

表 7　mixi の利用頻度別に見た友人関係の希薄レベルの平均値（2,3 年生）

mixi 利用頻度 3 パターン	平均値	度数	標準偏差
利用していない・ほとんどしない	7.37	49	2.16
月に 1、2 回～1 日に 2、3 回	7.23	53	1.85
1 日に 4 回以上	7.38	42	2.05
合計	7.32	144	2.00

学年別に見ても、利用頻度と希薄レベルに関係がないことに違いは見られなかった。しかし、1 年生の表では「利用していない・ほとんどしない」が最も高く、次に「1 日に 4 回以上」「月に 1、2 回～1 日に 2、3 回」と続くが、2、3 年生の表ではわずかではあるが「1 日に 4 回以上」が最も高く、「利用していない・ほとんどしない」「月に 1、2 回～1 日に 2、3 回」という順になったため、その点では学年別に見たときに違いが見られた。

5. 考察

今回は、ほとんどの大学生が mixi を利用しているといわれている中、どのような大学生が mixi をより多く利用しているかをテーマに置き、今後の SNS の発展への貢献を目的として調査を行った。先行研究から mixi の日記関連行動にはコミュニケーションが存在するということ（川浦・坂田・松田 2005）、自分自身を理解してもらいたいタイプ、友人との交流を目的とするタイプ、友人のことを知りたいタイプという 3 つのタイプが存在すること（梅田・内藤・野崎・江島 2008）、自己隠蔽傾向の高い人ほど SNS の利用時間が長いということ（尾上 2007）がわかった。さらに、男性の方が女性に比べ孤独への耐性が強いとい

うこと（広沢 2002)、人間の環境適応能力をふまえて以下の 2 つの仮説をたてた。

仮説 1　「寂しがりや」の傾向が強い人ほど、mixi の利用頻度は高い。またこの関係は男性に比べ、女性の方が強い。
仮説 2　現実世界での友人関係が希薄な人ほど、mixi の利用頻度は高い。またその関係は上級生に比べ、下級生の方が強い。

仮説 1 は、分析の結果 mixi の利用頻度が高い人ほど「寂しがりや」の平均値も高いことがわかり、「寂しがりや」の傾向が強い人ほど、mixi の利用頻度は高いという仮説は立証された。孤独感を mixi の利用によるコミュニケーションで補っていることということではないだろうか。性差の面では、男性の方が女性に比べ、「利用していない・ほとんどしない」の平均値から「1 日に 4 回以上」の平均値までの増加量が高かったため、男性の方が「寂しがりや」と mixi の利用頻度との関係に強く影響されるという結果となり、仮説は立証されなかった。その理由として、女性の「寂しがりや」レベルの数値が男性に比べて全体的にかなり高かったため、女性の中であまり寂しさを感じる感度に差がなく、このような結果になったと考えられる。

仮説 2 は、分析の結果 mixi の利用頻度と友人関係の希薄さの平均値に関係性はなく、現実世界での友人関係が希薄な人ほど、mixi の利用頻度は高いという仮説は立証されなかった。この理由として、「利用していない・ほとんどしない」と「1 日に 4 回以上」という両極端の希薄レベルの数値が高かったことから、現実世界の希薄さがそのまま mixi に反映されている人と、現実世界の希薄な友人関係を mixi で補っている人という 2 種類の学生が多くいるのではないかと考えられた。

学年別に見ても利用頻度と希薄レベルに関係がないことに違いは見られなかったため、関係は上級生に比べ、下級生の方が強いという仮説も立証されなかった。しかし、1 年生の表では「利用していない・ほとんどしない」が最も高く、次に「1 日に 4 回以上」「月に 1、2 回～1 日に 2、3 回」と続くが、2、3 年生の表ではわずかではあるが「1 日に 4 回以上」が最も高く、「利用していない・ほとんどしない」「月に 1、2 回～1 日に 2、3 回」という順になった。このことから、学年が上がるにつれて現実世界の希薄な友人関係を mixi で補っている人が増えているということが考えられる。

今回の調査によって、mixi が孤独感を解消する役割を担っていることがわかり、なぜ大学生が mixi に魅力を感じるのかという疑問を理解することができた。その上で、現時点ではあまり利用していない人も多いということがわかり、mixi 離れというものが現実に起きていることが理解できたことも大きな収穫であった。

今回は大学生のみを対象とした研究であったため、次は幅広い層を対象にすることで SNS の持つ役割を対象ごとに明らかにすることができるのではないだろうか。また今後 SNS について新たに調査をするときは、それらによる社会への影響などについても調べて

みたい。

文献

広沢俊宗，2002,「孤独の感情，対処行動に及ぼす孤独感，および Aloneness への耐性の影響」『研究紀要』3: 81-96.

川浦康至・坂田正樹・松田光恵，2005,「ソーシャル・ネットワーキング・サービスの利用に関する調査－mixi ユーザの意識と行動－」『コミュニケーション科学』23: 91-110.

MarkeZine，2011,「大学生の 9 割が mixi を利用、ツイッター利用は 2 割強」(http://markezine.jp/article/detail/12756).

岡田努，1999,「現代大学生の認知された友人関係と自己意識の関連について」『教育心理学研究』47(4): 432-439.

尾上恵子，2007,「女子学生の人間関係構築における諸要因について」『一宮女子短期大学紀要』46: 15-22.

梅田恭子・内藤裕美子・野崎浩成・江島徹郎，2008,「大学生を対象とした SNS の Web 日記によるコミュニケーションの検討」『日本教育工学会論文誌』31: 69-72.

第 5 章　大学生の意識調査：青春時代の語り口

1. はじめに

私がまだ中学生だった頃、学校で話題の『オレンジデイズ』(北川悦吏子脚本、2004 年、TBS）というテレビドラマがあった。大学 4 回生の男女が「オレンジの会」を設立し、勉強に、恋愛に、自分の夢に奮闘するという物語だ。中学生の私たちはその大学の自由な雰囲気や、登場人物達の夢に希望に奮闘する姿、そして中学生の私からすれば、大学生のちょっぴり大人の恋愛に惹かれ、何度も繰り返し見ては、まだ見ぬ自らの大学時代を空想し、恍惚としたものだ。これこそが「青春」というような、その物語に再び出会ったのは、『オレンジデイズ』が DVD 化され、すっかりレンタル料も安くなった大学 1 年生の夏である。中学時代の憧れの大学生活とは別物の世界にどっぷり浸かっていた私は、再びキラキラした青春時代の 1 ページに触れ、自らの生活と比較して、唖然としたのを覚えている。そう思っていたのは私だけではなく、周りの友人たちもあのドラマ内の「青春」は、口を揃えて、まるで伝説かのように語られていた。「あれを見て、大学進学を決めたのに」と苦笑いする友人もいるくらいだ。全く、なんとも切なく、悲しい話である。

ところで、「青春」とは一体何だろうか。『オレンジデイズ』は間違いなく青春色が満載なドラマだったが、何を根拠に我々はそのようなことを語っていたのだろう。青春の語り口は、人によってそれぞれであり、何を青春とするかの要因というのもまた、一人一人異なる。「恋愛こそ青春」だと語る者がいれば、「部活や勉学に励む事こそ青春」だと語る者もいる。プラスのイメージを持つ者もいれば、マイナスイメージを持つ者だっている。また、青春期がいつか、という問に「青春はもう過ぎてしまった」と答える若者がいれば、80 歳を超えるご老人が「一生青春し続ける」なんて、ハツラツと答えることもある。そこで、今日の大学生は青春をどのようなものだと考えているのか。また、それは男女や学年によって違いがあるのか。我々大学生の中に、理想の「青春」を取り戻すべく、調査を開始した。

2. 先行研究

2.1　テキスト・マイニングの手法

まず、青春について述べた先行研究を探すもの、曖昧な内容のためか見つからない。そこで、同じく定型化されていない文章についての分析方法研究を知るため、石田淳(2009)を参考にすることにした。

この研究は探索的に人々の幸福・不幸理由の定型的な「語り口」を明確にすることを目的としている。併せて、人々がどのように幸福を感じ、またその背後にはどのようなメカニズムがあるかを調査することも兼ねている。具体的には、2005 年に実施された COE 幸

福調査[1]のデータを用いて、テキスト・マイニングの手法を用いてどのような言葉が幸福理由の自由回答記述に用いられたかを分析されている。

分析方法は得られた自由記述を元に、まずは形態素解析ソフトを使用して意味のある最小限の単語に分解する。その後、漢字・ひらがなの統一、誤字脱字の修正、助詞や句読点の削除、登場回数 10 回以下の単語の除外などの処理を行った。そして単純集計、クロス集計を行い分析する。

調査の結果として、「幸福」は家族関係や健康といった生活領域に関連して、「不幸」は経済的領域に関連して語られる傾向にあるということを述べている。特に、幸福や幸福感変化の理由としては、ライフ・コースに対応した家族形成イベントが数多く言及されていた。回答者のそれぞれは、固有の経験にもとづいて幸福感の理由を語っているが、分析を通して見れば、「幸福の定型」のようなものが存在する。

この先行研究により、自由記述の回答内容をどのように分解し、分析すればよいか、その手法を学ぶことができた。

2.2　青春時代への理想探求

少年・少女のための漫画は、頻繁に「青春のバイブル」とも表現される。青春という言葉に関する、男女の違いを比較したかったため、事前に青春期における男女の理想の違いを表すデータを得るために雲野加代子(2006)を取り上げた。

筆者は 10 年前にも同じ調査を行っている。この調査により、少年・少女時代に感化される漫画は、ジェンダーの性的役割問題に対し、どのような役割を持つか明確にしようとした。そして 10 年後に同じ調査を行う事により、時代の流れにあわせて、どのように変化したのかも調べることも目的にした。

調査の方法は月刊少年・少女漫画雑誌を対象に、それぞれがどのようなジャンルで書かれているかの分析を行った。10 年前の調査対象と同じ漫画雑誌を使用した。（休刊・廃刊になっているものは省く）

結果は 10 年前にも見られた、少年は武闘至上主義、少女は恋愛至上主義とした考え方が、まだ見られた。しかし、そこには若干の変化が見られる。少女漫画では、異性を獲得するという、恋愛色だけを目的におかず、その他の付帯状況について詳しく書かれている。また少年漫画では、それまでは守るべき存在だった女子が武闘に参戦するようになるなど、これまで以上に過激な武闘至上主義が見られるようになった。

この研究により、男女それぞれが青春に何を求めているのかのヒントを得る事ができた。更なる男女の比較と現代の大学生がどのような思考を持っているのかを知るため、次なる先行研究を調べることにした。

---

[1] 関西学院大学院社会学研究所 21 世紀 COE『人類の幸福に資する社会調査』の研究活動の一環として行われた調査。

2.3　今日的な大学生の思考

現代の大学生の生活やどのような考え方を持っているのか調査されている、『キャンパスライフの今』という本を参考にした。ここでも青春についての記述は見られなかったが、生活の充実度や悩みなどに関する記述を得る事ができた。また、調査の題として、「青春」という言葉を使用している研究もあり、大学を卒業した著者たちは大学時代を青春時代の一部であると考えているようだ。今回は先行研究として、大学生活と意識について述べ、男女の比較をしている渡部真(2003)に特に注目した。

この研究は時代における、大学生の生活や意識の変容を調査する事を目的とした。1995 年と 2000 年に内閣府が実施した「日本の青少年の生活と意識に関する基本調査報告書」を比較しているため、若干古いデータではあるものの、二つのデータにも大きな差はなかったのでこちらのデータをそのまま利用することにした。

調査は、層化二段無作為抽出法で選ばれた、小中学生 3,000 人、15～23 歳の青少年 3,000 人、小中学生の親 1,500 人の計 7,500 人が対象である。高校生の結果を比較対象に、主に大学生の結果に視点を絞る。大学生活そのものと、学校以外の場における大学生の姿を調査した。

結果は 85%もの学生が、大学生活に「満足」と答えているが、高校生との結果があまり変わらない。これは大学の「高校化」が原因だと考えられる。満足度を男女別で比較すると、女子が 40%、男子が 22%と、女子の方が「満足」とこたえる人が多い。また、悩み事の調査だと、友人関係や勉強に関しては大学生より、高校生の方が不安に思っている人が多い。男女で比べると、女子の方が人間関係で悩む傾向が大きい。いずれにしても、大学生で悩みを抱える人減っているようだ。

3. 仮説

先行研究で調査したデータを元に、男女と「青春」に関する二つの仮説をたてた。仮説の比較を男女に絞ったのは、より大きな比較データを得られると仮定したからである。なお、回答は自由記述形式に設定することを事前に考え、その結果を見て、仮説以外に更に分析を行うことを事前に考え、調査に臨んだ。

仮説 1　女子は男子よりも青春のイメージにばらつきがある

⇒男子は女子よりも青春のイメージが定型的である

先行研究 3 で女子は男子よりも大学生活の満足度が高いということで、あらゆることに関して興味を抱き、生活が充実していると考えられる。そのため、女子の方が多方面に青春を形作る要素が広がっているのではないだろうかと考え、仮説だてした。

仮説 2　男子は部活や勉強などの競争精神が関わるものを、女子は恋愛や友人などの人間関係を「青春」を語る材料にする傾向がある

先行研究 2 より、青春時代を謳歌する少年・少女の時代から、男子は武闘主義、女子は恋愛主義にあるというデータが得られた。少年・少女漫画の登場人物の多くは大学生を含む青少年たちであり、その者達が好んで読む漫画は、フィクションを含め、彼らの憧れの設定であることが多いと考えた。そこで、男子は勉強（テストや入試など、競争精神が刺激されるもの）や部活動（体育会系の部活動に限られるかもしれないが）を行う際に「青春」を強く感じ、女子は恋愛の中で「青春」を感じるのではないかと考えた。

更に、先行研究 3 より、女子の方が男子よりも人間関係で悩んでいるというデータが得られたため、恋愛関係中である恋人や片思い中の異性などにあわせ友人関係や親との関係など、周りの人々との関わり合いの中で「青春」を感じるのではないかと考えた。そこで青春と人間関係を結びつける記述は女子の方が多いのではないかと更に仮説を付け加えた。

4. 分析結果

4.1 調査結果とその概要

まず、自由記述の回答回収結果として、全 300 名中、男子 152 名、女子 147 名（不明 1 名）回答を得られたのが、男子 113 名（約 74%）、女子 120 名（約 82%）と、調査前の予想を遥かに上回る回答率を得られた。若干数男子より女子の回答率が高いが、ほとんど差はないため、分解後の回答数はそのまま利用することにした。

次に得られた自由記述回答を、形態素解析ソフトを使用し、意味を持つ最小の単語に分解、助詞などを除外し、品詞で分類した。今回の分析では、この品詞ごとの分析に加え、自由記述回答自体も分析の対象に加えることとする。分解後の回答結果は、使用頻度が高いものから分析対象にし、低いものは対象外とする。

回答傾向は次のようなものがあげられる。

・「恋愛、部活動、失敗、成功」といったような単語で答えているもの
・「当時の思い出から、見たくない部分をぬきだし、残ったきれいな部分の記憶」といったように、概念として語るもの
・「部活動や恋愛に打ち込むこと」のように、行動によって得られるものだとするもの
・「楽しい、自由な、夢、希望」といったプラスイメージと「悩む、クソ、恥ずかしさ」のようなマイナスイメージ
・「高校のころ、13～18 歳のとき」といった時系列で表現

4.2 仮説 1 の分析

まずは単純に、女子と男子がいくつの語句を使用して青春を表現しているかに注目してみた。分解語の単語の数を比較すると、女子は 289 の言葉を使用し、男子は 255 の言葉を使用している。女子の方が若干数多いが、これだけでは女子の方が青春のイメージにばらつきがあるとは言えない。

そこで次に上位 5 つまでの語を比較してみた。この際、男子で一番多く見られた「青春」という語は「〇〇は青春だ」という定義つけの形で用いた語であるので、上位 6 つまでを比較対象にした。

表 1　男子の頻度順語句上位 6 つ

	女子	男子
※青春	6	13
時期	12	8
自分	10	8
友達	12	7
恋愛	8	7
部活	13	6

表 2　女子の頻度順語句上位 5 つ

	女子	男子
部活	13	6
時期	12	8
友達	12	7
自分	10	8
恋愛	8	7

この結果を見てみると、男子よりも女子の方が使用している語句が上位 5 つに固まり、男子の方が散らばっている。

また、青春を語る際に、少年・少女漫画やドラマ、映画を用いる人も少なからず見られた。その数は男子 2 名が『スクールランブル』(小林尽、2002-2008、講談社)、『君に届け』（椎名軽穂、2005-現在、集英社）という漫画をあげた。それに対して、女子は『オレンジデイズ』、『ルーキーズ』(原作:森田まさのり 1998-2003、集英社　テレビドラマ:平川雄一朗監督、2008、TBS)、『ウォーターボーイズ』(矢口史靖監督、2001）といった漫画、映画を 4 名があげた。ちなみに、以上の物語は『オレンジデイズ』以外全て高校生の物語であり、青春時代＝高校時代である過去、という考え方はここでも見受けられた。

以上の結果から、仮説は誤りであり、女子の方が定型的なイメージを持つということが分かった。

4.3　仮説 2 の分析

次に仮説 2 について分析する。こちらは語りに使用された名詞に注目する。「友達」や「恋愛」といった人間関係に関する名詞と、「部活」、「勉強」といった競争精神に関する名詞に分けて考えた。また、競争精神に関わるものには多く使われている、「一生懸命」や「熱中」という言葉も含めることにした。

表 3　人間関係に関わる名詞

	女子	男子
友達	12	7
恋愛	8	7
恋	6	6
友人	4	4

表 4　競争精神に関わる名詞

	女子	男子
部活	13	6
一生懸命	7	1
勉強	5	3
サークル	4	1
熱中	3	2

結果は仮説通り、男子よりも女子の方が人間関係に関することを、青春を語る材料にすることが多い事が分かった。しかしながら、競争精神に関わる語句も女子の方が多く使用していることも明確になった。

また、前述の青春を語るために使用された漫画や映画に注目すると、男子が挙げた『スクールランブル』と『君に届け』はどちらも高校を舞台にした恋愛ものである。また、女子が挙げた『ウォーターボーイズ』と『ルーキーズ』は熱血部活動ものであった。

4.4　青春の肯定表現と否定表現

青春真っ只中といわれる大学生たちであるが、青春に対するイメージは肯定的であるのか、否定的であるのか。品詞に分解したデータを比較すると非常に興味深いデータが得られた。まず、「楽しい」という言葉に注目してみる。まず、男女で比較すると女子 18 名がこの言葉を使用したことに対し、男子は女子の半分である 9 名のみであった。「笑う」という語に関しても女子 3 名のみであった。それに対して男子 2 名が「幻想」という言葉を使用している。

また、自由記述そのもののデータでも、「そんなものは存在しない」、「青春は幻想であり素晴らしい青春を送ったものが過剰に賛美し礼賛するものであってこの世の全ての人間が青春を楽しめるわけではない」、「クソみたいなもの。青春だからという理由で若者が何かをやってもいいと思いすぎている。そのうち売春も青春のうちになるんじゃないのか」などと、青春自体を否定する意見は男子のみに見られた。

次に、学年ごとの結果を見てみると、「楽しい」という言葉を用いた 1 年生は 12 名、2 年生は 11 名いたのに対し、3 年生は 4 名と、減少していく傾向があるようである。「楽しむ」という語に関しても同様で、1 年生・2 年生どちらも 4 名ずつなのに対し、3 年生は 2 名のみという結果だった。

4.5　「なる」青春と「する」青春

もう一つ、興味深いデータは「する」という語と「なる」という語である。まず、男女別で見てみると、男女共に一番多く使用された「する」という言葉を使った女子は 45 名であるのに対し、男子は 23 名だった。同義語である「やる」も、女子が 9 名で、男子は 4 名だった。逆に、「なる」という言葉を使ったのは男子の方が多く 9 名おり、女子は 6 名だった。こちらを学年別に見てみると 1 年生 10 名だったのに対し、2 年生 2 名、3 年生 3 名という結果だった。

5. 考察

仮説 1 の分析の結果、仮説は誤りであり、女子の方が男子よりも定型的なイメージを持っているということが分かった。これは、前述ではあるが、漫画や映画などといったメディアの力も大きいのではないかと考えられる。少女漫画では、青春に関する記述が多く見られ、幼い頃からそれに触れてきた女子たちは、青春に対して似たようなイメージを抱き語るのではないだろうか。更にその状況を実生活と照らし合わせ、自らの生活の中に青春を見つけ出す。それに対して男子は、自らの実生活の中から青春を探すというよりむしろ、概念的に語る者が多く、一番多く用いられた語に「青春」という言葉が出現し、青春を青春で語る結果となったのだろう。

仮説 2 では、女子が恋愛や友人など人間関係に関わる語句を、青春の語りに用いるという結果を得る事ができた。しかし、競争精神に関わる語句に関しても、男子よりも女子の方が用いる頻度が多かった。また、青春を語るのに用いられた漫画や映画は、男子が挙げたものはどちらも恋愛ものであり、女子が挙げたものの中にも、熱血的な部活動ものもあった。そのため、仮説 2 は、必ずしも正しいとは言えない結果となった。これは、仮説 1 の考察でも述べたように、女子の方が青春のイメージが現実的であり、実生活とリンクする内容から青春を見出だすことが多い。更に、先行研究でもあったように、女子の方が毎日に充実感を感じており、それに関する悩みも多く抱えている。そのため、必ずしもプラスのみのイメージではない青春の語りが、このような現実感溢れる言葉を材料にしてなされることが多くなるのだろう。しかしながら、男子には青春＝自分一人で何かをするという記述が多く、それに対して女子は仲間や他人との関わり合いを青春とする記述が多く見られたのは確かである。

青春の肯定意見、否定意見に関して、男子の方が圧倒的に、否定意見が多かったことには驚いた。女子の方が実生活と関係する内容で青春を語る分、男子よりも苦々しいイメージも孕んでいるのではないかと考えたからである。もしかすると、女子はただ、夢見がちの少女漫画世界から抜け出せずにいるという考え方も出来るのかもしれない。あるいは、男子の方がふざけた意見もいくつか見られることから、今も尚、青春時代真っ只中であり、それを語るには少々恥ずかしいという感情を抱いているとも考えられるだろう。いずれにせよ、女子の方が青春を語るために「する」という語句を使い「楽しい」青春に積極的で

あるようである。それに対して男子は青春を自然と「なる」ものだと考え、いつまでも待ちぼうけしているために、なかなか、青春を謳歌し辛いのかもしれない。

学年別に見ていくと、学年があがるにつれて青春＝楽しいというイメージを抱く人が減っていく傾向が見られた。これから大学生活を楽しもうとしている 1・2 年生に対し、酸いも甘いも知り、超氷河期といわれる就職活動を目前に控えた大学 3 年生では、青春を楽しもうという気も起こらないのであろうか。しかし、学年が上がるにつれ、青春は「なる」ものではなく「する」ものだという考えが多くなり、3 年生の積極的な行動力も垣間みることが出来る。そして、このデータから推測できることは、大学生の多くが「青春は既に過ぎてしまったもの」と考えているが、実は今も尚その渦中であり、その中で必死にもがいているようにも思えるのである。

結果としては、青春というものはあくまで過去の時間というイメージが強く、過ぎてから気がつくものという感じである。嫌でも関わらなければならないクラスメイトという仲間がいたり、多くの規則により目の前に乗り越えたい困難が多く立ちはだかったりする高校生時代までは、毎日の生活が常に一生懸命であり、だからこそキラキラと輝いていたのかもしれない。しかしながら、大学生であっても、部活動やサークルなどの多くの仲間に囲まれて、毎日を充実させている者には、リアルタイムに青春を感じることもできているようだ。我々大学生の中に、理想的な「青春」を取り戻すには、何事も全力投球で行い、周りの仲間達や社会とのつながりを大切にすることによって、辛く苦しくても生活の充実感を得ることが一番の近道なのだろう。しかし、生活も規則も自由であり、一生懸命がかっこ悪い、コミュニケーション力が乏しいと言われる現代の大学生には、青春を感じることは大変難しいことなのかもしれない。

今回の研究では、自由回答 1 つという質問形式だったため、あくまでその結果をそのまま受け取るしか方法がなかった。調査内容も少なく、調査結果として「青春とは何か」という明確な事柄を見つけ出す事も曖昧なまま終わってしまった。例えば部活動やサークルの参加や、将来の夢の有無、恋愛状況など、その人の現在の生活状況やパーソナリティと併せて分析をすると、より多くのデータが得られ、考察も広がったかもしれない。また、同じ自由回答を求める質問でも、問いかけ方を変えるだけでどのような変化が得られるか、研究にはどんな聞き方をするのが最も適切であるかも同時に考えることができればよかったと思う。今後、青春を研究する際、同じテキスト・マイニングの手法を使用するのであれば、青春から連想される曲を調査し、その歌詞から青春の重要なエッセンスを抽出する方法も用いてみたい。

文献

石田淳，2009,「人はどのような言葉で幸福を語るのか？：幸福理由のテキスト・マイニング」『社会学部紀要』107: 241-248.

中澤潤，杉本直子，中道圭人，2006,「イメージ画に見られる学生の発達、成長、成熟の概念の違い」『千葉大学教育学部研究紀要』54: 159-165.

雲野加代子，2006,「漫画におけるジェンダーについての考察：恋愛と武闘」『大阪明浄大学紀要』6: 77-85.

渡部真，2003,「生活と意識の変化」，武内清編『キャンパスライフの今』玉川大学出版部，133-151.

第 6 章　大学生の金銭意識

1. はじめに

キャンパスライフという観点から、大学生になると自由な時間が増え娯楽や趣味を存分に楽しむ学生が増えると考えた。その為にはお金というものが必要になり、これまでお小遣いを貰っていた人も大学生になると、バイトをしてお金を稼ぐ人が多いのではないかと思う。一方では、世界では経済不況が続いている。日本では年金の問題や震災の影響もあるが就職難と言われていて、これから就職活動をする大学生は、これまで以上に金銭に関する問題が目につくのではないかとも思う。

お金を稼ぐ機会が増え収入が増え、支出も増える事や、世間の経済状況や家庭内の経済状況を知ることにより金銭に対する意識が変化し、それと同時に親の存在や気持ちも変化していくのではないだろうか。

そこで私は大学生がキャンパスライフを送る中で、親に対して自分自身への負担金を「申し訳ない」あるいは「ありがたい」など、親が援助してくれることをどのように感じているのか。また、金銭に対してどのように意識しているのか疑問に思い調べることにした。

2. 先行研究

親に対しての経済的負担を大学生はどのように意識しているか、という疑問を調査していくために、関連のある文献でどのような研究が行われているか。先行研究 1 として「青年期における母親に対する感謝の心理分析」、先行研究 2 として「大学生の親子関係と経済意識に関する日中比較」の文献を用いた。

「青年期における母親に対する感謝の心理分析」では青年期といわれる、宮崎県内の市立中学学校の中学生 147 名、宮崎県内農業高校の高校生 197 名、茨城県内の国公立大学の大学生 241 名を対象とし、「大学生の親子関係と経済意識に関する日中比較」は、日本人大学生 158 名と中国人大学生 143 名を対象としていた。どちらの先行研究とも、大学生を含む研究である。「青年期における母親に対する感謝の心理分析」では青年期における母親に感謝しているときに感じる気持ちと、母親に感謝しているときに感じる気持ちを、自分が苦労しているのは母親のせいだと感じる気持ちを合せ、青年期における母親に対する感謝の心理状態を目的としている。一方、「大学生の親子関係と経済意識に関する日中比較」では、子どもが現代の消費社会に見合った経済意識を身に付つけていくために、日本及び中国における親子関係のあり方、さらには金銭管理意識等も含めた経済意識の育成に関して日中両国の傾向を目的としている。「青年期における母親に対する感謝の心理分析」は母親が援助してくれて嬉しい、産み育ててくれてありがたい、今の生活をしていられるのは母親のおかげだと感じる中で、自分が苦労しているのは母親のせいだと感じる傾向が見られ

る要求的な心理状態から、母親に負担をかけてしまってすまないと感じる自責的な心理状態が現れ、落ち着いて安定した充足的な心理状態が現れると母親との人間対人間の対等な関係が始まるといえると学校段階の特徴を踏まえて結論を導いている(池田 2006: 494-495)。「大学生の親子関係と経済意識に関する日中比較」は親と話すことが好きであったり、親の経済状況を知っていたりする学生は、学生本人のお金の計画的使用意識は高くなっていることが挙げられ、一方的でない親とのコミュニケーションが、子供の金銭管理意識等適切な経済意識の育成に影響を与えているということとして結論を導いている(尾島・王 2007: 74-75)。

3. 仮説

大学生の金銭意識について、以下の仮説が成り立つ。

第 1 の仮説は、「青年期における母親に対する感謝の心理分析」から、青年期は親からの自立を模索し、親子関係が大きく変化する時期である。高校生の時期には、母親に負担をかけてしまってすまないと感じることが、他の学校段階と比較して特徴的であった。母親から自立したいけれどまだ自立する自信が持つことができなかったり、実際に母親に負担をかけてしまったりして、母親に負い目を感じることが多いと考えられる。また、中学生の頃の反抗期を経て、母親から支えられてきた自分に気づき、母親にすまないけれどもありがたいと感じるようになったのではないかとも考えられる。そして、大学生の時期になると、自分が苦労しているのは母親のせいだと感じる気持ちと、負担をかけてしまってすまないと感じる気持ちは少なくなり、援助してくれて嬉しいと感じる気持ちがおおきくなる。落ち着いて安定してくることから、自分自信と母親を人間対人間の対等な関係であり、母親と新しい親密な関係を築いていると考えられる。このことから、「親子関係が親密なほどありがたいと思う」「親子関係が親密なほど感謝すべきと思う」「親子関係が親密なほど恩返しすべきと思う」という仮説が導き出される。

第 2 の仮説は、「大学生の親子関係と経済意識に関する日中比較」から、親子のコミュニケーションは、学生のお金の計画的な使用意識に影響していると考えられ、親がお金のことを子供に厳しく言うことで子供もお金に対して関心をもち、金銭管理の重要性を身に付けていくことができ、また親の経済的状況を知っているものは、日頃から家計の問題や経済的な話題について関心をもち、普段から計画的にお金を使用したいという意識が高くなるのではないだろうか。すなわち、コミュニケーションを互いにとれていれば、自信の家庭経済状況を把握でき、使用意識が高まることから、「親子関係が親密なほど金銭管理ができている」という仮説が導き出される。

4. 分析結果

4.1 親子関係の親密さの分類

仮説 1 の従属変数となる親子関係の親密さは「両親(父親または母親)とは通常どのくらい

の頻度で会話しますか」「両親(父親または母親)と世間話、1 日の出来事などどのくらい会話しますか」「両親(父親または母親)に悩み事や困ったときどのくらい相談しますか」という 3 つの問いに対するそれぞれの回答を、「ほぼ毎日」「週に 3 日程度」を 1 に「週 1 回程度」「2 週間に 1 回程度」を 2 に、「ほぼ毎日する」「たまにする」を 1 に「あまりしない」「まったくしない」を 2 に、「週 1 回程度」「月 1 回程度」を 1 に「年に 1 回程度」「全くしない」を 2 と会話頻度の多い回答と会話頻度が少ない回答の 2 つに分けた。

4.2　ありがたさの測定と分布

仮説 1 の独立変数となるありがたさは「親からの経済的な援助をもらっている人は感謝した方がよい」「親は子供が大学を出るまで経済的な援助をした方がよい」「親から経済的援助を受けた場合、子供は将来、親への恩返しをするべきだ」という 3 つの問いの回答を、1 つずつ分析する。表 1、表 2、表 3 は仮説 1 の調査におけるありがたさの分布である。

4.3　お金の几帳面度の測定

仮説 2 の従属変数となるお金の几帳面度は「毎日家計簿(お小遣い帳)をつけている」「予定外の出費というものがあまりない」「衝動買いはしない」「親や友人からお金を借りることはあまりない」という 4 つの問いの回答を、値が高くなるほど几帳面であるとなるように変換したうえで合算した。

独立変数となる親子関係の親密さは「4.1　親子関係の親密さの分類」とし、グループごとの平均を測定した。表 5、表 6、表 7 は仮説 2 の調査における分布である。

4.4　仮説の検定

以上のような従属変数と独立変数の関連について、「3. 仮説」で述べた 4 つの仮説それぞれについて分析を行なった。

仮説 1「親子関係が親密なほどありがたいと思う」「親子関係が親密なほど感謝すべきと思う」「親子関係が親密なほど恩返しすべきと思う」

表 1　親からの経済的な援助をもらっている人は感謝した方がよい

	度数	パーセント
そう思う	222	88.4
ややそう思う	24	9.6
あまりそう思わない	2	0.8
そう思わない	3	1.2
合計	251	100.0

表 2　親は子供が大学を出るまで経済的な援助をした方がよい

	度数	パーセント
そう思う	61	24.3
ややそう思う	126	50.2
あまりそう思わない	49	19.5
そう思わない	15	6.0
合計	251	100.0

表 3　親から経済的援助を受けた場合、子供は将来、親への恩返しをするべきだ

	度数	パーセント
そう思う	167	66.5
ややそう思う	73	29.1
あまりそう思わない	5	2.0
そう思わない	5	2.0
合計	251	100.0

表 1、表 2、表 3 の結果から「そう思う」「ややそう思う」と回答している人がほとんどであり、「あまりそう思わない」「そう思わない」と回答している人はほとんどいない。よって、「親子関係が親密なほど感謝すべきと思う」「親子関係が親密なほど恩返しすべきと思う」という仮説は実証される。表 1 親からの経済的な援助をもらっている人は感謝した方がよいと表 3 親から経済的援助を受けた場合、子供は将来、親への恩返しをするべきだという結果に比べ、表 2 親は子供が大学を出るまで経済的な援助をした方がよいという結果は「そう思う」と回答した人より「ややそう思う」と回答した人が上回り、「あまりそう思わない」「そう思わない」と回答した人は少し多いというようなバラツキが見られる。そのため、表 2 親は子供が大学を出るまで経済的な援助をした方がよいの測定結果を親子関係の親密さとクロス集計をして測定を行った。表 4 はクロス集計の結果である。

表 4 の結果から、「両親との日常会話」の頻度が多い人ほど「そう思う」「ややそう思う」と回答している人が多い。だが、「あまりそう思わない」「そう思わない」と回答している人も「両親との日常会話」の頻度が少ない人よりも上回っている。同様に、「両親との世間話」をする頻度が高い人ほど「そう思う」「ややそう思う」と回答している人が多いが、「あまりそう思わない」「そう思わない」と回答している人も多い。しかし、「両親に相談」をする頻度が多い人は「両親に相談」をする頻度が少ない人に比べると、「そう思う」「ややそう思う」「あまりそう思わない」「そう思わない」の回答している人は少ないという結果が得られた。

表 4　親は子供が大学を出るまで経済的な援助をした方がよい
×親子関係の親密さのクロス集計

親子関係の親密さ　会話頻度						
		ありがたさ				
		そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思わない	合計
両親との通常会話	1	53	105	41	9	208
		86.9%	83.3%	85.4%	60.0%	83.2%
	2	8	21	7	6	42
		13.1%	16.7%	14.6%	40.0%	16.8%
両親との世間話	1	32	75	29	10	146
		52.5%	59.5%	59.2%	66.7%	58.2%
	2	29	51	20	5	105
		47.5%	40.5%	40.8%	33.3%	41.8%
両親に相談	1	25	41	18	4	88
		41.0%	32.5%	36.7%	26.7%	35.1%
	2	36	85	31	11	163
		59.0%	32.5%	63.3%	73.3%	64.9%

仮説 2　親子関係が親密なほど金銭管理が出来ている

表 5、表 6、表 7 の結果から、両親との会話頻度が多い人よりも両親との会話頻度が少ない人の方が平均値は高い。しかし、両親との会話頻度が多い人も少ない人もあまり大きな差ではないという結果が得られた。

表 5　両親との日常会話×お金に几帳面得点のクロス集計

		平均値	度数
会話頻度	1	3.91	206
	2	4.43	42
合計		4.00	248

表 6　両親との世間話×お金に几帳面得点のクロス集計

		平均値	度数
会話頻度	1	3.92	145
	2	4.13	104
合計		4.01	249

表 7　両親に相談×お金に几帳面得点クロス集計

		平均値	度数
会話頻度	1	3.87	87
	2	4.09	162
合計		4.01	249

4.4　負担金によるありがたさの違い

現在大学に関する経済的な援助(学費、生活費、サークル・部活、娯楽に関する費用を含む)の負担額の違いで、両親に対するありがたさが変化するのかを分析する。従属変数を費用負担額とし、独立変数のありがたさは「親からの経済的な援助をもらっている人は感謝した方がよい」「親は子供が大学を出るまで経済的な援助をした方がよい」「親から経済的援助を受けた場合、子供は将来、親への恩返しをするべきだ」という 3 つの問いとして測定をした。表 8、表 9、表 10 は、補足の調査における分布である。

表 8　費用負担×経済的援助に感謝のクロス集計

	そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思わない	合計
全額負担	30	8	1	0	39
	76.9%	20.5%	2.6%	.0%	100.0%
3 分の 2 程度	130	12	0	1	143
	90.9%	8.4%	.0%	.7%	100.0%
3 分の 1 程度	33	3	0	0	36
	91.7%	8.3%	.0%	.0%	100.0%
ほとんど負担なし	29	1	1	2	33
	87.9%	3.0%	3.0%	6.1%	100.0%
合計	222	24	2	3	251
	88.4%	9.6%	.8%	1.2%	100.0%

表 8 の結果から、「そう思う」と回答した人が全体の 80%を占めている。このことから現在、負担してもらっている金額の差と親に対するありがたさには関連がなく、負担金額によってありがたさ度合いは変わらないということがわかる。

表 9　費用負担×大学を出るまで経済的援助のクロス集計

	そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思わない	合計
全額負担	11	22	4	2	39
	28.2%	56.4%	10.3%	5.1%	100.0%
3 分の 2 程度	38	76	26	3	143
	26.6%	53.1%	18.2%	2.1%	100.0%
3 分の 1 程度	6	16	10	4	36
	16.7%	44.4%	27.8%	11.1%	100.0%
ほとんど負担なし	6	12	9	6	33
	18.2%	36.4%	27.3%	18.2%	100.0%
合計	61	126	49	15	251
	24.3%	50.2%	19.5%	6.0%	100.0%

表 9 の結果から、親は大学を出るまで経済的援助をすべきだと回答している人が多く見られ、さらに「ほとんど負担なし」の人も「ややそう思う」と回答している人が多い。このことから、現在負担してもらっている金額の差と親が経済的援助をすべきと思うことには関連がなく、負担金額によって親が子供に経済的援助を与える度合いは変わらないことがわかる。

表 10 の結果から、「そう思う」と回答した人が全体の 66.5%、「ややそう思う」と回答した人が全体の 29.1%であり、費用負担金額関係なく約 90%の人が将来恩返しすべきと回答している。このことから、現在負担してもらっている金額が多くても少なくても、ほぼ全員の大学生は親に将来恩返しをすべきだと感じていることがわかる。

表 10　費用負担×将来恩返しするべきのクロス集計

	そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思わない	合計
全額負担	24	12	1	1	39
	61.5%	30.8%	2.6%	2.6%	100.0%
3 分の 2 程度	96	43	3	1	143
	67.1%	30.1%	2.1%	.7%	100.0%
3 分の 1 程度	28	7	0	1	36
	77.8%	19.4%	.0%	2.8%	100.0%
ほとんど負担なし	19	11	1	2	33
	57.6%	33.3%	3.0%	6.1%	100.0%
合計	167	73	5	5	251
	66.5%	29.1%	2.0%	2.0%	100.0%

5. 考察

本稿では、大学生がキャンパスライフを送る中で、親に対して自分自身への負担金を「申し訳ない」あるいは「ありがたい」など、どのように感じているのか。また、金銭に対してどのように意識しているのかを目的として、親子関係の親密さと両親へのありがたさと、親子関係の親密さと大学生の金銭管理の関連を分析した。分析にあたって、先行研究より仮説 1「親子関係が親密なほどありがたいと思う」「親子関係が親密なほど感謝すべきと思う」「親子関係が親密なほど恩返しすべきと思う」と仮説 2「親子関係が親密なほど金銭管理ができる」という仮説を構成した。

仮説 1 では、表 1、表 2、表 3 表 4 の結果から「両親と日常会話」「両親と世間話」の会話頻度が多い人ほど「そう思う」「ややそう思う」と回答しているが、「あまりそう思わない」「そう思わない」と回答している人も会話頻度は多い。そして「両親に相談」の会話頻度が少ない人ほど「そう思う」「ややそう思う」と回答しているが、「あまりそう思わない」「そう思わない」と回答している人も会話頻度は少ない。悩み事の相談となると全体的に両親との会話頻度が少なくなるということから、悩み事は親に相談するよりも日常を共に過ごすことの多い友人に相談する人が多いのではないだろうか。そして、日常会話や世間話となると会話頻度が多い人にも少ない人にも両親に対してありがたいと思っていることから、「親子関係が親密なほどありがたいと思う」という仮説は間違いであるという結果となる。ありがたいと思っている人もありがたいと思っていない人も親子関係は親密であり、両親へのありがたさの気持ちは産み育ててくれている以上どのような関係であっても感謝する人が多いということではないだろうか。

仮説 2 では、表 5、表 6、表 7 の結果から 3 つとも両親の会話頻度が少ない人の方が平均

値を上回っていた。だが、グループ得点の会話頻度の多い 1 と会話頻度の少ない 2 を見てみると、最大点数が 12 点であるのにも関わらず 3 点と 4 点というあまり差がなく、全体的にも低い得点であり、お金に几帳面であるとは言えないのではないだろうか。このことから、親子関係の親密さと金銭管理ができているということは関連せず、「親子関係が親密なほど金銭管理ができる」という仮説は間違いであるという結果となる。今後このような調査を行う場合は、会話頻度で親子関係の測定する点に注意する必要がある。

文献

池田幸恭，2006,「青年期における母親に対する感謝の心理分析」『教育心理学研究』54:487-497.

尾島恭子・王彩霞，2007,「大学生の親子関係と経済意識に関する日中の比較」『金沢大学教育学部紀要　人文・社会科学編』56:67-75.

第 7 章　大学生の職種選択に与える影響

1. はじめに

多くの大学生にとって就職活動というのは、キャンパスライフにおける一番の大きな壁だろう。そしてそれはキャンパスライフを通しての自身の成長の終着点であり、社会人として生きていく新たなスタート地点でもあるといえる。しかし、大学へ進学すれば安定した職業に就くことができる、こういわれていた時代とは大きく異なっているのが現状だ。昨年の大学卒の就職内定率[1]は 59.9%[2]と、依然就職氷河期が続いている。こうも内定率が低迷していると、「もう大人だから」と子供に任せきりで黙って見ていられる親は多くないだろう。就職サイトや新聞でも、“親子で取り組む就活”という特集をしていたりもする。親子で取り組むことが果たして本当に効果的であるかはわからないが、少なからず何かしら親からの影響を受けていることは事実であろう。過去の研究でも、親の影響には様々な要因があることがわかっている。大学生の時期は、親から精神的に自立していく時期であり、育ってきた家庭環境を客観視できるようになる時期でもある（佐山 2009）。それならば、親とのコミュニケーションや親の養育態度、親の職業の性質などについてふと考えることもあるだろう。もちろん無意識のうちにということもある。そこで本稿では、大学生の職種選択において、親の職業がどの程度影響を与えるのかということを、職業継承率を測定することによって明らかにしていくことにする。

2. 先行研究

A「東北大学における学部学生のキャリア意識(1)」

B「父親の職業が息子の職業に及ぼす影響に関する研究」

「親の職業は、子どもの職業選択にどの程度影響するのか」というリサーチクエスションを明らかにするにあたり、過去にどのような研究がなされていたのかについて比較しながら見ていく。2008 年に東北大学において大学 1 年生から 4 年生を対象に調査された先行研究 A では、学生が職業選択をする際に学部による相違に注目している。それに対し、先行研究 B では、学生が職業選択をするにあたって、その両親の存在がどのような影響をもたらしているのかに注目している。また先行研究 B では、職業選択の際の出生順位（兄弟関係）による相違は見られるのかについての調査も行っている。

調査を行うにあたり先行研究 A では、学生の現在の希望職種と、それを希望するに至っ

---

[1] 就職を希望している人のうち、どれだけの人数が就職したか（または、内定をもらえたか）という割合。

[2] 厚生労働省、平成 24 年 3 月に大学を卒業する学生の就職状況などを文部科学省との共同調査。調査対象は、全国の大学、短期大学、高等専門学校、専修学校の中から、設置者や地域などを考慮して抽出した 112 校、6,250 人。

た影響要因について質問を行っている。また先行研究 B では、本人の希望職種だけでなく、父母の職業や父母の期待職業とその理由などについても質問を行っている。質問項目における職業分類については、先行研究 A は「研究職」、「研究職以外の専門技術職」、「管理職」「事務職」、「営業販売職」、「サービス職」、「保安職」、「農林漁業職」、「運輸通信職」、「生産労働職」、「その他」、「未定」の 12 項目に分けられた。先行研究 B では、「専門的・技術的職業」、「管理的職業」、「事務的職業」、「販売的職業」、「運輸・通信の職業」、「技能工・生産工程の職業」、「サービス的職業」、「保安的職業」、「農業・林業・漁業」「その他」の 10 項目に分けられており、先行研究 A とほぼ同じような分類になったが、今回の私の調査では、こちらの 10 項目の分類によって調査を行っている。

結果として、学部による職業選択への意識の違いに注目した先行研究 A では、「事務職」、「営業販売職」、「サービス職」、「未定」の項目において学部間での偏りがみられた。特に注目したいのが、「未定」を選択した学生の学部による偏りである。文学部、教育学部、工学部においてその割合が有意に高く、理学部において有意に低い。さらに、職業選択の上で影響を受けた要因として、理系学部全般で文系学部よりも「大学の先生」や「大学の授業」と回答する割合が高い。また、医学部および歯学部においては、入学時点で将来の職業がほかの学部と比べて限定されており、現在何をするべきかという見通しが立てやすく、専攻と職業との関連性は高いと分析している。このことから、理系学部の方が文系学部よりも職業設定が明確になりやすいと考えられる。

そして、両親の職業出生順位による職業選択への意識の違いに注目した先行研究 B では、父親の職業に対する息子の継承希望は、銀行員を除くすべての職業において有意に高いことがわかった。中でも高い継承希望（15%以上）を示すのは、<専門的・技術的職業>の 4 職業—工場技師、土木・建築技師、小・中・高校教師、医者・獣・歯科医)と公務員である。また出生順位に関しては、いずれの職業についても、出生順位による差が認められなかった。職業継承性における出生順位の影響は、いまや消失しつつある（小川 1997）と考察している。

3. 仮説

先行研究 A では、学部別の希望職種において<未定>を選択する学生は学部により偏りがあることがわかった。「文学部、教育学部、工学部においてその割合が有意に高く、理学部において有意に低い」ということから、理系の学部に進もうという学生は、入学時点もしくは高校での文理選択の際にはすでにある程度自分の進む方向について考えていたのではないだろうか。そうだとすれば、高校生である時の方が大学生になる前よりも親の影響というのは受けやすいのではないだろうか。しかし、職業選択の上で影響を受けた要因として、理系学部全般で文系学部よりも「大学の先生」や「大学の授業」と回答する割合が高かったことも踏まえると、一概にそうだとも言い切れない。職業選択の上での最終的な影響要因としては、大学での情報が多いのかもしれないが、その根底には親の姿を見ていて、

ということも考えられるのではないだろうか。そこで、次のような仮説を立てた。

仮説 1　職業選択の際に、理系学部に所属する学生の方が文系学部に所属する学生よりも、より強く両親の職業に影響を受けやすい。

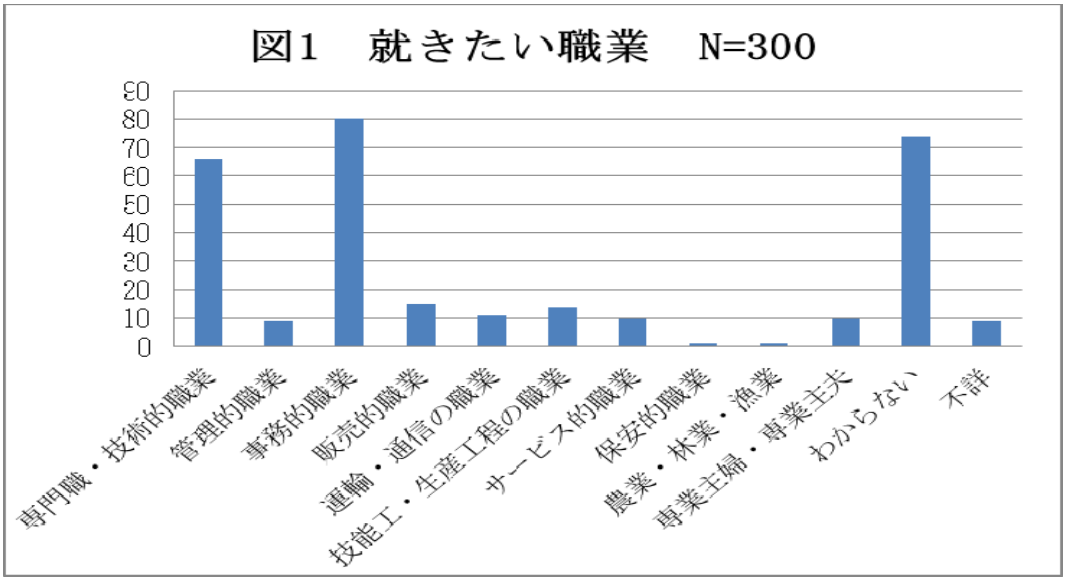
また先行研究 B の考察では、息子の継承希望には出生順位による相違がまったく認められなかったとあるが、果たして本当にそう言い切れるのか。息子の年齢や文理別、性別で分類し、比較しても同じことが言えるのであろうか。そこで本稿では次のような仮説を立てた。

仮説 2　職業選択の際に、出生順位によって両親の職業に影響を受ける度合いは異なる。非長子に比べ、長子の方が影響を受けやすい。

4. 分析結果

4.1　従属変数

いずれの仮説においても、従属変数は学生が現在就きたいと希望している職業である。調査票では問 33 において、現在自分が就きたいと思っている職業について択一形式で回答する形をとった。選択項目は、先行研究 B を参考にして次の図 1 のように専門職・技術的職業を始め、1～11 の項目に分けた。

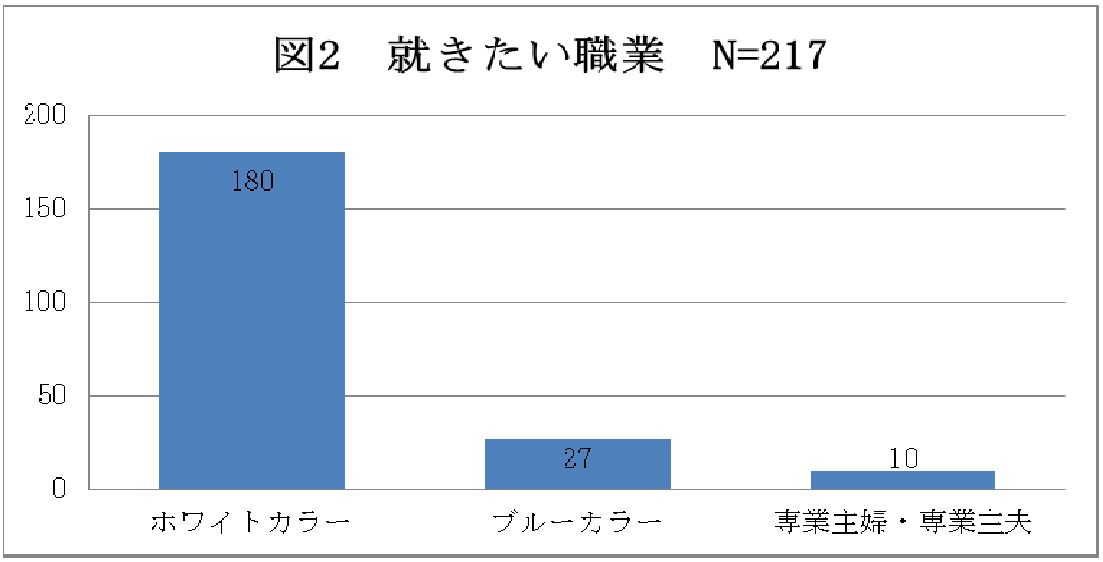


このうち<専門的・技術的職業>と<事務的職業>、<わからない>の 3 項目については 60 人を超え、圧倒的な数を占めていた。一方で<保安的職業>、<農業・林業・漁業>の 2 項目については最も少なく、各 1 人ずつであった。

表1　学部・学年別<わからない>の分布

学年	学部	わからない	全体に対する割合
1	文学部	31	31.6%
	理学部	10	21.7%
2	文学部	23	28.0%
	理学部	0	0.0%
3	文学部	10	14.0%
	理学部	0	0.0%

図1において<わからない>を選択した学生の学年別・学部別の分布は表1のようになった。主には1年生が多く、両学部合わせて全体の50%を占めている。また、理学部に関して<わからない>を選択した人は0人であった。文学部に関して<わからない>を選択した人は、学年が上がるにつれて少なくなっていた。

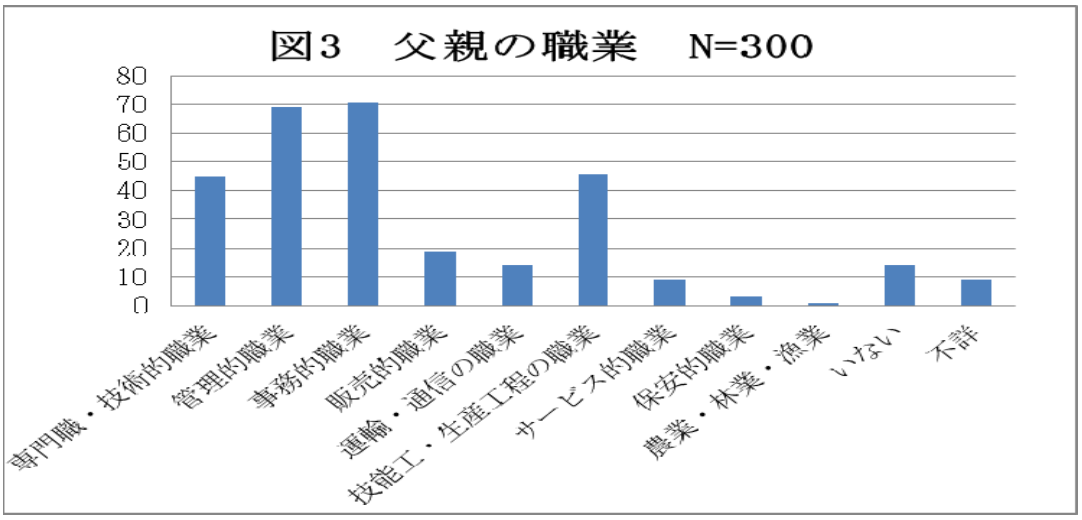


仮説の検証にあたって、これら学生の希望する職業と彼らの両親の職業を分析するには、分類数が多くなってしまうため、11 職種をさらに分類し直した。<専門職・技術的職業><管理的職業><事務的職業><販売的職業><サービス的職業>を「ホワイトカラー」に、<運輸・通信の職業><技能工・生産工程の職業><保安的職業><農業・林業・漁業>を「ブルーカラー」に、<専業主婦・主夫>を「専業主婦・主夫」に分類し直し、<わからない><不詳>は除外した。その結果、「ホワイトカラー」が180人を超え、圧倒的に多かった。

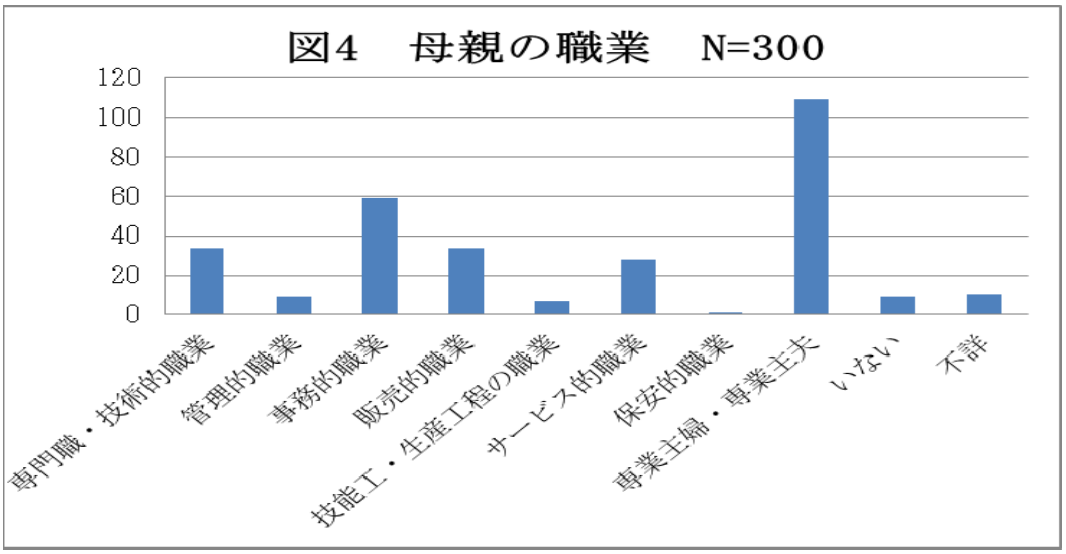
4.2　独立変数

次に独立変数としては、父親と母親それぞれの職業を従属変数の項目と同様に、専門職・技術的職業を始め、1～11の項目に分けた択一形式で尋ねた。また、両親が複数の仕事に就

いている場合や、転職をしていた場合を想定し、就業期間が最も長い(かった)ものについて選択してもらうよう記載した。また、それぞれについて従属変数と同様に、職種 11 項目をその性質に基づき「ホワイトカラー」「ブルーカラー」「専業主婦・主夫」に分類し直し、<わからない><不詳>は除外した。



父親の職業については、<管理的職業>と<事務的職業>が 50 人を超えており、次いで<専門的・技術的職業><技能工・生産工程の職業>が 40 人を超えている。一方で<保安的職業>、<農業・林業・漁業>は 5 人以下と、学生の就きたい職業と同様に非常に少なかった。



母親の職業については、<専業主婦>が 100 人を超えており、他に比べ圧倒的に多かった。次いで<事務的職業>、<販売的職業>、<専門的・技術的職業>が 30 人を超えていた。

4.3　仮説 1:学部別による親の職業の影響度合いについて

調査段階では性別についての分類は行わない予定であったが、仮説 1 の学部別による検証をするにあたり、理系学部の女子学生の割合が非常に少なかったため、仮説 1 では男子学生についてのみの検証とする。また、職業継承率による測定において、その計算式は次に示す通りである。

〔父親の職と学生の希望職とが一致している数の合計÷学生の合計数〕

これをホワイトカラー、ブルーカラー、専業主婦(母×娘のみ)において計算し、その値の合計を職業継承率とする。

例：父親がホワイトカラーの職に就いていて、学生本人の希望職もホワイトカラーである人数は 46。学生の合計数は 66。よって 46÷66=0.6969...　≒0.70

下の表 1、表 2 では父親の職業と学部別学生本人の希望する職業とのクロス集計を行ったものである。

表2　　文学部男子　父親×本人　職業クロス表

		子供の希望職		
		ホワイトカラー	ブルーカラー	専業主婦・専業主夫
父職	ホワイトカラー	46	7	2
		83.6%	12.7%	3.6%
	ブルーカラー	9	2	0
		81.8%	18.2%	.0%

職業継承率
72.7%

表3　　理学部男子　父×本人　職業クロス表

		仕事　子供		
		ホワイトカラー	ブルーカラー	専業主婦・専業主夫
父職	ホワイトカラー	13	4	0
		76.5%	23.5%	.0%
	ブルーカラー	8	7	0
		53.3%	46.7%	.0%

職業継承率
62.5%

文学部の男子学生の職業継承率は 72.7%、理学部の男子学生の継承率は 62.5%と 10%以上も文学部の学生の方が高い結果となった。よって結果として、理系学部に所属する学生の方が文系学部に所属する学生よりもより強く両親の職業に影響を受けやすい、という仮説は検証されなかった。また、専業主夫を希望する学生は理学部では 0 人であったのに対し、文学部では 2 人であった。だが、学生本人がブルーカラーを希望している場合の父親の職をみると、文学部ではホワイトカラーの方が多いのに対し、理学部ではブルーカラーの方が多かった。

4.4　仮説 2:出生順位による親の職業の影響度合いについて(男子)

表4　　長子　父×本人(男子のみ)　職業クロス表

		子供の希望職		
		ホワイトカラー	ブルーカラー	専業主婦・専業主夫
父職	ホワイトカラー	55	10	2
		82.1%	14.9%	3.0%
	ブルーカラー	18	5	1
		75.0%	20.8%	4.2%

職業継承率
66.0%

表5　　非長子　父×本人(男子のみ)　職業クロス表

		子供の希望職		
		ホワイトカラー	ブルーカラー	専業主婦・専業主夫
父職	ホワイトカラー	54	3	4
		88.5%	4.9%	6.6%
	ブルーカラー	17	4	2
		73.9%	17.4%	8.7%

職業継承率
69.0%

兄弟関係において、長子である学生の職業継承率は 66.0%、非長子である学生の職業継承率は 69.0%と非長子の方が 3%高かった。よって結果として、出生順位によって両親の職業に影響を受ける度合いは異なり、非長子に比べ長子の方が影響を受けやすい、という当初の仮説は検証されなかった。全体的に長子と非長子による希望職種のばらつきに特に大きく違いはなかったが、長子においては父親がホワイトカラーであってもブルーカラーを希望する数がやや多かった。また、専業主夫を希望する学生に関しては、長子の計 3 人に対して非長子は 6 人とやや多かった。

4.5　仮説 2: 出生順位による親の職業の影響度合いについて(女子)

表6　　長子　母×本人(女子のみ)　職業クロス表

		子供の希望職		
		ホワイトカラー	ブルーカラー	専業主婦・専業主夫
母職	ホワイトカラー	28	3	1
		87.5%	9.4%	3.1%
	ブルーカラー	1	1	0
		50.0%	50.0%	.0%
	専業主婦・専業主夫	22	2	1
		88.0%	8.0%	4.0%

職業継承率
50.8%

表7　　非長子　母×本人(女子のみ)　職業クロス表

		子供の希望職		
		ホワイトカラー	ブルーカラー	専業主婦・専業主夫
母職	ホワイトカラー	32	3	1
		88.9%	8.3%	2.8%
	ブルーカラー	1	0	1
		50.0%	.0%	50.0%
	専業主婦・専業主夫	22	1	2
		88.0%	4.0%	8.0%

職業継承率
54.0%

母親と娘における職業継承率についても、学生が長子の場合は 50.8%、非長子の場合は 54.0%と非長子の方が 4%多かった。よってこの場合についても、出生順位による親の職業継承率に関する仮説は検証されなかった。それぞれのクロス集計結果の値もほぼ同じような度数、割合であった。

5. 考察

本稿では職種選択における親の影響がどの程度のものかということを明らかにするため、親の職業と学生の希望職種との関連について、職業継承率を測定することで分析した。これまでの先行研究でも、学生の就職態度と親との関わりなどを調査したものがいくつかあった。そのなかでも本稿でとりあげた先行研究 A により、学部別による親の影響の程度に注目し、「職業選択の際に、理系学部に所属する学生の方が文系学部に所属する学生よりも、より強く両親の職業に影響を受けやすい」という仮説 1 を立てた。しかし、分析結果 4-3 にもあるように、理学部の方が親の職業を継承する率が高いのではないかということは認められなかった。今回の調査では、対象となる理学部の数が文学部に比べ少なかったことや、当初の仮説での「理系学部や専門性の高い学部」ではなく理学部のみだったことから、もう少し対象学部を増やすことで異なる結果が得られるのではないだろうか。

また、先行研究 B の「出生順位による職業継承率の違いは全く認められなかった」という結果が、果たしてどんな場合でも言えるのかということを明らかにするために、「職業選択の際に、出生順位によって両親の職業に影響を受ける度合いは異なる。非長子に比べ、長子の方が影響を受けやすい」という仮説 2 を立てた。そして先行研究 B では行われていなかった男女別による親の職業継承率を分析した。しかし、こちらも仮説 1 と同様、出生順位による職業継承率の違いは認められなかった。

仮説のほかに、希望職種を応える際に<わからない>を選択した学生が非常に多かったことから、その分布を分析したところ、表 1 のようになった。1 年生では、文学部において約 30%、理学部において約 20%と合わせて半数以上を占めているのに対し、2・3 年生では理学部で<わからない>を選択する人は 0 人であったことは非常に興味深い。このことから、やはり理系学部の学生は早い段階で自分の将来や職業について考えているということは、

全くの間違いではないと言えるのではないだろうか。

文献

安保英勇・石津健一郎[他]，2008,「東北大学における学部学生のキャリア意識(1)：希望進路に関わる要因とその準備活動」『東北大学大学院教育学研究科研究年報』56(2): 201-217.

小川一夫・田中宏二，1997,「父親の職業が息子の職業選択に及ぼす影響に関する研究」『教育心理学研究』27(4): 272-281.

佐山公一，2009,「大学生の職業選択に及ぼす親の影響の強さ」『商学討究』60(1): 45-69.

第 8 章　大学生の海外旅行に対する意識

1. はじめに

大学生のライフスタイルをテーマに考えるにあたって本研究では余暇の使い方の部分に着目する。近年、「日本の若年層の出国率が低下している」や「若者は旅行に行かない」と言われている（金・鎌田 2009)。こういった傾向を示している調査はすでに多く存在している。

若年層に含まれる大学生も学生の間に海外などへ旅行することが減っているということになるが、実際の大学生はほとんどが海外旅行への意欲はあるという結果を示す調査も存在した（日本旅行業協会 2008)。内向思考を示唆されている若年層の中でも時間があると思われる大学生が海外への旅行に「行きたいが行けない、または、行かない」という状況にあるようだ。

現代のどのような特性を持ちあわせた大学生が海外旅行への意欲が高く、その学生へ影響を及ぼすこと、環境はどういったものであるのかを明らかにすることで、若年層への海外旅行の消費活動を促進する対策の考えの参考になることができると考える。

2. 先行研究

まず、佐々木土師二の旅行者行動の心理学にて人間がどのような動機（モチベーション）を持ち合わせて旅行という行為に発動しているかという本質的な記述がされている。この研究では旅行者のモチベーションについて記述されてきている過去の研究者が発表した論理をまとめ、比較し、改めて日本という国や現代に当てはめることができるか検討する方法をとっている。

旅行者のモチベーションには発動要因という「様々なタイプの生活行動の中で特に旅行という行動を発動させる機能」と誘導要因という「具体的な目的地の選定に影響を与える魅力要因」が存在している。加えて、佐々木は特に注目すべき要因のひとつとして、旅行者の新奇性を求めている点を挙げていた。

「若者の旅行に対する調査」(金･鎌田 2008)ではアンケートという調査方法を用いて、若者の旅行決定（購買決定）に対するプラスの要因、マイナスの要因をそれぞれ明らかにすることを目的にしている。対象者は goo リサーチのモニターである 20～25 歳の男女 508 名である。属性は学生、就労者（サラリーマン、公務員、自営業)、非就労者（フリーターなど）である。この研究では対象者のほとんどが旅行に参加する意識があることを明らかにした。

旅行先の決定にはインターネット、旅行情報誌、友人や家族の口コミを参考にするとい

うこともわかった。しかし、経済的、時間的要因から「趣味や近場で友人と過ごす」ことに余暇を使う若者が多く、旅行の最大の競争相手であると述べてある。テレビ等のメディアで知った国に興味を持つことが多いので、宣伝にはメディアを提案している。

初めに記述した参考文献において出現した「新奇性を求めて旅をする」という点を測る尺度として当てはまるとして、古沢照幸（1989）の「刺激希求尺度」を参考にした。この文献の目的としては刺激希求尺度（Sensation Seeking Scale）の日本に適応した形を作成すること、より抽象的にあてはめることのできる尺度の作成をする。方法としては日本の神奈川県の公立大学生 90 名に作成した質問紙を実施し、検証した。

結果として、刺激希求尺度に影響を及ぼす因子が 4 つ見つけ出された。その 4 つは TAS(Thrill and Adventure) の因子、ES(Experience Seeking) の因子、BS(Borden Susceptibility)の因子、Dis(Disinhibilitation)の因子である。TAS の因子は危険を含むスポーツや活動に携わる欲求、ES の因子は新しい、変わった経験への欲求、BS の因子は同じ繰り返しへの嫌悪、Dis の因子は抑圧を解放する欲求のことを示している。4 つの因子が発見されたが、BS の因子は他の因子と相互に関係を持たず、独立して成り立つ因子であると考えられている。

3. 仮説

刺激希求尺度 ES 因子の仮説

先行研究から、初めにあったように、旅行者の旅行への動機決定の中でも注目すべき要因として「新奇性を求めて」という点がある。新奇性ということは新しいものを求めているということである。この新奇性を求める度合いが高い人ということは刺激を求める気持ちが強いともいいかえることができる。この新奇性を求める強さを先行研究であげた刺激希求尺度（古沢　1989）を用い、数値化することができる。よって、仮説 1 を「刺激希求尺度の ES 因子の数値が高い学生ほど、海外旅行への意欲が高い」とする。

情報入手手段の仮説

先行研究の 2 つめで述べたように若者の旅行に対する意志決定の中で、旅行先の決定に影響を及ぼすのは旅行雑誌やインターネット、友人と家族からの口コミであるとあった。近年の大学生のインターネットや雑誌に対する接して情報を得ることの次いで実際の口コミが参考にされていることに注目していきたい。周囲人々が学生へ影響を及ぼしていることから考えられる仮説 2 は、「友人や家族が海外旅行に行く頻度が多い学生ほど海外旅行への意欲が高い」とする。

4. 分析結果

4.1　海外旅行への意欲と分布

仮説の従属変数は 1､2 共に「海外旅行への意欲」である。質問紙の Q9.あなたは学生の間

に海外旅行にいきたいですか。に対する回答方法は 1.行きたい　2.どちらかといえば行きたい　3.どちらかといえば行きたくない　4.行きたくない　のあてはまるものを 1 つ選択する。問いに対し、「1.行きたい」と「2.どちらかといえば行きたい」を合算し「意欲のあるグループ」とし「3. どちらかといえば行きたくない」と「4.行きたくない」と答えたものを意欲のないグループ」の二分割にして分析に用いた。

表にあるように男女ともに 80%以上が海外旅行に行きたいと答えており、やや女性のほうが「意欲のあるグループ」が 91.8%と男性の同じグループよりも 10%上回る結果になった。「意欲のあるグループ」の中でも最も強く「行きたい」と答えたのは全体で 65.6%になり、男性は 59.9%、女性は 71.4%であった。このことから女性の方が海外旅行への意欲は男性よりも高く、さらに強く持っている人が多いという結果が得られた。

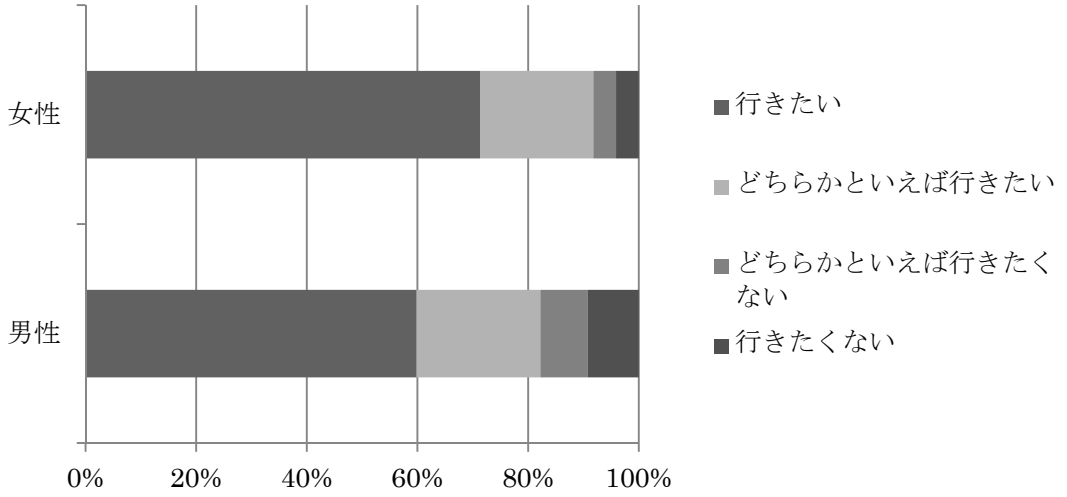


図 1　海外旅行への意欲　男女別

4.2　刺激希求尺度の測定

独立変数は刺激希求尺度の ES 因子は Q24 の a.できれば様々な経験をしてみたい。b.目新しくくて変化に富んだいろいろなことをしてみたい。 c.興奮したり、わくわくすることは好きだ。d.特殊で変わった仕事をしてみたい。e.変わった体験のできるアルバイトをしてみたい。の 5 つの問いにたいして 1.あてはまる、2.どちらかといえばあてはまる、3.どちらかといえばあてはまらない、4.あてはまらない　の回答があった。設問にあてはまるほど刺激希求尺度の ES 因子の度合いが高いので、値を再割り当てをした。1 を 3 に、2 を 2 に、3 を 1 に、4 を 0 に変換し、合算して得点化した。もっとも多かったのが合計得点の満点である 15 点で全体の 15%を占めた。次いで多かったのは中間得点の 8 点で、12.7%に及んだ。9 点も回答の 11.7%を占めていた。ほとんどの回答結果が 7 点よりも高い得点であった。

4.3　周囲の友人、家族の旅行頻度の測定

独立変数である周囲の友人や家族の海外旅行の頻度に関する問い「あなたの周囲の友人はどのくらいの頻度で海外旅行に行きますか」と「あなたの家族はどのくらいの頻度で海外旅行に行きますか」において回答は友人の場合、1. 1 年に 1 回以上は行っている人が多い。2. 2～3 年に 1 回くらいは行っている人が多い。3. 4 年に 1 回くらいは行っている人が多い。4.ほとんど行っていない人が多い。これらの選択肢を設けた。家族に対する質問では 1. 1 年に 1 回以上は行っている。2. 2～3 年に 1 回くらいは行っている。3. 4 年に 1 回くらいは行っている。4.ほとんど行っていない。これらの選択肢からもっともあてはまるもの 1 つを選択してもらった。1 が最も頻度が多く、2、3、4 と数字が大きくなるにつれ順に頻度が少なくなっている。

友人の海外旅行頻度の回答では、もっとも多く回答を得たのが 47.3%で「ほとんど行かない人が多い」であった。この結果から半数近くの周囲の友人はほとんど海外旅行へ行かないということが見て取れた。「1 年に 1 回以上は行っている人が多い」が 23.7%、次いで「2～3 年に 1 回くらいは行っている人が多い」が 19.3%でこの 2 つを合わせて全体の 43%に及んだ。「4 年に 1 回くらいは行っている人が多い」では 7.7%になった。

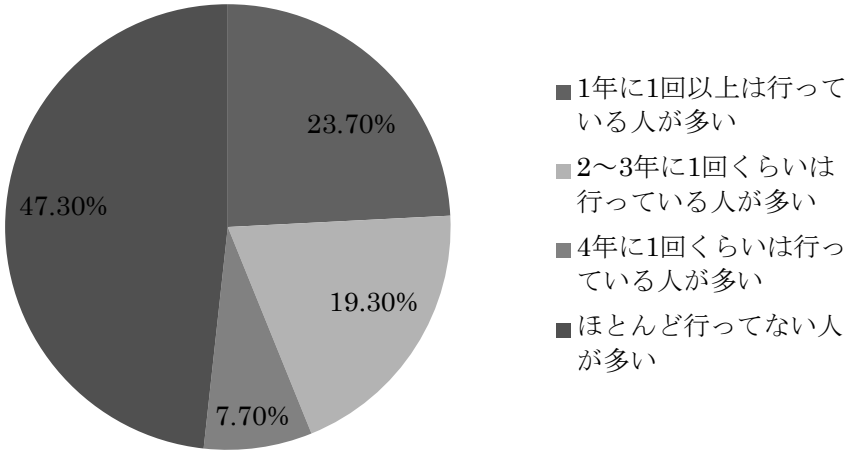


図 2　周囲の友人の海外旅行頻度　分布グラフ

家族の海外旅行頻度の回答では、もっとも多かったのが 77.0%で「ほとんど行っていない」であり、全体の 7 割以上を占めている。次いで、「1 年に 1 回は行っている」が 9.3%、「2～3 年に 1 回くらいは行っている」が 8.0%になり、この 2 つを合わせて、全体の 17.3%を占めていることがわかった。「4 年に 1 回くらいは行っている」は 5.7%という結果になった。友人の海外旅行頻度の結果と比較してみても、家族の海外旅行頻度がより低かった。

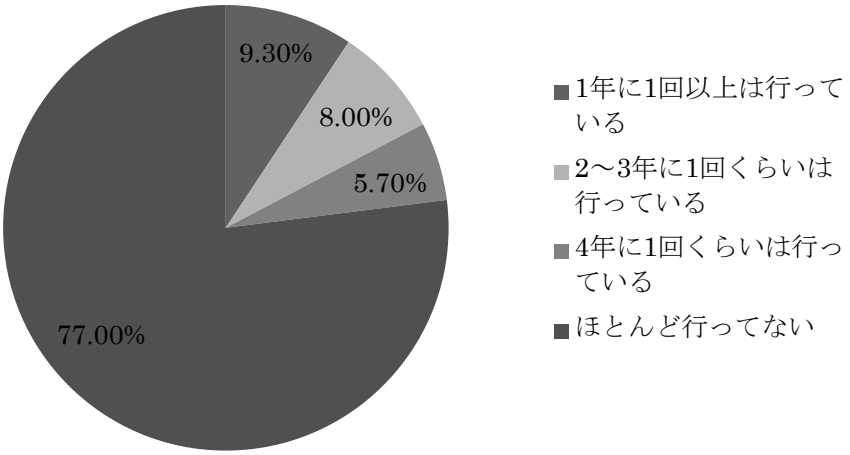


図 3　家族の海外旅行頻度　分布グラフ

4.4　仮説の検定

以上のような従属変数と独立変数の関連について「3. 仮説」で述べた 2 つの仮説それぞれについて分析を行った。はじめに。仮説 1 つ目「刺激希求尺度の ES 因子の得点が高い学生ほど海外旅行への意欲が高い」を分析する。分析方法は独立変数である刺激尺度の ES 因子の得点と従属変数である海外旅行意欲を SPSS の分析「グループの平均で比較」を用いた。

前述のように従属変数を海外旅行に対して「意欲のあるグループ」と「意欲のないグループ」の二分割にし、分析に使用する。分析を行った結果、「意欲のあるグループ」の平均値が 10.69 であり、「意欲のないグループ」の平均値は 9.74 になった。これより、「意欲のあるグループ」の方がわずかながらも「意欲のないグループ」よりも刺激希求尺度の ES 因子得点が平均して高いということがわかった。この結果より、仮説として設定した「刺激希求尺度の得点が高い学生ほど海外旅行への意欲が高い」は証明されているといえる。

表 1　刺激希求尺度 ES 因子と海外旅行への意欲　グループの平均値

海外旅行意欲	平均値	度数	平均誤差
意欲のあるグループ	10.69	260	3.097
意欲のないグループ	9.74	39	3.574
合計	10.57	299	3.173

第 2 の仮説である「周囲の友人や家族が海外旅行へ行く頻度が高い学生ほど海外旅行への意欲が高い」について検証する。分析では家族の海外旅行頻度と従属変数の海外旅行への意欲をクロス集計し、友人の海外旅行頻度と海外旅行への意欲もクロス集計した。

家族の海外旅行頻度と海外旅行への意欲のクロス集計では、海外旅行への「意欲のあるグループ」の 91.3%の家族が「1 年に 1 回以上行っている」という回答であった。しかし「2～3 年に 1 回くらい行っている」家族をもつのは 94.1%で、「4 年に 1 回くらいは行っている」という回答は 93.4%となった。「ほとんど行っていない」では 87.2%になった。これより、ばらつきに傾向は見られず、全ての回答において変わりがなかった。「意欲のないグループ」の結果は「1 年に 1 回以上行っている」という回答は 8.6%で、「2～3 年に 1 回くらい行っている」では 5.9%になった。「4 年に 1 回くらいは行っている」という回答は 6.7%となった。ここまでみると、ほとんど変わりがないといえる。しかし、「ほとんど行っていない」の回答との関連では「意欲のないグループ」で 12.7%という結果になった。この回答では他の 3 つの回答よりもわずかながら高いパーセンテージを示している。これより、家族の旅行頻度が本人の海外旅行への意欲を高めることにはあまり強い関連性はないが、家族の旅行頻度が低い場合には本人の海外旅行への意欲を低くなる一因としての関連がわずかながらもある傾向になるのではないだろうか。

表 2　家族の海外旅行頻度と海外旅行への意欲　クロス集計

家族の海外旅行頻度	意欲のあるグループ	意欲のないグループ
1 年に 1 回以上	91.30%	8.60%
2～3 年に 1 回くらい	94.10%	5.90%
4 年に 1 回くらい	93.40%	6.70%
ほとんど行かない	87.20%	12.70%

友人の海外旅行頻度と海外旅行への意欲のクロス集計の結果、「意欲のあるグループ」の最も多くの 93.3%の友人が 1 年に 1 回以上海外旅行に行くという結果になった。次いで 92.5%が 2～3 年に 1 回くらい海外旅行をしているという結果を得た。4 年に 1 回くらい行っているという回答は 83.4%で、ほとんど行っていないという答えが 84.8%になった。「意欲のあるグループ」の回答では「1 年 1 回以上行っている」と「2～3 年に 1 回くらい行っている」の 2 つが 93%前後で、「4 年に 1 回くらい行っている」と「ほとんど行っていない」の 2 つは 84%近くというふたつに分離をしているのがわかった。「意欲のないグループ」では「4 年に 1 回くらい行っている」という回答が 16.7%、「ほとんど行っていない」が 15.1%で、「1 年に 1 回以上行っている」と「2～3 年に 1 回くらい行っている」でそれぞれ 6.0%と 7.6%という結果になった。この結果から、友人の海外旅行頻度が 3 年以内に 1 回以上である学生の海外旅行への意欲がより高いということがわかった。

両者の家族の海外旅行頻度と友人の海外旅行の頻度を比較してみると、友人の海外旅行頻度の方がより学生の海外旅行への意識を高めているという結果を得た。

表 3　友人の海外旅行頻度と海外旅行への意欲　クロス集計

友人の海外旅行頻度	意欲のあるグループ	意欲のないグループ
1 年に 1 回以上	93.30%	6.00%
2～3 年に 1 回くらい	92.50%	7.60%
4 年に 1 回くらい	83.40%	16.70%
ほとんど行かない	84.80%	15.10%

5. 考察

この調査ではどのような特性を持った大学生が海外旅行への意欲が高いのか、またその大学生の意欲に影響を与えているものは何かを明らかにすることを目的とした。先行研究にあった新奇性を求めた旅のモチベーションに着目し、刺激希求尺度の ES 因子を用いて新奇性を測定し、海外旅行への意欲との関連を分析した。さらに周囲の口コミからの情報収集が行われているということを発見し、回答者の周囲の友人や家族という周囲の環境の影響が学生の意欲におよんでいるのかという分析を行った。調査から、仮説通りである新奇性の高い学生ほど新奇性の低い学生よりもわずかながら。海外旅行への意欲が高いという結果になった。刺激希求尺度の ES 因子の得点全体であまり大きなばらつきがみられなかった。しかし、「意欲のあるグループ」と「意欲のないグループ」に分けることによって平均値にわずかな差を見受けられた。

そして、海外旅行の意欲と周囲の環境との関連では、家族の旅行頻度と学生の海外旅行への意欲の関連では目立った結果はなかった。しかし、「意欲のないグループ」に注目して「ほとんど行かない」という家族を持つ割合が少し多く見られた。このことから、意欲を高めることには関連がないかもしれないが、反対の意欲を低める点に関連があるのではないかと考えた。友人の海外旅行頻度と学生の海外旅行への意欲との関連では 3 年に 1 回以上の頻度で海外に旅行する友人がいると答えた学生がより意欲が高いという結果になった。このことから、海外旅行に対する意欲を高める要因の 1 つとして周囲の友人の海外旅行頻度は関連があるとわかった。

文献

古沢照幸，1989,「刺激希求尺度・抽象表現の項目版　作成の試み」『心理学研究』50(3): 180-184.

金春姫・鎌田裕美, 2010,「若者の旅行に対する意識」『成城・経済研究』188(http://www.seijo.ac.jp/pdf/faeco/kenkyu/188/188-kin-kamata.pdf, 2012.1.9).

日本旅行業協会，2008,『海外旅行に関する調査　調査報告書』(http://www.jata-net.or.jp/vwc/pdf/0809tm_data.pdf，2012.1.9).

佐々木土師二，2000,『旅行者行動の心理学』関西大学出版部.

第 9 章　大学生の時間の使い方

1. はじめに

大学生活というのは 4 年という限られた時間しかなく、ほとんどの人にとっての最後の学生生活である。何かに関して目的を持って生活するもの、何の目的も持たずに生活するのも同じ 4 年間であるが、同じ時間を過ごすなら何か明確な目標や楽しみがある方がいいだろうと思う。ただ、時間の使い方は人それぞれで、部活動やサークル活動に一生懸命に時間を投じて頑張っている人や資格試験の勉強に力を入れている人もいるだろうし、アルバイトに力を注いでいる人もいるだろう。また、自分の趣味に打ち込んでいる人や今を楽しむために時間を使っている人もいるだろう。では、どのような時間の使い方をしている人が大学生活が充実している、自己が成長していると感じながら生活をしているのだろうか。本稿では、将来に向け考えている学生と、現在を楽しんでいる学生の充実感と、自己効力感との関係から検討したいと思う。

2. 先行研究

大学生の時間の使い方について考えるとき、時間というものの見方は様々で、文献の一つ目として、「大学生の進路決定と現在指向」では大学生 1・2 年生の就職に対する意識と、時間の中でも特に現在指向と未来指向、そして毎日の充実感の関係を特定したもの、さらに実際に進路を決定する時期にある大学 4 年生の進路確定状況と現在指向性の関連を検討したものとし、二つ目の文献である「大学生の時間的信念に及ぼす自尊心の影響」では大学生の自尊心が時間的な信念に有意な影響を与えるかどうかについてということを目的として研究している。そして、三つめの文献としては「時間の管理能力タイプと自己効力感、メタ認知能力、時間不安との関係」では、実日数、時数差、後悔予期の 3 つの指標に基づく時間管理能力のタイプ分けを行い、時間管理能力のタイプと、自己効力感、メタ認知能力、時間不安との関係について検討している。一つ目の文献は調査方法として 1・2 年生と 4 年生を分けて行っており、1・2 年生を対象にしたものは時間的指向性尺度、充実感尺度、進路成熟尺度、進路決定における自己効力感について各尺度 9～30 項目を 3～6 段階評定で回答してもらい、4 年生を対象にしたものは進路確定状況についての調査では 1・2 年生の進路成熟尺度の代わりに進路確定についての調査を行った。質問項目については、充実感尺度、進路確定における自己効力感尺度については 1・2 年生に行ったものと同じ質問を、時間的指向性尺度については 1・2 年生を対象にしたものにさらにネガティブな過去指向のものを 3 項目追加して行った。この調査結果から将来の展望も現在を重視する現在指向と両立したときにもっとも現在の充実感も高く、かつ進路決定に対する効力感も高いということが示された。大学時代に何か打ち込むものを持つということは、自分を知り、社会的

な能力を高める重要な経験になっていると思われる。また、1・2年生の充実感は「熱中・集中」因子が現在指向性と高い相関があったのに対して、4年生の場合は「安定・満足」との相関の方が高かった。

二つ目の文献の調査方法は自尊心尺度が20項目5段階評価で3領域の自尊心を、時間的信念尺度が8項目5段階評定の回答を求めていた。ここからみえる調査結果は3領域の自尊心はいずれも、時間的信念に対して有意な影響を示し、身体的領域の自尊心は現在主義に対して有意な負の影響を与え、学業領域と家族領域の自尊心は将来主義に対して有意な正の影響を与えることが明らかになった。この結果は、身体的領域の自尊心が低い者ほど現在主義傾向を示し、学業領域と家族領域の自尊心が高い者ほど将来主義傾向にあることを示していることから、自尊心は時間的展望に対して影響力を持つが、その影響は自尊心の領域によって異なることが示唆された。

一つ目の文献と二つ目の文献は時間の見方は、どのように個人の考え方に相関があるのかというような調査であるが、三つ目の文献は前二つの文献とは異なり、大学生個人の時間管理能力の実態を明らかにしている。

調査方法としては、ある地方都市の総合大学で教育学部の3年生を対象に30字×30字×10枚のレポートの課題説明を行い、一度目の調査としてこの授業の終わりにこのレポートについてどのような計画で行うかのアンケートを行い、さらに約3ヶ月後の提出日の授業の終わりに2回目の調査を行った。この結果、大学生の時間管理能力の実態がある程度明らかになり、そこにはいくつかのタイプが存在することが示された。時間管理能力には複数の要素が関係しており、それによって時間管理のタイプにも複数のパターンがある。このことから時間管理能力の育成を考える際にもパターンに応じた働きかけが有効であることがわかった。

3. 仮説

先行研究から、将来の展望も現在指向を重視する現在指向型と両立したときに最も充実感が高く、かつ進路決定に対する効力感も高いということ、身体的領域の自尊心が低い者ほど現在主義傾向を示し、学業領域と家族領域の自尊心が高い者ほど将来主義傾向にあることを示していることから、以下の4つの仮説が導かれる。

第1の仮説は、現在指向性と充実感に関係するものである。ここでの現在指向性とは現在の自分を大切にしているかどうか、現在の自分に行動のベクトルが向いているかどうかを示すものとし、充実感とは楽しみや喜びを感じているかを示すものとする。このときに先行研究では現在指向性が高いと充実感が高いと感じていたので、甲南大学の学生にも同じことが言えると仮定する。

第2の仮説は現在指向性と自己効力感との関係である。ここでの自己効力感とは、積極性や努力に前向きかどうか示すものとする。先行研究では、進路決定に対する自己効力感として見ていたが、それは進路決定だけでなく、通常時にも同じことが言えると仮定し、

現在指向性が高いほど自己効力感が高くなると仮定する。

第 3、第 4 の仮説は第 1、第 2 の仮説に加えて学年による違いと、そこから未来指向性への関連を見ていく。

第 3 の仮説では、先行研究による結果に 1・2 年生と 4 年生の学年による考え方の違いが見られたため、本稿でも学年による違いがあると仮定し、学年が高いと充実感は現在指向性だけでなく、未来指向性との相関も増えてくると仮定した。ここでの未来指向性は、将来の生き方の関心を示すものとする。

第 4 の仮説は第 3 の仮説と同様に、第 2 の仮説と連携させて、学年が高いと自己効力感は現在指向性だけでなく、未来指向性の相関も増えてくると仮定した。ただし、本稿では学年の分け方を 2・3 年生と 1 年生とに分けている。

4. 分析結果

4.1　充実感の測定と分布

従属変数となる充実感は「毎日が楽しい」「生活の中で生きる喜びや実感を味わっている」「自分にとってプラスの存在になる人との関わりが大きい」という 3 つの問いに対する「あてはまる」という回答を、値が高くなるほど充実感が高いとなるように変換したうえで合算して測定した。表 1 は本調査における充実感の分布である。

表 1　充実感の測定と分布

	毎日が楽しい	生活の中で生きる喜びや実感を味わっている	自分にとってプラスの存在になる人との関わりが多い
平均値	41.9	2.1	41.8
度数	251	251	251
標準偏差	631.0	0.8	631.0

充実感に関しては他のものと比べ、「毎日が楽しい」と「自分にとってプラスの存在になる人との関わりが多い」という値がかなり高くなっていることがわかる。

4.2　自己効力感の測定と分布

充実感と同様に従属変数となる自己効力感は「問題解決行動に積極的になれる」「困難な状況でもあきらめずに努力できる」「欲求を実現するためにはどんな努力も惜しまない」という 3 つの問いに対する「あてはまる」という回答を、値が高くなればなるほど自己効力感が高くなるように変換したうえで合算して測定した。表 2 は本調査における自己効力感の分布である。

表 2　自己効力感の測定と分布

	問題解決行動に積極的になれる	困難な状況でもあきらめずに努力できる	欲求を実現するためにはどんな努力も惜しまない
平均値	2.4	2.3	2.5
度数	251	251	251
標準偏差	0.8	0.8	0.8

4.3　現在指向性の測定と分布

独立変数となる現在指向性は「自分なりの生き方を大切にしている」「自分に正直に生きている」「しようと思うことが次々と頭に浮かんでくる」という 3 つの問いをグループ化によってひとつの現在指向性というグループとし、その平均値を算出した。表 3 は本調査における現在指向性の分布である。

表 3　現在指向性の測定と分布

	自分なりの生き方を大切にしている	自分に正直に生きている	しようと思うことが次々と頭に浮かんでくる
平均値	1.9	2.2	2.4
度数	251	251	251
標準偏差	0.8	0.8	0.9

4.4　仮説 1、2 の検定

以上のような従属変数と独立変数の関連について「3. 仮説」で述べた仮説それぞれについて分析を行った結果、現在指向型と充実感、自己効力感の相関関係数は以下の表 4 のようになった。

表 4　現在指向型と充実感・自己効力感の相関関係数

	充実感	自己効力感
現在指向	0.076	0.451

以上の結果から、現在指向性と充実感の相関係数は 0.076 と、0.1 未満の値なのでほとんど関連がないと言える。一方の自己効力感については相関係数が 0.451 と、0.4 以上の値をとったため、比較的強い相関があると言える。このことから、第 1 の仮説で立てた、現在指向性が強いと充実感も強いとは言えないようであるという結果になった。一方で第 2 の仮説で立てた現在指向性が高いほど自己効力感が高くなるということは、現在指向性と自己効力感の間に比較的強い相関があるため、仮説は立証されたと言えるだろう。

4.5　未来指向性の測定と分布

二つ目の独立変数となる未来指向性は「これからの人生や生き方に関心がある」「将来の目標を持っている」「大体の将来計画を持っている」という 3 つの問いをグループ化し、未来指向性というグループとしてその平均値を算出し合算した結果が以下の表 5 である。

表 5　未来指向性の測定と分布

	これからの人生や生き方に関心がある	将来の目標を持っている	大体の将来計画を持っている
平均値	2.0	2.5	2.8
度数	251	251	251
標準偏差	0.9	1.0	1.0

4.6　現在指向性と未来指向性の相関

第 3、第 4 の仮説を検証する際に、現在指向性にさらに未来指向性が関係してくるという仮説を立証するために、現在指向性と未来指向性の相関係数を見た結果、以下の表 6 のような結果になった。

表 6　現在指向性と未来指向性の相関係数

	未来指向性
現在指向性	0.212

以上から現在指向性と未来指向性の相関は 0.212 という値をとったため、ある程度の相関があるという結果になった。

4.7　仮説 3、4 の検定

第 3、第 4 の仮説の検定では、第 1、第 2 の仮説に学年による違いと、さらに未来指向性との相関を見ていく。未来指向性と現在指向性の相関は「4.6 現在指向性と未来指向性の相関」から見ることができる。まず、2・3 年生の現在指向に対する充実感及び自己効力感の相関、また未来指向性に対する充実感、自己効力感の相関を見る。次に、1 年生の現在指向に対する充実感及び自己効力感との相関、また未来指向性に対する充実感、自己効力感の相関を見る。表 7 は本調査における 2・3 年生の現在指向性と充実感、自己効力感との相関を表したものである。

表 7　2・3 年生の現在指向性と充実感、自己効力感の相関

	充実感	自己効力感
現在指向	0.523	0.088

2・3 年生の現在指向性と充実感の相関は 0.523 と、0.5 以上の値をとるため強い相関があると言える。一方で現在指向性と自己効力感については 0.088 と、0.1 未満であったためほとんど相関がないと言っていいだろう。また、2・3 年生の未来指向性と充実感、自己効力感については以下の表 8 のとおりである。

表 8　2・3 年生の未来指向性と充実感、自己効力感の相関

	充実感	自己効力感
未来指向	0.060	0.492

2・3 年生の現在指向性と充実感に強い相関があった一方で、未来指向性と充実感の相関は 0.060 と、0.1 未満であるためほとんど相関がないと言える。自己効力感については現在指向性との間に相関はほとんどないと言えたが、未来指向性と自己効力感の間では 0.492 と、0.4 以上の値をとるため比較的強い相関があると言える。

さらに、1 年生の現在指向性と充実感、自己効力感の相関は以下の表 9 によるものである。

表 9　1 年生の現在指向性と自己効力感の相関

	充実感	自己効力感
現在指向	0.483	0.373

1 年生の現在指向性については充実感との相関は 0.483 と、0.4 以上の比較的強い相関があると言える値になった。また、自己効力感でも充実感との相関はそれほど強くないが 0.373 と、0.3 以上の値をとったためはっきりとした相関があると言える。現在指向性と充実感、自己効力感の両方に相関があるとみられたのは先の 2・3 年生での現在指向性、未来指向性のどちらでも見られなかった結果となり、1 年生の現在指向性を持った学生が 2・3 年生に比べ、充実感と自己効力感の両方を持っていると言える。また、1 年生の未来指向性と充実感、自己効力感との相関についての結果が以下の表 10 である。

表 10　1 年生の未来指向性と充実感、自己効力感との相関

	充実感	自己効力感
未来指向	0.461	0.480

1 年生の未来指向性についても充実感、自己効力感との相関は充実感が 0.461、自己効力

感が 0.480 と、共に 0.4 以上の値をとる比較的強い相関があると言える。このことから、1 年生は現在指向性、未来指向性と共に 2・3 年生に比べて充実感、自己効力感との相関が強いことが言える。

5. 考察

本稿では大学生が時間の使い方についてどのような学生が充実感と自己効力感を持っているのかを目的として現在指向性を持った学生、未来指向性を持った学生の充実感と自己効力感についての関連を分析した。分析にあたって、先行研究より「現在指向性が高いほど充実感が高くなる」「現在指向性が高いほど自己効力感が高くなる」「学年が高いと、充実感は現在指向性だけでなく未来指向性との相関も高くなる」「学年が高いと、自己効力感は現在指向性だけでなく未来指向性との相関も高くなる」という 4 つの仮説を構成した。この仮説から、「4.分析結果」で分析を進めた結果、「現在指向性が高いほど充実感が高くなる」という仮説については、現在指向性と充実感の間に相関はほとんどなく、仮説は立証されなかった。しかし、「現在指向性が高いほど自己効力感が高くなる」という仮説については、比較的強い相関が見られたことからこの仮説は立証された。このことから、現在指向性の学生は充実感よりも自己効力感を強く感じていると言えるだろう。

つぎに「学年が高いと、充実感は現在指向性だけでなく未来指向性との相関も高くなる」という仮説については、現在指向性の学生の充実感は 1 年生に比べ 2・3 年生の充実感が高く、未来指向性の学生の充実感は 1 年生の方が 2・3 年生より値が高くなったため、仮説は立証できない。また、「学年が高いと、自己効力感は現在指向性だけでなく未来指向性との相関も高くなる」という仮説については、2・3 年生に比べ 1 年生の現在指向性を持った学生の方が自己効力感との相関が強く、未来指向性を持った学生と自己効力感の相関については 1 年生と 2・3 年生の結果がほとんど似た結果になり、学年による差異はないと言えるのではないだろうか。

今後同じような調査を行う際には、充実感と自己効力感の相関、また学年ごとの未来指向性と充実感、自己効力感についての相関にも注目したい。

文献

三宅幹子・橋本優花里・井上芳世子・森田愛子・山崎里央・松田文子，2004,「時間管理能力のタイプと自己効力感、メタ認知能力、時間不安との関係」『福山大学人間文化学部紀要』4: 1-10.

新見直子・永瀬由里子・松田由希子・前田健一，2007,「大学生の時間的信念に及ぼす自尊心の影響」『広島大学心理学研究』6: 151-156.

園田直子，2003,「大学生の進路決定と現在指向」『久留米大学心理学研究』2: 63-70.

第 10 章　大学生の余暇活動としてのボランティア

1. はじめに

就職活動を目前に控えた今、大学生活で取り組んできたことを一つひとつ振り返っている人も多いだろう。授業、バイト、遊び、サークルに課外活動…。中学や高校との大きな違いは、やはり自分で選択しながら自由に使えるお金や時間が増えたということだ。基本的なルールはあるけれど、まだまだ社会的な義務は免除されており、それでいてやりたいことはほとんどなんでも挑戦できる権利はある。しかし逆の角度から見ると、自由だからこそ、自分のやりたいことや居場所がはっきりしていないと取り残されてしまうという側面もある。それでは、大学とはいったい何をするところで、どんな風に自分の“自由”を使っているのだろうか。

一般に大学とは学術及び教育の最高機関であると言われ、より専門的な分野に特化して学問を学ぶ場である。しかし、大学進学率が 6 割近い（2008 年データ）現在の日本では、高度な学術を学び拡大・深化した知見、柔軟な思考力を備えた知識人を育成することと同じくらい、というよりもむしろ重きを置かれているほどに、社会に進出する前の猶予期間、モラトリアム的な役割が大きいのではないかと考えている。その根拠の一つとしては、我が甲南大学のみで考えると、広域分野教育、キャリア教育、モラル・道徳教育、地域連携授業、生涯体育、部活動やサークル活動、ボランティア活動など、専門分野以外のカリキュラムが実に充実していることがあげられる。今後もより一層、大学生のモラル・道徳教育、社会スキル教育に力を注いでいく予定だそうだ。これは逆に言うと、大学生になってもまだ基本的な道徳観やマナーが身についていない場合が多いのかもしれないし、または、大学の生き残りをかけての様々なサービス展開かもしれない。しかし少なくとも言えるのは、社会全体が生活の質や余暇の時間を重要視する流れになっており、自分に適した居場所を探そうとしている。そのためには授業や研究を通じての知識、技能だけではなく、社会進出に対して、社会的なコミュニケーション能力やスキルを身につけることも大切なのではないか。

そこで私が注目したいのが余暇活動としてのボランティアである。昨年は日本を揺るがす東日本大震災が起こり、被災の規模が大きく原発の不安もあることから学生ボランティアの現地入りは多少規制もあったようだが、大学生だけでなく一般市民全体からもボランティア活動に対する関心は一気に高まった。近年ではよく耳にする「ボランティア」の言葉がメジャーになったのは 1995 年 1 月 17 日の阪神淡路大震災が起こってからであり、この年は「ボランティア元年」に、この日は「防災とボランティアの日」に制定されている。いわゆる奉仕活動といわれるボランティア。部活動や習い事のように目に見える知識や技

能が身につくわけでもなく、バイトのように報酬をもらえるわけでもなく、むしろ交通費などの負担がかかる場合もある。

「権利はあって、義務はない」そんな大学生活のなかで、なぜ自分の時間と労力を使って無給のボランティアをしようと思うのか。実際に参加している人としていない人、興味のある人と興味のない人の間には、行動や意識の部分でどのような差があるのか。ボランティアを通して同世代の社会的な行動やスキルを明らかにしていく。

2. 先行研究

A.幼児教育学科学生のボランティア活動に対する意識調査と課題

戦後最大の危機という意識で国民全員がボランティア精神、助け合いの精神を持って今後さらにさまざまな活動が進められていくと思われる中、今後のボランティア活動の課題について考察する。

久留米信愛女学院短期大学幼児教育学科の 1 年生 77 人、2 年生 65 人に、2010 年に使用したボランティア活動に関する付録資料の 19 の質問事項を書いたアンケート用紙を配布し、無記名で回収した。

ボランティアの本来の意味の「自発性」「無償」「利他的」のうち、「無償」（34%）、「利他性」（36%）のイメージが強く、一番多かったのは、「奉仕」（38%）だった。関心がないと答えた学生は全体の 16%を占め、その理由としては「時間に余裕がない」が最も多い。経験をしたことがあるのは全体で 96%ときわめて高い値が出ており、これは、教育学部という点、また、近年の中学や高校の授業の一環としてのボランティア活動が年々増えている傾向を表していると考えられている。動機・目的としては、今回の結果では「利他性」ではなく「利己性・自己啓発性」に傾いていると考えられ、実際には自発的な動機から活動を行う傾向があると言える。高校などでのボランティア活動を義務化する動きについての質問では、「反対・絶対反対」という反対派が 55%とやや多く、ボランティアは自主的に行うべきで、必修単位化すべきではないという意見も根強くあった。

B.ボランティア活動を通した学生の「学び」のイメージ―2007 年度立命館大学学生意識調査を事例として

学生の直接的経験を広げ深め、座学との接点を見出してやる仕掛けが大学には求められている背景をもとに、「ボランティア活動から学生は何を学ぶのか」を明らかにすることを目的としている。

立命館大学学部生・大学院生 35,105 名に対して標本抽出法を実施。学生証番号順に 8 名毎の系統抽出をした。

ボランティアの肯定イメージは「自発的」「達成感」「自分が成長する」「社会の役に立つ」に対して、否定イメージは「おせっかいな」「偽善的な」「気軽にできる」「恥ずかしい」が上位だった。学生はボランティアに対して、自分が成長するイメージを持っていると言え

る。ジャンル別で見ると、1 番目に環境、2 番目に国際交流・国際協力、3 番目に児童福祉で、総じて福祉分野のボランティアへの関心が高い傾向がある。活動形態は、「授業の一環」が 25.3%と一番多く、次いで、「学校外の団体」が 21.8%を占めた。活動期間では、「単発」が 62.7%と圧倒的に多い一方、3 年以上継続して活動を行っている学生も 11.7%いる。また、40.8%の学生が入学前にボランティア活動に参加しているが、「現在も続けている」学生については 11.1%と大幅に減少しているという結果も得られた。

C. 学生のボランティア活動と社会的スキルの変化に関する一考察

学生本人の社会的スキル（特に援助のスキル）に注目し、学生のボランティア活動が及ぼす本人の内面的変化（自信・自己効力感等）についての関連を明確にする。

佐賀市が主催する「障がい児夏休み教室」に参加した短大生、大学生、および一般社会人 38 名のボランティアに、事前と事後に分け、質問用紙に自己記入のアンケートを実施。

事前調査での自己評価の個人平均は 3.22（4 点満点中）に対し、事後の個人平均は 1.9 にまで落ちている実際にやってみると、何もできないふがいなさに気づき、自己評価が低くなる場合もあるようだ。自己評価が高い人ほど、自己効力感も高いこともわかった。ボランティアによって個人が持つ力や自信・自尊心が高められ、その心の力を自分が関わる他者に向け、他者を思いやる行為が生まれたと考えられる。動機は何であれ、ボランティアは学生自身が新たな自己を発見し、成長していく可能性を十分に含んでいると言える。

3. 仮説

A、B の量的なアンケート調査に対して、C は実際にボランティアに参加している方 38 名への質的な質問紙回答だった。データ量は少なかったものの、短大・大学生のほか、一般の方々との意見の相違を捉えることができた。また社会スキルや自己効力感など個人的な内面への質問も多く、社会スキルの自己評価が高い人ほど自己効力感が高いこと、ボランティアによって個人が持つ力や自信・自尊心が高められ、その結果他者を思いやる行動に移るという重要なデータを得た。

執筆者とその対象を比べると、A は短大幼児教育学科教授とその学生、B は大学のボランティアセンター勤務者とその学生、C は短期大学、大学の教授とボランティア参加者と、それぞれに少しずつ視点が違っている。A では、学生から「高校などで義務的にカリキュラムに入れ込むべきではない」「ボランティアを必修単位化するべきではない」という意見が出たのに対し、B では「学生の直接的経験を広げ深め、座学との接点を見出してやる仕掛けが今大学には求められている」など、ボランティアセンターとして新たなカリキュラム導入も考えている。また実際にボランティアを行っていた C では、「最終的に動機はあまり関係ない」という意見があり、授業でも仕掛けでも、必修でもそうでなくても、やることに意義があるというような現場の意見を垣間見れた気がした。

ということは、動機はどうあれ参加し、やりがいを見出すことがまた次の活動や自分自

身の成長につながるということだと考えるが、ここで気になるのが、意思と行動の矛盾である。A でボランティアを経験したことがある学生は 96%なのに対し、全く関心がないと答えている学生が 16%いること、B で 40.8%の学生がボランティアに参加したことがあるが、現在も続けている人は 11.1%ということ、C では学生は単発で慣れていないのに対し、一般の方は継続的に参加しているような印象をうけたことなどが理由に挙げられる。特に A は、全く関心がなかったが参加したのか、それとも参加してみたもののやりがいが見いだせず関心がなくなったのか、因果関係の順序ははっきりしていないが興味深い。

以上の専攻研究の結果から、次の 2 つの仮説が導かれる。

仮説 1　ボランティアの意義を理解しないまま、意思と行動が一致していないまま、参加したり、参加したいと思ったりする「誘われ型」「傍観型」傾向の学生がいる。

ここで「誘われ型」とは、単位・就職活動・人間関係などのつながりから、自分の意思に関係なく（というよりもむしろ参加の意思はなく）、誘われるままにボランティアに参加する人を指す。

仮説 2-A　社会的スキルが高く、向社会行動をとる人ほど、ボランティアに参加しやすい。

仮説 2-B　社会的スキルが高く、高社会行動をとる人ほど、ボランティアに参加したいと思っている。

「社会でうまくコミュニケーションを取れるか」という視点から社会的スキルを、そして「小さな親切は大きな親切につながる」という視点から向社会行動を調べる。

4. 分析結果

4.1　「誘われ型」学生の測定と分布

現在・過去のボランティア参加経験と、将来のボランティア参加意思をクロス集計。

［問 31］1. 参加している／していた＝参加経験あり

2. 参加したことはない＝参加経験なし

［問 33］1. ぜひ参加したいと思う　2. 機会があれば参加したい＝参加意思あり

3. あまり参加したいとは思わない　4. 参加したくない＝参加意思なし

今回は、［問 33］の 4 段階を再割り当てして、2 段階にしてクロス集計した。

表 1　ボランティアの参加経験と参加意思のクロス集計

	参加意思あり	参加意思なし	合計
参加経験あり	69	14	83
	27.80%	5.60%	33.50%
参加経験なし	114	51	165
	46.00%	8.50%	66.50%
合計	183	65	248
	73.80%	26.20%	100.00%

まずこの表よりわかるのが、やってみたいという意思のある学生が約 74%なのに対し、実際にやったことのある学生は約 36%ということである。クロス部分に注目すると、「経験があり意思もある」または「経験したことがなく意思もない」という行動と意識が伴っている学生以外に「経験はないが意思はある」そしてわずかながら「経験はあるが意思はない」といった一見矛盾した属性が見られる。

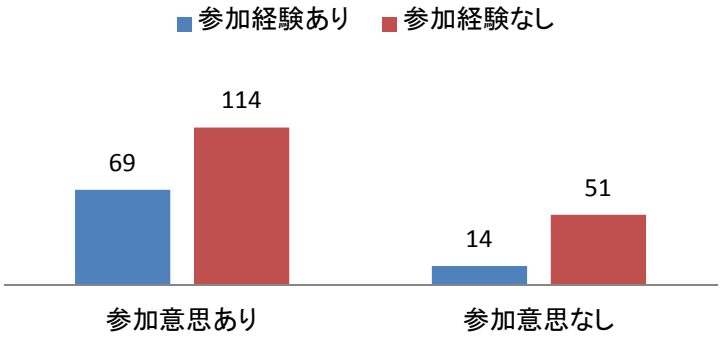


図 1　ボランティアへの参加意志と行動（n=248）

次にこの表をグラフにしてみる。ここから読み取れるのは、まず全体的に参加意思のある学生が、参加意思のない学生の約 3 倍いるということ、しかしながら参加の意思の有無に関わらず、参加経験がない学生の方が多いこと、そして最後に、参加意思がないのに参加していたり、過去に参加していた学生がいるということ、以上の 3 点である。

続いてそれぞれの傾向から 4 象限に分類し、以下のような表を作成した。

表 2　学生のボランティア 4 象限

参加経験があり、今後もやりたい ②「自発型」	関心はないが、参加経験はある ①「誘われ型」or「燃えつき型」
関心はあるが、参加経験はない ③「傍観型」	参加経験はなく、今後もやりたくはない ④「無関心型」

③「傍観型」の、関心はあるが参加経験はないというのは、専攻研究でも出てきたように、お金や時間に余裕がないこと、どのようにして情報を得たらいいのかわからないことなどが理由として挙げられることが予想され、矛盾と言いつつも、46%と多くの大学生がこの属性に分類される。しかし①はどうだろう。関心はないが参加経験はあるというなんとも不思議な属性だが、これは中学や高校でよく理解はしないままになんとなくボランティア活動に参加していたり、大学に入って単位取得のために参加をしていたりという人、やる気を持って参加したが、実際やってみて、今では関心がなくなってしまったという人という分類ができると考えられる。①で「誘われ型」「燃えつき型」という 2 種類の属性を作ったのは、過去と現在の時間軸が交差し、因果関係が 2 通り考えられるためである。

4.2　経験者と未経験者、関心者と無関心者の違い

様々な矛盾がある中、それでは実際に、関心を持っていたり参加をしていたりする学生とそうでない学生の間にはどのような差があるのだろうか。従属変数となる社会的スキルと向社会行動は、それぞれ 4 段階（0 点～3 点）で評価し、値が高くなるほどスキルや行動のレベルが高くなるように変換したうえで合算し、一人ずつの平均を出して測定した。

［問 27］社会的スキル

A.自分が失敗したとき、すぐに謝ることができる

B.自分は違った考えの人とも上手くやっていける

C.初対面の人との会話、自己紹介がスムーズにできる

［問 32］向社会行動

A.見知らぬ人が落し物をした時、拾ってあげる

B.授業を休んだ友人のためにプリントをもらう

C.気分が悪くなった友人を介抱する

D.バスや電車でお年寄りや体の不自由な人に席をゆずる

表 3　ボランティア経験者と未経験者の平均スコアの違い

	経験者	未経験者
社会的スキル（満点 9 点）	5.90	5.54
向社会行動（満点 12 点）	8.02	7.85
合計平均（満点 21 点）	13.92	13.36

意外にも、経験者と未経験者との間で、平均スコアにそこまで大きな開きは見られなかったものの、社会的スキルと向社会行動を比べると、わずかながら社会的スキルの差が大きいことがわかる。

表 4　ボランティア関心者と無関心者の平均スコアの違い

	関心者	無関心者
社会的スキル（満点 9 点）	5.69	5.48
向社会行動（満点 12 点）	8.16	7.25
合計平均（満点 21 点）	13.85	12.73

意思の面から見てみると、経験とは反し社会的スキルには関心者と無関心者の間であまり差は見られなかった。しかし向社会行動では 1.0 点近い差が出ており、経験者の点数も上回っているため、ボランティアに関心があり参加してみたいと考える学生は、意識に伴って普段から向社会行動にも積極的だと考える。続いて質問項目を一つずつグラフにして分析する。

○社会的スキル分析（以下図 2 と図 3 左から[問 27]A.B.C.の質問項目）

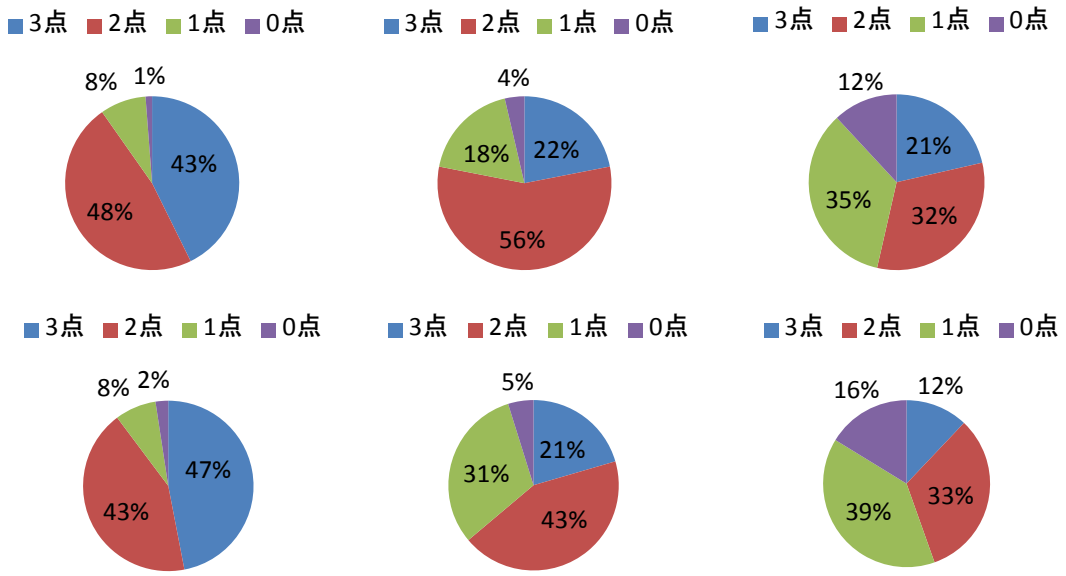


図 2　社会的スキルとボランティア参加の有無（有 n=82・無 n=166）

「失敗したときにすぐに謝ることができる」では、両者とくに差はなく「あてはまる」「ややあてはまる」肯定のみで 9 割以上を占めた。注目は残りの二つで「違った考え方の人とも上手くやっていける」は未経験者に比べ、経験者の方は肯定派が 4 分の 3 以上を占め、明らかに違う考え方に対する許容範囲が広い。また、「初対面の人との会話や自己紹介がスムーズにできる」では、肯定派が半分を切った未経験者に比べ、経験者は半分以上がスムーズにできるという結果だった。

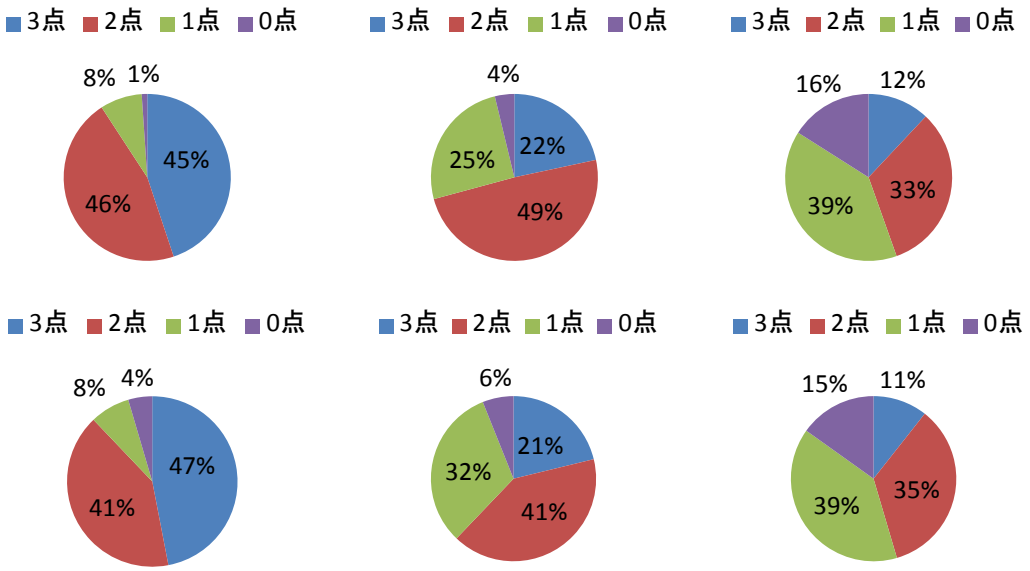


図 3　社会的スキルとボランティアへの関心の有無（有 n=185・無 n=66）

次に、実際の経験は問わず今後参加をしたい意思と個人の社会的スキルを比べると、参加の意思のある人の方がやや違う考え方に対して寛容だが、参加の意思の有無と社会的スキルに大きな相関は見られなかった。

○向社会行動（以下図 4 と図 5 左から[問 32]A.B.C.D.の質問項目）

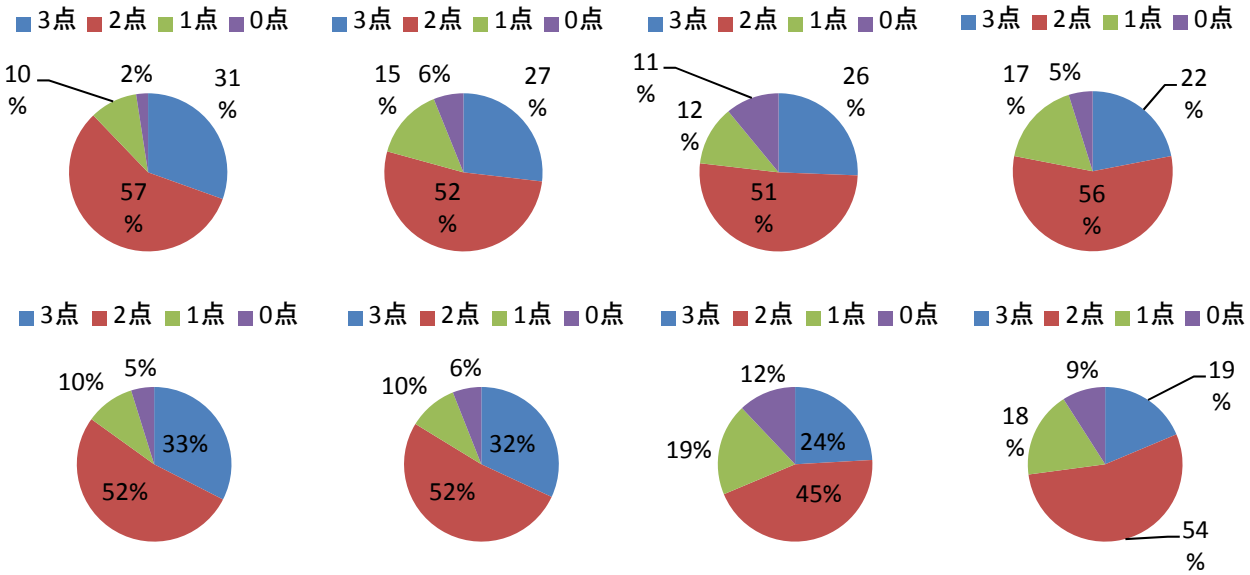


図 4　向社会行動とボランティア参加の有無（有 n=82・無 n=166）

向社会行動では、経験と未経験の差はあまり見られないようだが、「友人を介抱する」「お年寄りや体の不自由な人に席を譲る」の 2 項目では経験者の肯定意見が 4 分の 3 を超え、やや上回っている。

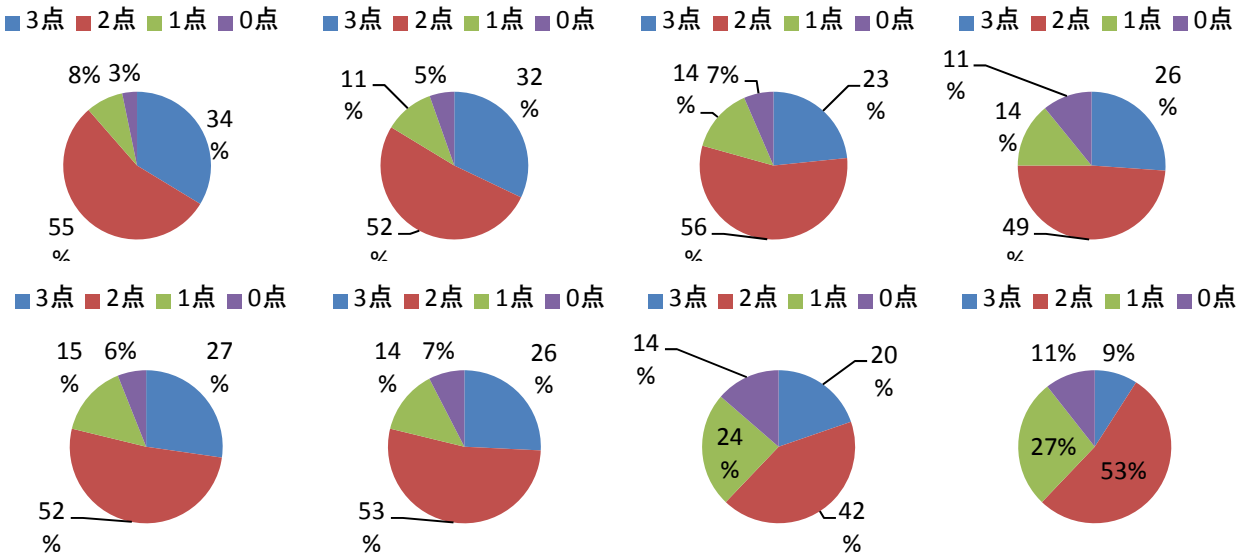


図 5　向社会行動とボランティアへの関心の有無（有 n=184・無 n=66）

実際の経験の有無に対して、参加意思・関心の有無と向社会行動のクロス集計では、後半 2 つの福祉的・奉仕的活動により開きが見られる。関心を持っている学生は「友人の介抱」では 4 分の 3 が、「席を譲る」では 8 割が、肯定的な回答をしている。

4.3　仮説の検定

以上のクロス集計の結果を経て、「3. 仮説」で述べた仮説をそれぞれ分析する。［仮説 1］は表 1、2 と図 1 で示したように、5.6%の学生が意思と行動が一致せず、意義を理解していないままに参加した、またはその意義に共鳴できず参加をやめていることがわかり、仮説は証明された。続いて［仮説 2-A］では実際の経験と社会的スキル・向社会行動の相関、［仮説 2-B］では参加の意思・関心と社会的スキル・向社会行動の相関があるということを仮定したが、参加と意思にはそれぞれに合ったスキルがあるようである。表 3、4 の赤字でも示したように、経験の有無では社会的スキルが、関心の有無では向社会行動が、点数の開きが大きくなっている。また図 2、図 5 のなかでそれぞれを比べてみてもその傾向は顕著にあらわれており、結果として普段からボランティアに関心があり、将来的に参加したいという意思のある学生は、普段から向社会行動をとる傾向にある。それに加え、実際に行動を起こしているのは、より社会的スキルがある学生が多いということがわかった。

5. 考察

本稿では、ボランティアに関心のある学生、実際にボランティアに参加している学生は、そうでない学生に比べて意識や行動の部分でどのような違いがあるのかを明らかにすることを目的として、実際の経験や関心と社会的スキル・向社会行動の関連を分析した。分析結果から、ボランティアに関心があるのは全体的に特に福祉的・奉仕的な行動志向がより強い向社会的な学生であり、そのうえ実際に行動を起こしているのは、違う考え方を受け入れられる許容範囲の大きさや、初対面でも物おじせずに会話ができるといった社会的なスキルが関係していることが分かった。

また、近年ではボランティアの必修授業化や単位取得などの制度も増え、一般のボランティアの方と比べて学生ボランティアは考え方と行動の矛盾が大きいのではないかという仮説のもと分析を行ったが、実際には数字としては少なかったものの、予想していた結果が得られ、また、その反対の立場である「まだやったことはないがやってみたい」と考える学生が半数近くいると分かったことも温かい結果だった。しかしスキルを含めて逆の角度から見ると、「ボランティアに関心がある」が「実際の参加経験はない」学生が半数近くいるということは、忙しい学生生活の中で時間やお金の余裕がないことはもちろんだが、それ以外に、普段からの行動として、向社会的行動は意識しているが、社会的スキルが身についていないといった大学生が多いとも言えるかもしれない。

しかしこの項目の反省点は時間軸がはっきりしておらず、経験と関心の順序が混ざってしまったことである。「特に関心はないがとりあえず参加をしている」のか、それとも「参

加をしたことがあるが、その経験を経て、将来的な参加には関心がなくなった」のか。因果関係を解明することはできなかった。今回は両方の場合を想定して、前者を「誘われ型」、後者を「燃えつき型」と筆者の独自の判断で名付けて分類した。今後調査をするときには、もう少し細かい時間軸を含む質問内容にし、それぞれの因果関係を読み解けるよう注意する必要がある。

今回の調査で分かったことは、「ボランティア」にはっきりとした基準は存在せず、誰かの何かの役に立ちたいと考えている人は、実際に経験していてもしていなくても、意識の部分ではあまり変わらないということである。行動に移せるかどうかは、社会的スキル以上の、少しの勇気と小さなきっかけなのではないだろうか。

文献

馬場由美子・島かおり・大宅顕一郎，2006,「学生のボランティア活動と社会的スキルの変化に関する一考察」『永原学園西九州大学・佐賀短期大学紀要』36: 155-162.

多田内幸子・重永茂，2011,「幼児教育学科学生のボランティア活動に対する意識調査と課題」『久留米信愛女子学院短期大学研究紀要』34: 85-96.

山田一隆・井上泰夫，2009,「ボランティア活動を通した学生の『学び』のイメージ : 2007年度立命館大学学生意識調査を事例として」『立命館人間科学研究』19: 59-75.

第 11 章　大学生の食生活への影響

1. はじめに

高校生から大学生になることで、生活環境はがらりと変化する。高校生まで決められていた時間割や服装などが、大学生になると自分で決めることになる。毎日規則正しく決められていた起床・就寝時間は時間割によっては大幅にずれ込み、やがてそれは生活リズムの乱れとなっていく。一人暮らしになればなおさらで、何時に家に帰ろうが咎める親もいない。そして、その乱れは食生活にも影響を及ぼすと考えられる。

では、大学生という状況が、人の食生活に具体的にどのような影響を及ぼすのだろうか。近年、食生活の乱れにより生活習慣病の恐れが示唆されているが、急に生活リズムを失いやすい大学生は特に食生活が乱れやすいのではないだろうか。本稿では、日々の食生活の状況を、大学生という立場から検討したいと思う。

2. 先行研究

食生活の乱れの原因としてよく出てくるのが、インスタント食品などといった加工米飯である。

豊瀬恵美子の研究では、大学生での加工米飯を食べる割合は一人暮らしの方に多くみられるが、親との同居者も利用し、また、男子は女子の 2 倍利用している。これにより食生活の自立心が薄いとも受け取れるとしている（豊瀬 2001）。一人暮らしの学生は料理が面倒という理由から加工米飯を使いやすいが、親との同居者もまた、普段料理を用意してくれる存在がいるからこそ、自分でするとなると加工米飯に頼りがちになるのだろう。

料理そのものの影響だけでなく、家族の有無、及び生活スタイルの朝型・夜型の違いが食生活に影響を与えるとしたのは關戸啓子と内海滉である。

朝食を抜くことも食習慣の乱れというが、朝食を抜くかどうかは、食行動を共にする家族の有無の影響が示唆された。夜遅くに活動する夜型タイプの学生は朝食を抜きやすく、食べる場合も朝型タイプの学生より遅い時間であった。また、一人暮らしの学生に比べて、自宅にいる学生は空腹によって気持ちが左右されにくく、家族と会話をしながら食事に時間を十分かける傾向が認められたとしている（關戸・内海 1997）。家族の存在が食生活の乱れや食事への満足度に影響を与えていることが示唆された。

では、家族以外の存在が影響を与えることはあるのだろうか。野津山希は家族との同居者ではなく、寮生活または一人暮らしをしている女子大学生にアンケート調査を行い、夕食形態・心理的ストレス反応・孤独感を測定した。

夕食中の会話は一人暮らしの生徒の方が寮暮らしの生徒より多かった。一人暮らしだか

らと言って孤食率が高いわけではなく、積極的に友人と夕食をとることを心掛けていた。しかし、心理的ストレス反応と不機嫌・怒りにおいては寮より一人暮らしの方が高いことが示唆されたとしている（野津山 2010）。

一人暮らしでも孤食率は低いものの、その分外食が増えることになる。これもまた食生活の乱れにつながっていくと思われる。

ここまで見てみると、特に一人暮らしをしている学生が、食生活が乱れやすいように思える。食に対する満足感も、同居者や寮生に比べれば一人暮らしの方が低いことが見られる。また、夜型の生活スタイルをとっている学生も食生活が乱れやすいとなっているので、課外活動なども関わっていることが考えられる。

3. 仮説

以上のような先行研究に基づき、3 つの仮説を立てる。

第 1 の仮説は、一人暮らしに関する仮説である。大学生での加工米飯を食べる割合は一人暮らしの方に多くみられる（豊瀬 2001）。また、積極的に友人と夕食をとる（野津山 2010）ことより、外食が増える。一人暮らしの学生は親と同居している学生に比べて、帰宅時間なども気にしなければ、自分以外に食事を作ってくれ、栄養を気にかけてくれる存在もまわりにいない。起床時間も自分で決めることから、寝過ごして朝食も抜きやすいと考えられる。このことから、「一人暮らしの学生ほど食生活が乱れやすい」という仮説が導出される。

第 2 の仮説は、家族に関する仮説である。第 1 の仮説では、親と同居していない一人暮らしの学生は食生活が乱れやすいとしたが、たとえ同居していたとしても、両親が家にいない状況であれば、一人暮らしとあまり変わらないのではないだろうか。両親が共働きの場合、親自身も忙しく帰りが遅いことがあるため、夕食や昼食が用意できないことが多くなることが考えられる。そのため自分で外食したりすることで食生活が乱れやすいのではないか。このことから、「親が共働きの学生ほど、食生活が乱れやすい」という仮説が導出される。

第 3 の仮説は、生活スタイルに関する仮説である。夜遅くに活動する夜型タイプの学生は朝食を抜きやすく、食べる場合も朝型タイプの学生より遅い時間であった（關戸・内海 1997）ことから、帰宅時間が遅くなりやすい、部活やサークルなどの課外活動が原因となるのではないだろうか。夜遅くに課外活動が終わることで、そのままの流れで友人と外食に行くか、または家に帰って食事をとるとしても、通常よりも遅くに夕食をとることになり、結局次の日の朝食は抜いてしまうなどの食生活の乱れが起こりうると考えられる。このことから、「部活やサークルなどの課外活動に参加している学生ほど食生活が乱れやすい」という仮説が導出される。

以上 3 つの仮説を、アンケート調査を行うことによって分析することとする。

4. 分析結果

4.1　食生活の乱れの測定

従属変数となる食生活の乱れは、普段の食生活に関する 8 つの問いに関して回答を求めた。質問内容としては、「朝食をぬくことがある」「夜遅くに食事をすることがある」「栄養のバランスをあまり気にしていない」「野菜や果物はあまりとっていない」「塩分の取りすぎなどについてあまり気にしていない」「間食が多い」「ファーストフードやインスタント食品をよく食べる」「外食が多い」の 8 つであり、これに対して「あてはまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」のうちいずれかを選んで回答してもらい、値が高くなるほど食生活が乱れているように変換・得点化したうえで合算して測定した。表 1 は本調査における食生活の乱れの度数分布表である。

表1　食生活の乱れの度数分布

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	1点	48	19.1	19.4	19.4
	2点	37	14.7	14.9	34.3
	3点	1	.4	.4	34.7
	13点	76	30.3	30.6	65.3
	17点	66	26.3	26.6	91.9
	21点	20	8.0	8.1	100.0
	合計	248	98.8	100.0	
欠損値	システム欠損値	3	1.2		
合計		251	100.0		

最も多かったのが 13 点であり、全体のうち 30.3%の割合を占めている。その次に多いのが 17 点で、26.3.%の割合を占めており、ここまでであわせて 56.6%と半数以上の割合を占めていることがわかる。

4.2　食生活への影響の測定

第 1 の仮説では、一人暮らしの学生の食生活の乱れを調査するため、「一人暮らし（寮を含む）かどうか」を問いとして測定した。

第 2 の仮説では、両親が共働きの学生の食生活の乱れを調査するため、「母親が働いているかどうか」を測定した。基本的には共働きではない場合父親が働いている場合が多い。そのため、母親の職業に関しての質問で、母親が専業主婦の場合と働いている場合とに分けて測定をした。

第 3 の仮説では、課外活動を行っている学生の食生活の乱れを調査するため、「現在、部活またはサークルに参加しているかどうか」を問いとして測定した。

これらの独立変数を用いて仮定の検定を行っていく。

4.3　仮説の検定

以上のような従属変数と独立変数の関連について、「3.仮説」で述べた 3 つの仮説それぞれに対して分析を行う。

まず、第 1 の仮説である「一人暮らしの学生ほど食生活が乱れやすい」を検定するために、一人暮らしをしているか否かごとに、食生活の乱れを点数化したもので平均値を出した。それが下の表 2 である。

表2　一人暮らし別にみた食生活の平均値

一人暮らしか否か	平均値	度数	標準偏差	最小値	最大値	合計
はい	15.22	36	5.51	4	24	548
いいえ	13.21	212	4.74	0	24	2800
合計	13.50	248	4.90	0	24	3348

平均値を比較してみると、一人暮らしの学生が 15.22 点で、親と同居している学生が 13.21 点という値だった。両者の差は 2.01 点で、わずかながら差があることが分かった。また最大値は同じだが、最小値を見てみると、一人暮らしの学生は 4 点、同居している学生は 0 点となり、最小値も一人暮らしの学生の方が高いことが分かる。

次に、第 2 の仮説である「親が共働きの学生ほど、食生活が乱れやすい」を検定するため、母親の職業ごとに食生活の乱れの平均値を出した。

表3　母親の職業別にみた食生活の平均値

母親の職業	平均値	度数	標準偏差	最小値	最大値	合計
働いている	13.85	144	4.95	2	24	1995
働いていない	12.71	93	4.79	0	24	1182
合計	13.41	237	4.91	0	24	3177

上の表 3 より平均値を比較してみると、母親が働いている学生が 13.85 点で、働いていない学生が 12.71 点という値になっている。両者の差は 1.14 点であり、一人暮らし別の差よりもさらに小さな値となっていた。またこちらの方も最大値は同じだが、最小値は母親が働いている学生は 2 点、働いていない学生は 0 点と、母親が働いている学生の方が高いことが分かった。

では、一人暮らしをしている学生の両親が共働きという状況ではどうだろうか。一人暮らし別・母親の職業別にみた結果とどのような差が生まれるのか見るために、独立変数を 2 つに増やして検定を行った。表 4 はその結果である。

表4　母親の職業別・一人暮らし別にみた食生活の平均値

母親の職業	一人暮らしか否か	平均値	度数	標準偏差	最小値	最大値	合計
働いている	はい	16.38	24	4.45	9	24	393
	いいえ	13.35	120	4.90	2	24	1602
	合計	13.85	144	4.95	2	24	1995
働いていない	はい	13.11	9	7.64	4	24	118
	いいえ	12.67	84	4.45	0	24	1064
	合計	12.71	93	4.79	0	24	1182
合計	はい	15.48	33	5.57	4	24	511
	いいえ	13.07	204	4.72	0	24	2666
	合計	13.41	237	4.91	0	24	3177

表 4 より、それぞれ平均値を比較してみると、母親が働いていてなおかつ一人暮らしを行っている学生が 16.38 点と最も高く、母親は働いておらずさらに同居をしている学生は 12.67 と最も低い値となった。両者の差は 3.71 点と、これまでで一番大きな差となっている。また最小値を見ても、母親が働いておらず同居している学生は 0 点だが、母親が働いていてなおかつ一人暮らしを行っている学生は 9 点とこれまでと比べると高い値になっていた。

母親が働いている中で一人暮らし別に平均値の差をみると、一人暮らしの学生が 16.38 点、同居している学生が 13.35 点と、両者の差は 3.03 点となっている。これに対し、母親が働いていない中で一人暮らし別に平均値の差を見ると、一人暮らしの学生が 13.11 点、同居している学生が 12.67 と、その差は 0.44 とほとんど差がない。さらに母親が働いていて同居している学生の平均値と、母親が働いていない一人暮らしの学生の平均値を比べると、その差は 0.24 とこちらも極わずかでほとんど差がないことが分かった。同居しており、母親が働いている学生と、働いていない学生との平均値の差は 0.68 と、この差もあまりないことが分かった。

表5　部活・サークル所属別にみた食生活の平均値

部活・サークルへの所属	平均値	度数	標準偏差	最小値	最大値	合計
はい	13.87	167	4.91	3	24	2317
いいえ	12.75	80	4.83	0	23	1020
不詳	11.00	1	.	11	11	11
合計	13.50	248	4.90	0	24	3348

最後に、第 3 の仮説である「部活やサークルなどの課外活動に参加している学生ほど食生活が乱れやすい」を検定するため、部活・サークルの所属ごとに食生活の乱れの平均値

を出した。それが表 5 である。

平均値を比較すると、部活・サークルに所属している学生は 13.87 点、していない学生は 12.75 点という値であり、その差は 1.12 点とわずかに差があることが分かった。最大値を見ると所属していない学生は、所属している学生よりも 1 低い 23 点で、最小値は所属している学生は 3 点となり、所属していない学生よりも高い値がでた。

5. 考察

本稿では、生活スタイルが変化しやすい大学生という状況が、人の食生活にどのような影響を及ぼすのかを明らかにすることを目的として、食生活の乱れと、大学生のライフスタイルとの関連を分析した。分析にあたって、先行研究より「一人暮らしの学生ほど食生活が乱れやすい」「親が共働きの学生ほど、食生活が乱れやすい」「部活やサークルなどの課外活動に参加している学生ほど食生活が乱れやすい」という 3 つの仮説を立て、調査を行った。

まず「一人暮らしの学生ほど食生活が乱れやすい」という第 1 の仮説だが、一人暮らしの学生の方が、同居している学生よりも、平均値・最小値が共に高かったため、この仮説は成り立つと考えられる。これは先行研究にもあるように、料理が面倒という理由から加工米飯を使いやすい（豊瀬 2001）ことや、友人との会話を求めて共に外食に行くことなどが、食生活の乱れにつながると思われる。また、たとえ自炊をしていたとしても、ただでさえ面倒と思われている料理を、毎日違うものを一人分作ることは、かなり面倒であると推測される。それゆえ、一つの料理を多めに作り、何日間か食べ続けるという行為により、偏った食生活になることもあるのではないだろうか。

次に、「親が共働きの学生ほど、食生活が乱れやすい」という第 2 の仮説だが、平均値・最小値の差がわずかにあるので、母親の職業状況による影響は少しあると考えられる。母親の職業別・一人暮らし別にみると、母親が働いていて一人暮らしの学生の平均値は他の平均値に比べ高いことから推測すると、普段から母親が料理をなかなか出来ない状況にあるとそれに学生は慣れてしまい、乱れた食習慣が日常となり、それが一人暮らしをすることによってより促進されていると考えられる。

「部活やサークルなどの課外活動に参加している学生ほど食生活が乱れやすい」という第 3 の仮説では、平均値を見るとわずかに差があることから、部活・サークルに所属している学生の方が少しばかり食生活が乱れていると思われる。あまり差が見られない原因は、部活・サークルに所属していなくても、バイトなどで帰りが遅く、外食をすることによる栄養バランスの偏りや、夕食が遅れなどにあるのではないだろうか。

最後に、今回の調査ではあまり満足度や孤独感などの精神面からの視点で分析をすることがなかったので、今後はそれも含めてさらにさまざまな視点から、食生活との関連を見ていきたいと思う。

文献

野津山希, 2010,「女子大学生の過去および現在の夕食形態とコミュニケーション・スキル, ストレス，孤独感との関連性」『福山大学人間文化学部紀要』10: 87-96.

關戸啓子・内海滉，1997,「大学生の食習慣と食に対する意識に関する研究」『川崎医療福祉学会誌』7(2): 317-326.

豊瀬恵美子, 2001,「大学生の健康・食行動:加工米飯の場合」『帝京短期大学紀要』12: 15-20.

第 12 章　大学生活とストレス

1. はじめに

現代の日本は、ストレス社会といわれている。多くの人がストレスを強く感じ、それを避けて生活することは難しい。社会が発展する中で人々のストレスは増大し、昔に比べてストレス度も高くなっていると考えられている。実際にストレスが原因でうつ病になることもある。しかし、うつ病とは無縁の生活を送っている人もいる。ストレスを感じやすい人と感じにくい人の違いとは何か。大学生活とストレスの関連はあるのか。そのようなことを疑問に思った。

大学生は自分の意志が確立して将来のことや、自分のあり方などについて悩むことが多くなる。また、人間関係や外見への関心も強まる時期である。私自身はストレスを感じると音楽を聞いたり、友人と話をして解消している。他の学生はどのようにストレスを解消しているのか、またその原因は何なのかが気になった。

そこで、大学生活を送る中でどのような時にストレスを感じているのかを焦点にし、検証しようと思っている。

2. 先行研究

大学生のストレスに関する研究は多くなされている。ストレスを感じやすい人と感じにくい人の違いや、ストレスを感じている原因について、また、ストレスの解消法にはどんなものがあるのかなど、様々な視点からストレスについての研究がなされている。このような研究の中から「どのような大学生がストレスを感じているのか」ということに焦点を合わせ研究することにした。

先行研究 1 の山田ゆかり・天野寛(2003)「大学生におけるストレスとコーピング」では、大学・短大生のストレスとコーピングを適応性の指標として取り上げ、ストレスとコーピングおよび生活意識に関わる調査を目的としている。先行研究 2 の大石哲夫・芹沢幹夫(2004)「静岡県立大学生のストレスについて」では、学生のもつストレスについて、より正確な把握を目指し、少しでも理解を深め、問題解決の糸口を探ることが目的となっている。先行研究 1、2 ともに大学生のストレスをより正確に検証し、ストレス度や生活意識を目的としている。

調査対象は先行文献 1 では大学・短大学生の女子を対象に生活意識・ストレスチェック・コーピング尺度の 3 領域で調査用紙が構成されており、ストレスのレベルは全体的に高く、特に短大女子でその傾向が著しい。背景となるストレッサーについては大学生活に直接関連するものばかりではなく、生活領域全般に渡っているが、特に短大女子では課題の多さ

が主要なストレッサーになっている。また、コーピングについてはストレスの程度が高い短大女子群が頻繁に行っている。ストレスとコーピングの関連性についてはさらに検証する必要性があるが、少なくとも積極的なコーピングを行っているためにストレスレベルが低くなるという結果とはなっていないということが導きだされている(山田・天野 2003: 1)。先行文献 2 では静岡県立大学 1 年生で、身体運動学科を履修している学生を対象にしており、生活の満足度が学生生活のストレスに影響している。非ストレス群は充実した時間を重ねているという認識があり、大学の授業も面白いと感じ、接触する人からも何らかのものを学ぶ姿勢がある。ストレス群の 70～80%近くが授業、試験にストレスがあるという結論を得ている(大石・芹沢 2004: 43-44)。先行研究 1、2 から、大学生の中でも対象が異なることがわかる。また、先行研究 1 ではストレス度の高い学生のコーピング尺度などの結果を導いているが、先行研究 2 ではストレス群、非ストレス群というようにストレスを感じにくい人の結果にも触れていることがわかる。

3. 仮説

先行研究から、性格特徴や行動パターンについての上位を占めたものが悲観的・消極的な性格であったことやストレスを感じる項目として、多くの大学生は授業や試験をあげていることがわかった。授業や試験というものは学生の特徴的なものだと思い、大学生活とストレスには大いに関連があると思う。また、友人関係はストレスの原因にもなりうるが、特に女子はストレスを感じたときには友人の存在が重要であるという結果が出ている。非ストレス群は友人・仲間・クラブ・運動・読書・自分の性格によりストレス群より高い割合でストレスを解消していることから人との関係が多くを占めていることが分かり、ストレス解消には重要になってくると考えられる。以上の先行研究に基づき、本稿では以下の 3 つの仮説を導出した。

仮説 1　消極的な人ほどストレスを感じやすい
仮説 2　授業に関心がない人ほどストレスを感じやすい
仮説 3　相談や悩みを話せる友人が少ない人ほどストレスを感じやすい

以上の仮説には性格とストレスの関連性・ストレスの原因・ストレス解消法が必要な項目であり、これらを検証していくことで大学生活とストレス関連が明らかにできると考えている。

4. 分析結果

4.1　ストレス度測定と分布

従属変数となるストレス度は「不安である」「物事に集中できない」「悩みがある」「疲れている」「イライラする」という 5 つの問に対する「1. あてはまる　2. ややあてはまる　3.

あまりあてはまらない　4. あてはまらない」という回答を「あてはまる=3　ややあてはまる=2　あまりあてはまらない=1　あてはまらない=0」と値が高くなるほどストレス度が高くなるように変換したうえで得点化し、合算して測定した。図 1 は本調査におけるストレス度の分布である。

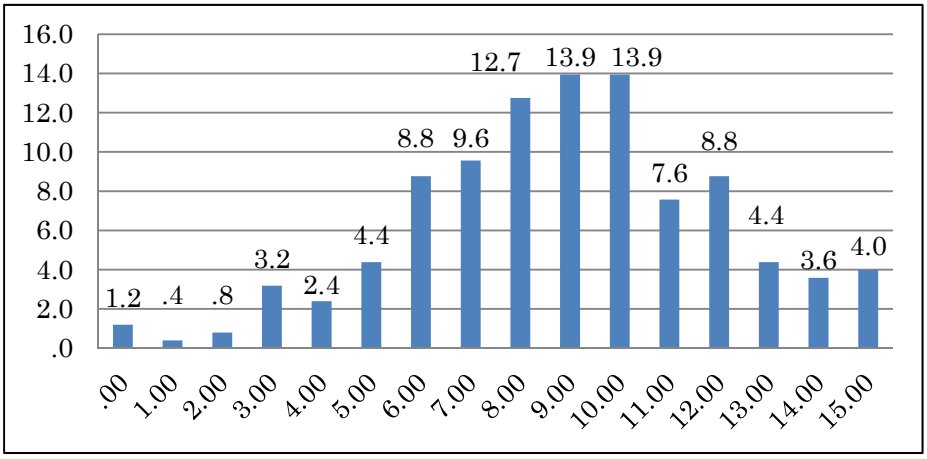


図 1　ストレス度

図 1 から、最高得点が 15 点で 9 点、10 点の割合が高いことが分かる。そのため、ストレス度は比較的高いことが分かる。

4.2　消極的度・授業関心度・友人関係の測定

今回の測定では独立変数となるものは 3 つある。1 つ目の消極的度は「いつもせかせかしている」「いつも忙しくしているのが好きだ」「毎日時間が過ぎるのが早い」「注目されることが好きだ」「めだちたがり屋だ」「無視されるのは我慢できない」「自分の意見をつき通す方だ」「人に指図をするのは好きな方だ」「何事も先頭に立ってする方だ」というパーソナリティに関する 9 つの問いに対する「1. あてはまる　2. ややあてはまる　3. あまりあてはまらない　4. あてはまらない」という回答を「あてはまる=3　ややあてはまる=2　あまりあてはまらない=1　あてはまらない=0」に変換し、回答に散らばりがあったため、度数分布の統計量で「0～9＝1　10～13=2　14～27=3」の 3 つのグループ分類した。消極的度は 1 が弱、2 が中、3 が強となる。そして、この独立変数である消極的度と従属変数であるストレス度をグループ平均という形で測定した。

2 つ目の独立変数は関心がもてる科目についてである。これは「今年度の前期に履修していた科目の中で、内容に関心がもてるものはどれくらいありましたか。」の問に対する「1. ほとんどすべての科目に関心があった　2. ある程度の科目に関心があった　3. あまり関心がもてる科目はなかった　4. ほとんどの科目に関心がもてなかった」という回答の分布をみて、2、3 に回答が集中したため、「1、2＝1. 関心があった　3、4＝2. 関心がもてな

かった」の 2 つのグループに分類した。そして、この独立変数である関心がもてる科目と従属変数であるストレス度をグループ平均という形で測定した。

3 つ目の独立変数は相談や悩みを会って話せる友人の人数についてである。これは「相談や悩みを実際に会って話せる友人がいますか。」の問で、おおよその人数を記入してもらった。この回答にも散らばりがあったため、度数分布の統計量で「1～2＝1　3～4＝2　5・6・7・8・10・16・20・23・30＝3　9998＝1」の 3 つのグループに分類した。そして、この独立変数である相談や悩みを会って話せる友人の人数と従属変数であるストレス度をグループ平均という形で測定した。

4.3　仮説の検定

以上のような従属変数と独立変数の関連について、「3. 仮説」で述べた仮説 1「消極的な人ほどストレスを感じやすい」仮説 2「授業に関心がない人ほどストレスを感じやすい」仮説 3「相談や悩みを話せる友人が少ない人ほどストレスを感じやすい」という 3 つの仮説それぞれについて分析を行った結果である。

表 1　ストレス度と消極的度のグループ平均

消極的度点数	平均値	度数	標準偏差
0～9 点(弱)	8.85	82	3.14
10～13 点(中)	8.79	76	2.83
14～27 点(強)	9.04	89	3.21
合計	8.90	247	3.06

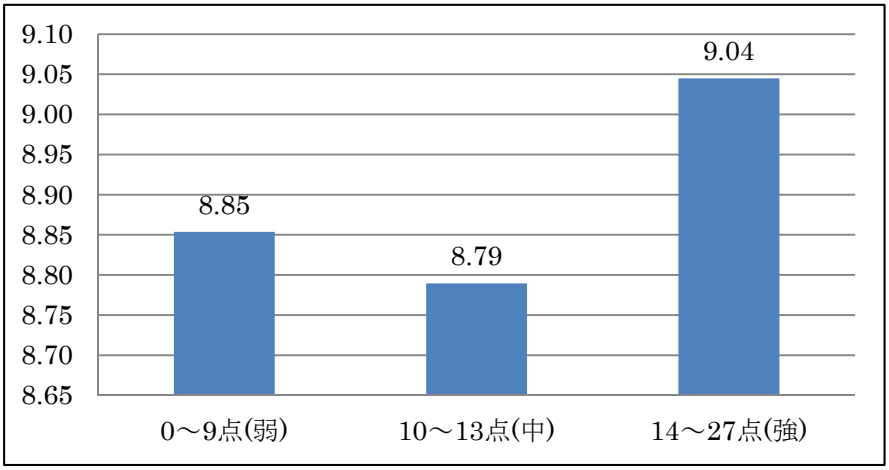


図 2　ストレス度と消極的度のグループ平均

表 1、図 2 はストレス度と消極的度をグループ平均で測定した結果である。表 1、図 2 から分かるように消極的度点数が高い人(14～27 点)は極端に平均値が高いわけではない

が、ストレスを感じやすいといえる結果となった。

表 2　ストレス度と授業関心のグループ平均

授業関心度	平均値	度数	標準偏差
関心がある	9.18	115	3.12
関心がない	8.62	133	3.10
合計	8.88	248	3.11

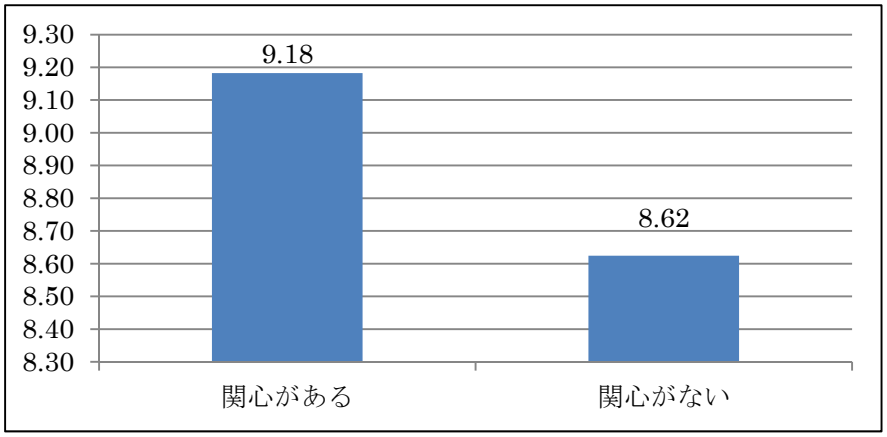


図 3　ストレス度と授業関心のグループ平均

表 2、図 3 はストレス度と授業関心をグループ平均で測定した結果である。表 2、図 3 から分かるように、授業関心度はグラフでは差があるようにみえるが、数字を見るとそれほど差はない。関心がない人よりも関心がある人の方が平均値は高いという結果となった。

表 3　ストレス度と相談や悩みを話せる友人の数のグループ平均

友人の人数	平均値	度数	標準偏差
0～2 人	8.95	73	3.26
3～4 人	8.36	85	3.28
5 人以上	9.29	91	2.78
合計	8.87	249	3.11

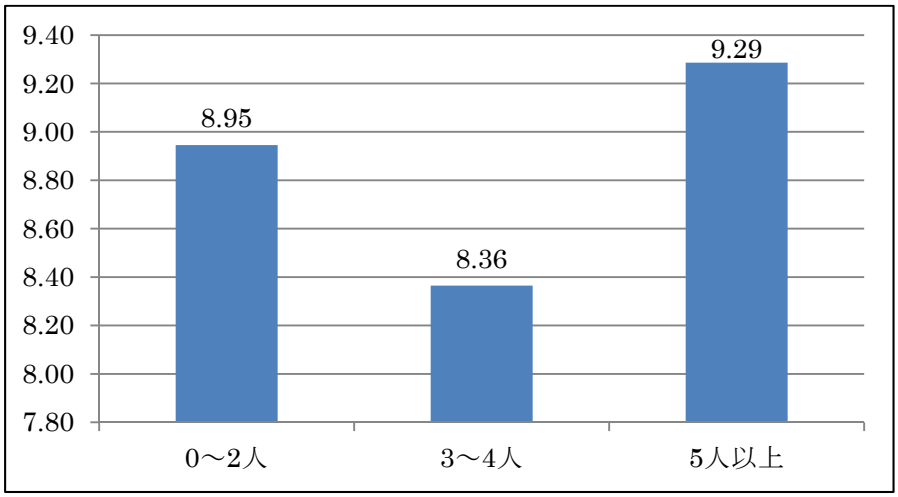


図 4　ストレス度と相談や悩みを話せる友人の数のグループ平均

表 3、図 4 はストレス度と相談や悩みを話せる友人の数をグループ平均で測定した結果である。表 3、図 4 から分かるように、友人の人数にはそれほど差はないが、0～2 人のストレス度の平均値は高く、5 人以上と答えた人の方がそれを上回る結果となった。

分析結果から、仮説 1 の「消極的な人ほどストレスを感じやすい」という傾向はあったものの、仮説 2、3 ではあてはまるものがなかったため、追加で測定をした。測定内容として、「ストレス度と消極的度のグループ平均」「ストレス度と授業関心のグループ平均」「ストレス度と相談や悩みを話せる友人の人数のグループ平均」を性別、学年別で測定した。性別は「男性、女性」で行い、学年は「1 年生=1　2、3 年生=2」に変換した。

以下の図 5、図 6 が追加測定の結果である。性別、学年別で測定した結果、変化がないものは除き、参考になる「性別でみたストレス度と消極的度のグループ平均」と「性別でみたストレス度と授業関心のグループ平均」の結果の 2 つをあげている。

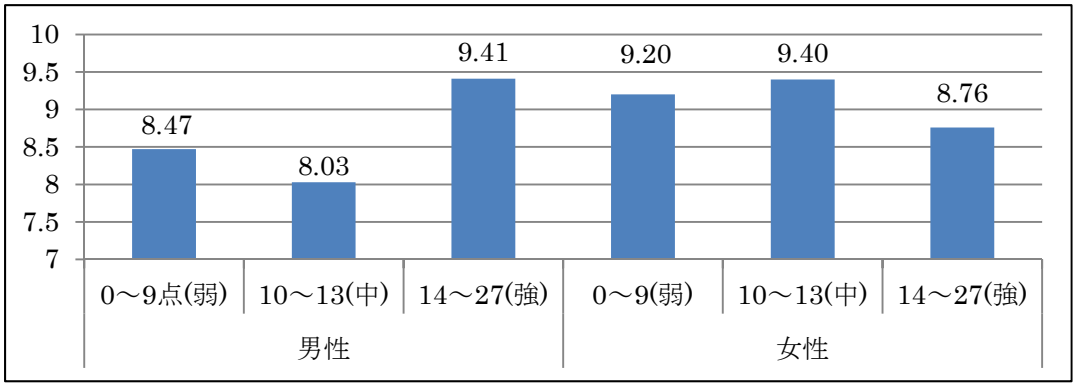


図 5　性別でみたストレス度と消極的度のグループ平均

「性別、学年別でみたストレス度と消極的度のグループ平均」では、どちらも散らばり

があった。性別では、図 5 で分かるように男性はU字型になっており、女性は山型になっている。学年別では高学年になるにつれて値が高くなる傾向にある。

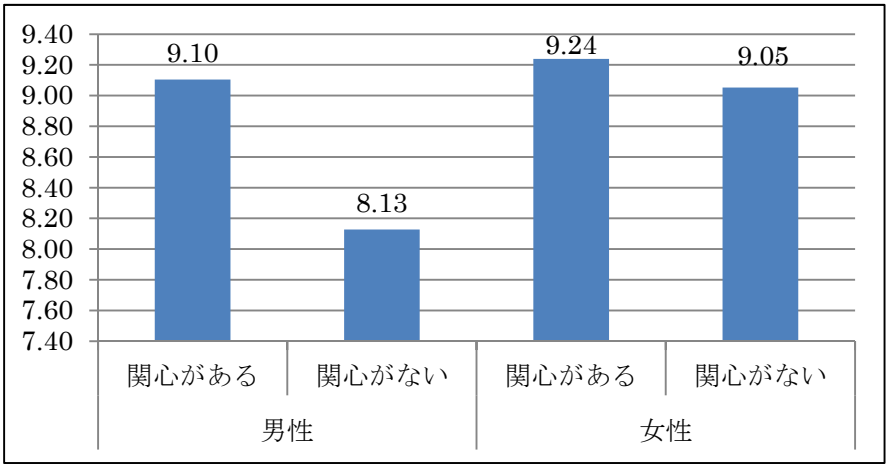


図 6　性別でみたストレス度と授業関心のグループ平均

「性別、学年別でみたストレス度と授業関心のグループ平均」では、性別、学年別ともに授業に関心があると答えた人が多かった。性別では、図 6 で分かるように男性は授業に関心のある人が多く、女性は授業関心度がほぼ変わらない結果となった。

「性別、学年別でみたストレスと相談や悩みを話せる友人の数のグループ平均」では、性別、学年ともに平均値にあまり差はなかった。

5. 考察

本稿では大学生のストレスを目的として大学生活とストレスの関連を分析した。先行研究より「消極的な人ほどストレスを感じやすい」「授業に関心がない人ほどストレスを感じやすい」「相談や悩みを話せる友人が少ない人ほどストレスを感じやすい」という 3 つの仮説を構成した。そして、「ストレス度」を従属変数とし、「消極的度」「授業関心度「友人関係」の独立変数をグループ平均で測定した。

分析結果で、仮説 1 では消極的度点数が高い人(14～27 点)は平均値が高いため、ストレスを感じやすいという結果が得られた。しかし、消極的度点数が低い人(0～9 点)は中間の人よりも平均値が高いため、消極的な人ほどストとレスを感じやすいというのは一概にはいえないのではないだろうか。追加で分析した「性別でみたストレス度と消極的度のグループ平均」で男性は結果がU字型なっており、反対に女性は山型となっている。このことから男性の方が消極的または接触的な性格の両極端の人がストレスを感じやすいことが考えられる。仮説 2 では、授業に関心がある人の方がストレスを感じやすいため、仮説は違っている。授業に関心があることと、ストレスは関係性がないという結果が得られた。しかし、追加で分析した「性別でみたストレスと授業関心のグループ平均」で男性は関心

がある人に比べ、関心がない人の平均値が低い。このことから、男性は女性よりも授業に関心があるため､成績やテスト･課題でストレスを感じているのではないかと考えられる。仮説 3 では、友人の人数が 0～2 人のストレス度の平均値は高いが、5 人以上と答えた人の方がそれを上回る結果となったため仮説は違った。ストレスと友人の人数は関係性がないという結果が得られた。いくら友人の人数が多くても相談や悩みを話せるとなると人数が限定されるのではないだろうか。この調査では「どのような大学生がストレスを感じているのか」に焦点をあてて調査してきた。結果、仮説は 3 つとも違っていたが、仮説として考えた傾向には当てはまるものがあった。傾向として性格は消極的な人が多く、授業に関心はあるもののストレスを感じやすい。また、相談や悩みを話せる友人の人数は個人によってさまざまであることが分かった。

今回の調査では大学生活とストレスの「消極的度」「授業関心度」「友人関係」に焦点をおいたが、今後、調査を行う時は具体的なストレスになる項目や解消法などを調査することができれば、より詳しく大学生のストレス傾向が分かるのではないか。そして、さまざまな文献を読み大学生のストレスに関する傾向を知る必要がある。

文献

大石哲夫・芹沢幹夫，2004,「静岡県立大学生のストレスについて」『静岡県立大学・経営情報学部学報』17(1): 35-46.

山田ゆかり・天野寛，2003,「大学生におけるストレスとコーピング」『横浜国立大学教育紀要』33: 241-264.

第 13 章　大学生のおしゃれ意識

1. はじめに

衣料品市場は危機的状況下に置かれている。それは、深刻な不況によるデフレの拡大、更にはデジタル世代の感性圧縮などを主とした負の要素が、人々の衣類への消費活動を停滞させてしまっているからだ。国内のマーケットが縮小していくなかで、各アパレル企業が積極的な海外進出を図っていることからも、我が国の人々が衣生活への関心を低下させている事実は否めない。景気回復の兆しが見えない昨今の我が国において、収入の少ない若い世代の消費が慎重になることは、もはや避けられない事態となってしまった。本来、おしゃれの全盛期を迎え、良き消費者としてファッション産業を支えるはずの若者たちが、服をロクに買うことも出来ない、または服への関心を失くしてしまっているという現状は何とも嘆かわしい限りである。

さて、上記でおしゃれの全盛期という表現を用いたが、筆者はこの言葉に最も相応しいのは、やはり大学に所属する学生たちであると考える。その理由は、キャンパスライフを送ることによる考え方の変化などという心理的な作用もあるが、もっと根本的に、会社や義務教育課程の学校（例外もあるが）などと比べて、大学は私服を着用する機会が圧倒的に多い公共機関であるからだ。最も服装の自由に恵まれた大学生たちは、どれほどの衣類への関心を抱いているのだろうか。また、衣料品の消費が落ち込んでしまった現代においても、洋服への消費を活発に行うのは、どのような学生なのだろうか。今回、この疑問を解き明かすために、“おしゃれ意識”という抽象的な概念を“大学生の洋服の購入頻度”という具体的なものに置き換えた。こうして、本調査のリサーチクエスチョンは「どのような学生の服の購入頻度が高いのか」というものになり、それをベースに研究を進めた。

2. 先行研究

本調査に先んじて、おしゃれへの関心の高まりに関するいくつかの研究がなされていた。そのなかでも本調査においては、『小学生のおしゃれ意識』（伊地知美知子，2000，文教大学教育学部紀要）、『身体装飾について　第 1 報　ファッション意識との関連』（宇野保子・近藤信子・中川早苗，2006，中国学園紀要）、『女子大学生の体型とやせ願望』（半藤保・川島友子，2009，新潟青陵学会誌）の 3 つの論文を参考に、本調査のリサーチクエスチョンの答えを追求した。本節では、3 つの参考文献の概要を紹介し、さらに本調査のリサーチクエスチョンとの関連を述べていく。

先行研究のなかで、本調査のリサーチクエスチョンの主題である“おしゃれ意識”を直接的に導き出したものが『小学生のおしゃれ意識』であった。（ただし、ここでの“おしゃ

れ意識”は洋服の購入頻度ではない）この研究では、おしゃれへの関心が低年齢化していることに着目し、小学 6 年生と小学 3 年生の児童を対象に衣生活に関する調査を実施し、学年と男女差の面から“おしゃれ意識”について考察を行った。その内容は、通学服の選択方法（3 項目）、洋服の購入方法（5 項目）、おしゃれのポイント（7 項目）、洋服の好み（7 種）、日常の着装行動（11 項目）を 2 件法（好き・きらい）、（はい・いいえ）で調査したものである。質問項目ごとにそれぞれ統計的検定を行い検討した結果、総体的に“おしゃれ意識”は男子よりも女子、さらに女子においては 3 年生よりも 6 年生の方が高いことが分かった（男子の場合、学年差による違いはほとんど見られなかった）。

この研究で、同じ小学生でも学年差と性別で“おしゃれ意識”の強さに違いのあることが明らかになり、それは本調査の対象である大学生にも応用できると判断した。

そして、行為や願望と“おしゃれ意識”の関連を導き出した先行研究が『身体装飾について 第 1 報 ファッション意識との関連』と『女子大学生の体型とやせ願望』の 2 つである（ここでの“おしゃれ意識”も洋服の購入頻度という意味ではない）。

まず、『身体装飾について　第 1 報　ファッション意識との関連』では、多様化したファッションにおいて、変化や個性を付加する身体装飾行為に着目した。そのなかでも、若者を中心に採用されているヘアカラー、ピアス、眉剃りという 3 つの身体装飾行為を取り上げ、これらの行為の採用実態、採用理由、採用後の気分の変化などを明らかにし、“おしゃれ意識”との関連を検討した。調査方法は大学生と社会人を対象に配票留置法で行い、内訳はヘアカラー（9 項目）、ピアスの装着（7 項目）、眉剃り（6 項目）、その他（4 項目）であった。すべての質問項目について、単純集計、クロス集計を行った結果、3 つの身体装飾行為はそれぞれ異なる意味合いを持ってファッションのなかで採用されていることがわかった。まず、ヘアカラー経験者の主な採用理由は「気分、雰囲気を変えたい」、「イメージチェンジをしたい」という“おしゃれ意識”のなかでも変身願望につながるものが多かった。そして、ピアスの装着経験者の主な採用理由は「服装、髪型に合わせて、おしゃれを楽しみたい」であり、ファッションに対する積極的な態度が表れていた。一方、眉剃りについては「身だしなみとして」という理由が多く、他の身体装飾とはやや異なる結果となった。

次に、『女子大学生の体型とやせ願望』においては、若い女性に特徴的な風潮として“痩せ願望”の増加があることを指摘し、現代の女子大生が実際の自分の体型をどのように思っているか、またはどのような体型になることを望んでいるかを知るために調査を行った。その概要は、女子大学生を対象に無記名、選択肢方式、一部自由記載方式からなるアンケート調査の後、得られた成績を x 二乗検定にて統計学的処理を行った。その結果の一部で、女子大学生が痩身願望を抱く理由で最も多いものが「おしゃれがしたいから」いうものであることが明らかになった。

これら 2 つの研究から、着衣以外の要因からも“おしゃれ意識”を調査することが可能だと判断した。特に『女子大学生の体型とやせ願望』で、直接的にファッションと関連し

ない調査で“おしゃれ意識”を炙り出すことに成功している事から、視野を広げて“おしゃれ意識”を調査する必要が生まれた。また、両研究とも大学生を中心とした若い世代の人間を対象としていることから、大学生は“おしゃれ意識”を調査するには非常に適した存在だと確認できた。

3. 仮説

以上で紹介した先行研究に基づき、本調査では 3 つの仮説を立てた。本節ではその内容と、仮説を立てた経緯を紹介していく。冒頭でも述べたが、“おしゃれ意識”という極めてあいまいな言葉を“洋服の購入頻度”に置き換えることにより、本調査を進めやすくした。“おしゃれ意識”と“洋服の購入頻度”が必ずしもイコールであると断言することはできないが、購入金額など個人差の大きいものに代用するよりは適当であると判断した。

第 1 の仮説は、「下級生に比べ上級生の服の購入頻度は高く、その傾向は女子に顕著である」というものである。これは『小学生のおしゃれ意識』より導出した仮説で、具体的に言えば大学 1 年生よりも大学 3 年生の方が服をよく買っているということである。『小学生のおしゃれ意識』では、小学 3 年生の女子より 6 年生の女子のおしゃれ意識が高いことが判明した。この結果より、大学においても下級生よりも上級生の“おしゃれ意識”が高いと仮定できる。また、小学生と大学生では差異が生まれることも予想されるので、女子のみを対象とせず、女子に顕著な傾向であるという仮説を立て男女ともに調査した。

第 2 の仮説は、「身体装飾行為の採用者、または経験者ほど服の購入頻度が高く、その傾向は女子に顕著である」とし、これは『身体装飾について　第 1 報　ファッション意識との関連』を参考にした仮説である。ここでの身体装飾行為は、先行研究でも取り扱われ、“おしゃれ意識”との深い関連を指摘されていたヘアカラー、ピアスの装着と、新たにヘアパーマを加えた 3 つに限定した。もう 1 つ、先行研究で扱われていた眉剃りの項目を除外した理由として、眉剃りは“おしゃれ意識”のなかでもルーティンワークとして採用されている傾向が強く、極めて多くの人間が日常的に採用している行為であることが挙げられる。一方、同じヘアアレンジの手法であるヘアカラーが“おしゃれ意識”と強く関連していたことを踏まえ、ヘアパーマを新しい項目として追加した。『身体装飾について 第 1 報 ファッション意識との関連』では、身体装飾行為はファッション、つまり本稿で言うところの“おしゃれ意識”のなかで採用されていることが証明されていた。本調査ではこの結果を、身体装飾行為を採用、または過去に経験している学生はおしゃれへの関心が高いと仮定する材料とした。また性差については、先行研究において男子に比べ女子の方が“おしゃれ意識”のなかで身体装飾行為を採用していた事から、本調査でも女子に顕著な傾向であるという仮定を加えた。

第 3 の仮説は、「痩身願望のある学生の方が無い学生より服の購入頻度が高く、その傾向は女子に顕著である」というものだ。仮説の基になった先行研究は『女子大学生の体型とやせ願望』で、この研究では女子大学生がダイエットをする、または痩身願望を抱く理由

として最も大きいのが「おしゃれをするため」であることが分かった。この結果を受け、本調査では「痩身願望を抱く学生は“おしゃれ意識”が高い」と仮定し、痩身願望と服の購入頻度の関連性を解き明かすことに決定した。また、参考の先行研究は論題からも分かる通り、女子大学生のみをテーマとしたものだったが、本調査では男女ともに調査対象としたうえで、性別でより痩身願望が強いと思われる女子にその傾向が顕著であることも仮説の一部とした。

4. 分析結果

本節では、上述した 3 つの仮説の結果を発表する。その前に、調査で用いた従属変数と独立変数についての概要をまとめておきたい。

4.1　洋服の購入頻度の測定と分布

従属変数となる洋服の購入頻度は「どれぐらいの頻度で洋服を買っているか」という問いに対する「月に数回」「月に 1 回くらい」「年に数回」「年に 1 回くらい」「自分ではほとんど洋服を買わない」という回答を、値が高くなるほど購入頻度が高くなるように得点化した。表 1 は本調査における洋服の購入頻度の分布である。

表 1　洋服の購入頻度の分布

		性別		合計
		男性	女性	
洋服の購入頻度	月に数回	14	44	58
		5.6%	17.6%	23.2%
	月に 1 回くらい	39	62	101
		15.6%	24.8%	40.4%
	年に数回	44	35	79
		17.6%	14.0%	31.6%
	年に 1 回くらい	1	0	1
		0.4%	0%	.4%
	自分ではほとんど洋服を買わない	8	3	11
		3.2%	1.2%	4.4%
合計		106	144	250
		42.4%	57.6%	100.0%

上段：実数　下段：総数パーセント

表 1 から分かるように、「年に 1 回くらい」「自分ではほとんど洋服を買わない」と答え

た人は極端に少なく、大学生はそれなりに洋服を購入するという傾向が見られる。特に、女子にその傾向は顕著であり、洋服の購入頻度が「月に数回」であると、3 分の 1 近くの女学生が答えた。

4.2　学年、身体装飾行為の採用数、

独立変数となる学年、身体装飾行為の採用数、痩身願望の有無についても触れておきたい。まず、学年については、「上級生」と「下級生」というカテゴライズを行った。大学 2・3 年生が上級生であり、1 年生が下級生である。この 2 領域に分類後、洋服の購入頻度との関係性を調査した。下の表 2 が分類後の学年の分布である。

表 2　学年の分布

		性別		合計
		男性	女性	
学年	上級生（2・3 年）	58	94	152
		23.2%	37.6%	60.8%
	下級生（1 年）	48	50	98
		19.2%	20.0%	39.2%
合計		106	144	250
		42.4%	57.6%	100.0%

上段：実数　下段：総数パーセント

次に、身体装飾行為の採用数については、「1 つ以下の採用」と「2 つ以上採用」の 2 グループに分類し、洋服の購入頻度との関連を研究した。下の表 3 がグループ別の分布表である。

表 3　身体装飾行為の分布

		性別		合計
		男性	女性	
ファッション行動採用数	1 つ以下	78	59	137
		31.3%	23.7%	55.0%
	2 つ以上	27	85	112
		10.8%	34.1%	45.0%
合計		105	144	249
		42.2%	57.8%	100.0%

上段：実数　下段：総数パーセント

最後に、痩身願望については、「痩身願望なし」と「痩身願望あり」の 2 つに分別した。下の表 4 はその分布である。

表 4　痩身願望の有無の分布

		性別		合計
		男性	女性	
痩身願望	ない	60	27	87
		24.0%	10.8%	34.8%
	ある	46	117	163
		18.4%	46.8%	65.2%
合計		106	144	250
		42.4%	57.6%	100.0%

上段：実数　下段：総数パーセント

4.3　仮説の検定

さて、以上の従属変数と独立変数の関連について、「3.仮説」で述べた 3 つの仮説をそれぞれについて分析を行った結果を発表していく。なお、すべての仮説の分析方法として、「グループ別の平均値の比較」を用いた後、全ての仮説に共通である性別の分析も行った。

まずは、「下級生に比べ上級生の服の購入頻度は高く、その傾向は女子に顕著である」という仮説の検証を行っていく。結果としては、「下級生よりも上級生の洋服の購入頻度がやや高いが、それは女子にのみ顕著な傾向ではない」と言える数字が算出された。具体的な数字は下の表 5 を参照されたい。

表 5　学年と服の洋服の購入頻度の平均値

表 5.1　全体 の平均値

学年	平均値	度数	総数の%
上級生（2・3 年生）	2.84	153	61.0%
下級生（1 年生）	2.67	98	39.0%
合計	2.77	251	100.0%

表 5.2　男子学生の平均値

学年	平均値	度数	総数の%
上級生（2・3 年生）	2.55	58	54.7%
下級生（1 年生）	2.38	48	45.3%
合計	2.47	106	100.0%

表 5.3　女子学生の平均値

学年	平均値	度数	総数の%
上級生（2・3 年生）	3.02	94	65.3%
下級生（1 年生）	2.96	50	34.7%
合計	3.00	144	100.0%

学年別の検定を行うにあたって、下級生（大学 1 年生）と上級生（大学 2・3 年生）の 2 グループに分類した。表 5.1 から、全体的に下級生よりも上級生の服の購入頻度がやや高いことが分かる。また表 5.2 と表 5.3 から、性別でもそれは同じ結果であると言える。しかし、表 5.2 と表 5.3 の数値の比較から、下級生よりも上級生服の購入頻度が高い傾向は、必ずしも女子のみに顕著だとは言えない。むしろ、数字の振り幅は男子の方がやや大きいのだ。

次に、「身体装飾行為の採用者、または経験者ほど服の購入頻度が高く、その傾向は女子に顕著である」という仮説を検証していく。分析の結果、「身体装飾行為の採用者、または経験者ほど服の購入頻度は高いが、それは女子のみに顕著な傾向ではない」と言える。つまり、これは男女共通の傾向なのだが、その数字の詳細については下記する表 6 を参照していただきたい。

表 6　身体装飾行為と洋服の購入頻度の平均値

表 6.1　全体の平均値

身体装飾行為の採用数	平均値	度数	総数の%
1 つ以下	2.53	138	55.2%
2 つ以上	3.07	112	44.8%
合計	2.77	250	100.0%

表 6.2　男子の平均値

身体装飾行為の採用数	平均値	度数	総数の%
1 つ以下	2.35	78	74.3%
2 つ以上	2.81	27	25.7%
合計	2.47	105	100.0%

表 6.3　女子の平均値

身体装飾行為の採用数	平均値	度数	総数の%
1 つ以下	2.78	59	41.0%
2 つ以上	3.15	85	59.0%
合計	3.00	144	100.0%

身体装飾行為と洋服の購入頻度の関係を調べるため、身体装飾行為採用、または経験数が少ないグループ（1 つ以下）と多いグループ（2 つ以上）の 2 領域に分類した。表 6.1 から、全体でも身体装飾行為を多く採用、または経験している人の洋服の購入頻度が比較的高いことが分かる。また表 6.2 と表 6.3 から、性別においてもその傾向は表れている。ただし、表 6.2 と表 6.3 の数値を比べてみると、身体装飾行為を多く採用、または経験している学生の服の購入頻度が高いという傾向は、特に女子に顕著であるとは言えず、むしろ数値の間隔は男子の方が少しばかり大きい。

最後に、「痩身願望のある学生の方が無い学生より服の購入頻度が高く、その傾向は女子に顕著である」という仮説の検証に入る。分析の結果、「全体で見れば痩身願望のある学生の服の購入頻度は無い学生よりも若干高いが、性別で見ればその傾向は見られず、むしろ痩身願望のない学生にその傾向が見られる」ことが判明した。まずは下の表 7 をご覧いただきたい。

表 7　痩身願望と洋服の購入頻度の平均値

表 7.1　全体の平均値

痩身願望	平均値	度数	総数の%
ない	2.68	88	35.1%
ある	2.82	163	64.9%
合計	2.77	251	100.0%

表 7.2　男性の平均値

痩身願望	平均値	度数	総数の%
ない	2.53	60	56.6%
ある	2.39	46	43.4%
合計	2.47	106	100.0%

表 7.3　女性の平均値

痩身願望	平均値	度数	総数の%
ない	3.04	27	18.8%
ある	2.99	117	81.3%
合計	3.00	144	100.0%

痩身願望と洋服の購入頻度の関係を調べるため、痩身願望ありグループとなしグループの 2 つに分別した。全体の度数において、痩身願望ありグループがなしグループを倍近く上回っており、表 7.1 では痩身願望がある学生の方が洋服の購入頻度がやや高いという数字

が伺える。しかし表 7.2 と表 7.3 から、性別ではその傾向は見られず、むしろ痩身願望のない学生の服の購入頻度がやや高いと言える。

5. 考察

本調査は衰退する衣料品市場の実態を研究する目的で進められてきた。そのなかでも、制服ではなく私服を着用する機会の多い、言わばファッションの最盛期である大学生のおしゃれ意識を研究するため、彼らの学年差、性別、ファッション行動、痩身願望と洋服の購入頻度の関連を分析した。

分析にあたり、3 つの先行研究を参考にし、「下級生に比べ上級生の服の購入頻度は高く、その傾向は女子に顕著である」、「身体装飾行為の採用者、または経験者ほど服の購入頻度が高く、その傾向は女子に顕著である」、「痩身願望のある学生の方が無い学生より服の購入頻度が高く、その傾向は女子に顕著である」という仮説を構成した。

まず、「下級生に比べ上級生の服の購入頻度は高く、その傾向は女子に顕著である」という仮説については「下級生よりも上級生の洋服の購入頻度がやや高いが、それは女子にのみ顕著な傾向ではない」という結果が得られた。仮説の前半部分は支持されたといえるが、下級生の洋服の購入頻度も高い数値を示しており、上級生とのあいだに大きな差は生まれなかった。参考とした先行研究、『小学生のおしゃれ意識』の小学 6 年生女子の結果から分かるように、小学校も高学年になると、ファッションへの関心は高まっていくようだ。つまり、大学生になるころには“おしゃれ意識”はある程度熟成されており、それは学年と比例して更に高まるものではないのかも知れない。さて、仮説の後半部分について考察していこう。小学 3 年生の女子より 6 年の女子の“おしゃれ意識”が高いことが明らかになっていたが、男子小学生は学年に関わらず、それほど洋服への関心を表していなかった。しかし、「4.分析結果」の分布図表からも分かるとおり、大学に所属する男子学生は洋服の購入頻度は全体的に高い数値を示している。このことから、男子は小学校時代と比べて、ファッションに向き合う姿勢が大きく変わったのだと推察する。

次に、「身体装飾行為の採用者、または経験者ほど服の購入頻度が高く、その傾向は女子に顕著である」という仮説については、「身体装飾行為の採用者、または経験者ほど服の購入頻度は高いが、それは女子のみに顕著な傾向ではない」という結果が得られた。総じて、身体装飾行為を多く採用している学生は、そうでない学生に比べて洋服の購入頻度が高かった。参考研究、『身体装飾について 第 1 報 ファッション意識との関連』では、身体装飾行為と“おしゃれ意識”は密接な関係にあると述べられていた。ここでいう“おしゃれ意識”は「変身願望」や「服装に合わせたおしゃれを楽しむため」というものであったが、本稿中で“おしゃれ意識”の同義語として使用した「洋服の購入頻度」とも密接に関連していた。しかし性別では仮説に述べたような差は見られなかった。これは身体装飾採用数 1 つ以下の女子学生も、洋服の購入頻度が全体を上回る高い数値を示したことが原因に挙げられるだろう。

そして、「痩身願望のある学生の方が無い学生より服の購入頻度が高く、その傾向は女子に顕著である」という仮説では、「全体で見れば痩身願望のある学生の服の購入頻度は無い学生よりも若干高いが、性別で見ればその傾向は見られず、むしろ痩身願望のない学生にその傾向が見られる」という結果が得られた。この仮説の基になった先行研究、『女子大学生の体型とやせ願望』では痩身願望を抱く主な理由として、「ファッションを楽しむため」や「洋服が似合うようにするため」というものが挙がっていた。しかし、痩身願望のない学生のファッションへの関心を示すものではなかったと思われる。また、「4.分析結果」の分布でも確認できるように、大学生の洋服の購入頻度は総じて高い。つまり、「痩せたい」と思う気持ちに関わらず大学生はおしゃれを好み、そのなかの一要素としてダイエットを中心とした痩身願望があるのだと考えられる。また、女子の痩身願望ありグループの度数が極端に多かったために全体の洋服の購入頻度の平均値を押し上げているが、性別で見ればその傾向はまったく見られず、むしろ男女ともに痩身願望のない学生のほうが洋服の購入頻度が高かった。このことからも、痩身願望と洋服の購入頻度は必ずしも比例するものではないと言えるだろう。

最後に、本調査をさらに発展させるために必要だと思われることを述べておく。

まず、「下級生に比べ上級生の服の購入頻度は高く、その傾向は女子に顕著である」という仮説についてだが、進級ではなく進学による“おしゃれ意識”の変化を調査した方が効果的かも知れない。特に男子学生に関しては、小学校時代には“おしゃれ意識”があまり変化しなかったが、大学では洋服の購入頻度が全体的に高いデータが出ていることから、進学が“おしゃれ意識”を高める契機になった可能性は高いだろう。

次に「身体装飾行為の採用者、または経験者ほど服の購入頻度が高く、その傾向は女子に顕著である」という仮説については、性別で有意義な結果が得られなかった。ゆえに、特に女子については身体装飾行為のカテゴライズをもう 1 領域ほど増やしてもいいと考える。

そして、「痩身願望のある学生の方が無い学生より服の購入頻度が高く、その傾向は女子に顕著である」の仮説については、痩身願望と服の購入はイコールではなく、“おしゃれ意識”の中の 1 要因として痩身願望が存在すると判断したので、別の“おしゃれ意識”と痩身願望の関連を調査してみてもいいだろう。

文献

伊地知美知子，2000,「小学生のおしゃれ意識」『文教大学教育学部紀要』34：149-155.

半藤保・川島友子，2009,「女子大学生の体型とやせ願望」『新潟青陵学会誌』1: 53-59.

宇野保子・近藤信子・中川早苗，2006,「身体装飾について　第 1 報　ファッション意識との関連」『中国学園紀要』5: 1-8.

第 14 章　大学生の友人関係形成における男女間の違い

1. はじめに

「キャンパスライフデザイン」という大きな枠組みの中で、最終的に今回の調査テーマにとりあげたのは、「男女による友人関係の違いは何か」である。大学に入学してから、最近の大学生は自由に授業を選択できるにもかかわらず集団で行動していることが多いと感じた。大学生のイメージは、グループを作ることなく自分の意思で授業を選択したり課外活動をしたりするものだと思い込んでいたからである。しかし、集団で群れることなく食堂で 1 人で昼食をとる学生の姿もみられ、大学生が全員集団行動をするとも言いがたい。

また、インターネットの普及に伴う若者の友人関係の希薄化がニュースで報道されている点にも注目した。生活が豊かになったことで、暮らしをとりまく環境は急激に変化した。昔はあたりまえのように交流していた隣近所の人たちとも挨拶すら交わさないという風景は、いまや珍しくない。しかし、実際にこれらの影響によってすべての人間関係の希薄化が進んでいるのだろうか、と疑問を抱いた。少なくとも、自分の周りでは地域の人たちとの交流も学校の友人との交流も盛んに行われている。また、インターネットの普及によって交流範囲が広がるという利点も感じている。

これらの大きく 2 つの疑問点を明らかにするために「現在の大学生の友人関係は本当に希薄化しているのか」というテーマの枠を設定した。また、男性と女性では人間関係において価値観が異なるという議論は多くのテレビや雑誌でされている。これらを踏まえて、最終的に「男女による友人関係の違いは何か」という点に焦点を絞って明らかにしたいと考えている。

2. 先行研究

大学生の友人関係を調査する先行研究は、さまざまな観点から行われている。青年期から現在までの友人関係の形成過程や課外活動による学生生活の充実度、親しい友人との関係性など、幅広い研究内容が存在する。そして、これらの多くの調査が実際に大学生にアンケートを取る質問紙調査を行っている。今回の調査テーマである「現在の大学生の友人関係は本当に希薄化しているのか」「男女による友人関係の違いは何か」を明らかにするにあたって、過去に調査されている文献を 3 つあげることにする。

3 つに共通している点は、男子学生と女子学生に質問紙調査を行っている点である。調査対象の人数は異なるが男女比は半々なので、結果は十分にいえるのではないかと思う。大きく異なる点は、調査内容である。

1 つ目の文献である岡田努（1993）「現代青年の友人関係に関する考察」では、調査目的

を現代の大学生の友人選択理由、友人関係様式、ふれあい恐怖状況に設定している。結果として、群れ志向群、対人退却群、やさしさ志向群の 3 つのクラスタに分けることができ、群れ志向群は深刻さを回避する楽しさ重視、対人退却群は対人関係の深まりを避け他者からの評価を重視、やさしさ志向群は心を打ち明け一人の友人を重視することが明らかになった。

2 つ目の文献である松永真由美・岩元澄子（2008）「現代青年の友人関係に関する研究」では、調査目的を今日の青年が友人とどのような関係を築いているのかという点に設定している。結果として、本音群（友人と深い関係を築く）、無関心群（友人と深く付き合いたいが、自分が傷つくのが怖い）、気遣い群（傷つかないように友人との適度な距離をはかっている）うわべ群（他者からの評価を気にして仲間はずれにされるのが怖いため、実際以上に明るく振る舞う）、独立群（お互いを一人の人間として尊重し、大事にしながら友人と付き合う）の 5 つに分類され、現代青年の希薄化が指摘されている中で、「もっと本音で付き合いたい。」と思っている青年が多いことも実証された。

3 つ目の文献である岡田涼（2005）「友人関係への動機づけ尺度の作成および妥当性・信頼性の検討：自己決定論の枠組みから」では、調査目的を自己決定理論の枠組みから友人関係への動機づけを測定する尺度を作成し、その信頼性と妥当性について検討することにしている。結果として、友人関係に対して自己決定的な動機づけを持っているほど向社会的行動を多く行う傾向が見られた。また、男性においては活動を共有することが中心であり、女性においては親密な関係や交流が中心であることが明らかになった。

まとめると、1 つ目の文献と 2 つ目の文献では、現在の大学生の友人関係作りにおけるタイプの違いが明らかになり、友人と深く付きあいたいと考える学生がいる一方で、深く付きあうことが怖いと感じてうわべだけの付きあいを求めてしまう学生もいるという結果が得られた。また、3 つめの文献によって、男性においては活動を共有することが中心であり、女性においては親密な関係や交流が中心であることが明らかになった。

3. 仮説

前節の内容を要約すると、1 つ目の文献と 2 つ目の文献では、現在の大学生の友人関係作りにおけるタイプの違いが明らかになり、友人ともっと深く付きあいたいと考える学生がいる一方で、深く付きあうことが怖いと感じてうわべだけの付きあいを求めてしまう学生もいるという結果が得られた。また、3 つ目の文献によって、大学生の中でも男性は広く浅く、女性は深く狭く友人関係を築くという性差による違いが見受けられた。

はじめに述べたように、わたしたちを取り巻く社会全体の人間関係の希薄化は常々問題にされているが、先行研究を見た限りでは一概に希薄化が起こっているとはいえない。結局のところ、ネット社会の到来に伴い人間関係の構築手段が多様化し、昔ながらのご近所づきあいが減少したことなどを 1 つの「希薄化」という言葉でくくってメディアがとりあげることで、情報の受け手側である私たちが勘違いしているだけなのではないか。実際に

は、単純に希薄化が進んでいるのではなく、コミュニティーツールの多様化によって人間関係の複雑化が起こっていると考えられる。また、本来の連絡手段としてだけではなく誰かと繋がるための手段として携帯電話が使用されるようになり、今では小学生や中学生も誰とでもコミュニケーションをとることができる。以前とは異なり幼い頃からネット社会にさらされることで、子供たちの成長や友人関係の築き方にも多大な影響を及ぼしているといえるのではないか。そこで、先行研究の調査結果から読み取れるこれらの見解をふまえて、大学生の友人関係に関する以下の 2 つの仮説が導かれる。

仮説 1　男子学生は友人に対して活動を共有することを求める

ここでいう「活動」とは、一緒に遊んだりご飯を食べに行ったりする仲のことである。

仮説 2　女子学生は友人に対して親密な関係を求める

ここでいう「親密さ」とは、悩み事や相談事を気兼ねなく言える仲のことである。

これら 2 つの仮説を分析することで、大学生の友人関係の希薄化の観点と性差による違いを明らかにできると考えている。

4. 分析結果

4.1　性別と活動共有度に関する測定

従属変数となる活動共有度は「問 10.D　一緒に外出する」という問いに対する「よくする→1」「時々している→2」「あまりしていない→3」「ほとんどしていない→4」という回答を、独立変数となる「問 1 あなたの性別はどちらですか」という問いでクロス集計を行い測定した。表 1 は本調査における活動共有度の分布である。

表 1　性別と活動共有度に関するクロス集計

	よくする	時々している	あまりしていない	ほとんどしていない	合計
男性	19	45	22	19	105
	18.1%	42.9%	21.0%	18.1%	100.0%
女性	31	69	26	18	144
	21.5%	47.9%	18.1%	12.5%	100.0%
合計	50	114	48	37	249
	20.1%	45.8%	19.3%	14.9%	100.0%
上段：実数	下段：%				

表 1 より、母集団において性別と活動共有度には関係性が見られなかった。質問項目の「1.よくする」の割合は男性より女性の方が高い数値をとっており、「4.ほとんどしていない」の割合は女性のほうが低い数値をとる結果となった。

4.2　性別と悩み事の共有度に関する測定

従属変数となる悩み事の共有度は「問 10.E　悩み事を共有する」という問いに対する「よくする→1」「時々している→2」「あまりしていない→3」「ほとんどしていない→4」という回答を、独立変数となる「問 1 あなたの性別はどちらですか」という問いでクロス集計を行い測定した。図表 2 は本調査における悩み事の共有度の分布である。

表 2　性別と悩み事の共有度に関するクロス集計

	よくする	時々している	あまりしていない	ほとんどしていない	合計
男性	10	39	38	19	106
	9.4%	36.8%	35.8%	17.9%	100.0%
女性	41	70	24	9	144
	28.5%	48.6%	16.7%	6.3%	100.0%
合計	51	109	62	28	250
	20.4%	43.6%	24.8%	11.2%	100.0%
上段：実数	下段：%				

表 2 より、母集団において性別と悩み事の共有度には関係性が見られた。質問項目の「1.よくする」は、男性 9.4%,女性 28.5%、「3.あまりしていない」男性 35.8%,女性 16.7%、「4.ほとんどしていない」は、男性 17.9%,女性 6.3%という結果となり、女子学生は男子学生に比べて悩み事を相談する割合が高い。しかし、「2.時々している」が、男性 36.8%,女性 48.6%というそれぞれ最も高い割合をとる結果となった。

4.3　性別と友人関係の尺度の測定

上記のクロス集計の結果をふまえた上で男女別の友人関係の親密さレベルを平均化するために、友人関係に関する 4 つの質問項目をそれぞれ使用してグループの平均の比較を行った。従属変数となる友人関係の尺度は「問 9.A できるだけ友人と同じであろうと気を使うことがある」「問 9.B 友人から自分がどう見られているか気になる」「問 11.B 人との付き合いが少ない」「問 11.D とても親しいと言える人があまりいない」「問 11.E 周囲の人たちとの関係が上辺だけ」という問いに対する「あてはまる→1」「ややあてはまる→2」「あまりあてはまらない→3」「あてはまらない→4」という回答を、独立変数となる「問 1 あなたの性別はどちらですか」という問いでグループの平均の比較を行った。

表 3　できるだけ友人と同じであろうと気を使うことがある

性別	平均値	度数	標準偏差
男性	2.69	105	.89
女性	2.57	141	.72
合計	2.62	246	.80

表 4　友人から自分がどう見られているか気になる

性別	平均値	度数	標準偏差
男性	2.60	106	.97
女性	2.91	144	.89
合計	2.78	250	.94

表 5　人との付き合いが少ない

性別	平均値	度数	標準偏差
男性	2.40	106	.97
女性	2.09	144	.89
合計	2.22	250	.94

表 6　とても親しいと言える人があまりいない

性別	平均値	度数	標準偏差
男性	2.42	106	.98
女性	2.13	144	.92
合計	2.25	250	.95

表 7　周囲の人たちとの関係が上辺だけ

性別	平均値	度数	標準偏差
男性	2.62	106	.96
女性	2.97	144	.90
合計	2.82	250	.94

平均値を比較すると、表 4 以外はすべて女性が男性を上回る結果となった。また、表 3 以外は平均値の差は 0.3 ポイント以上である。

5. 考察

「キャンパスライフデザイン」というテーマで調査をするにあたってはじめに関心を持ったのは、グループにとらわれることなく自由に学生生活を送ることができる大学生がなぜ集団行動をするのか、という点であった。いくつかの先行研究を読んでみると、ひとえに大学生といっても様々な価値観をもった大学生が存在し、群れを作りやすい学生とそうでない学生に分かれることが明らかになった。そして、大学生の友人関係の形成に関してさらに文献を読み進めてみると、本当はもっと友人と親密に付きあいたいが傷つくのが怖いためにあえて浅い付きあいをしている、という大学生が多いこともわかった。したがって、インターネットの普及などに伴う情報化社会の中で人間関係の希薄化がニュースなど

ではとりあげられているが、先行研究に目を通した限りでは本当にそうなのだろうかという疑問が残った。

そこで、世間一般的な観点と先行研究の結果から、「現在の大学生の友人関係は本当に希薄化しているのか」というテーマの枠を設定し、その中でも価値観の異なる性差もふまえ、「男女による友人関係の違いは何か」という点を明らかにするために調査を行った。調査方法として、友人関係に関する質問項目と性別に関する質問項目を使用し、関連性を分析した。分析にあたって、先行研究より以下の 2 つの仮説を導きだした。

仮説 1　男子学生は友人に対して活動を共有することを求める
仮説 2　女子学生は友人に対して親密な関係を求める

仮説 1 に関しては、有意確率が 5%以上であるため関係性を図ることができなかった。クロス集計の結果、質問項目の「1.よくする」の割合は男性より女性の方が高い数値をとっており、「4.ほとんどしていない」の割合は女性のほうが低い数値をとる結果となった。これは、男子学生より女子学生の方が友人と一緒に外出する機会が多いことを表し、仮説があてはまらないことを明らかにした。

仮説 2 に関しては、有意確率が 5%以下であるため関係性を図ることができた。クロス集計の結果、質問項目の「1.よくする」は、男性 9.4%、女性 28.5%、「3.あまりしていない」男性 35.8%,女性 16.7%、「4.ほとんどしていない」は、男性 17.9%、女性 6.3%という結果となり、女子学生は男子学生に比べて悩み事を相談する割合が高い。しかし、「2.時々している」が、男性 36.8%、女性 48.6%というそれぞれ最も高い割合をとる結果となったため、女性に比べると頻度は低いが男性も友人に悩み事を相談する機会があるという結果が得られた。

また、男女別の友人関係の親密さレベルを平均化するために、友人関係に関する 5 つの質問項目をそれぞれ使用してグループの平均の比較を行ったところ、表 4 以外はすべて女性が男性を上回る結果となった。4.1 性別と活動共有度に関する測定、4.2 性別と活動共有度に関する測定の結果とあわせて考えると、どちらの仮説も比較的あてはまることがわかったが、同時に必ずしも女性だけが友人に悩み事を相談するのではなく、男性も友人に相談する機会が増えていることも明らかになった。しかし、今回の調査だけでは仮説を決定的に裏付けることができたとはいえない。結果を確信的なものにするためには、分析の際に使用するアンケート用紙の質問項目を、大学生の友人関係を明らかにするためのより詳細なものにしなければならないと実感している。

文献

岡田努，1993,「現代青年の友人関係に関する考察」『青年心理学研究』5: 43-55.

岡田涼，2000,「友人関係への動機づけ尺度の作成および妥当性・信頼性の検討：自己決定論の枠組みから」『パーソナリティ研究』14(1): 101-112.
中島千加子，2007,「女子大学生の友人関係におけるいじめの加害・被害体験の有無とその影響」『日本教育心理学研究会総会発表論文集』49: 508-08.
橋本鉱一，2010,『大学生：キャンパスの生態史』玉川大学出版部.
保元駿・中澤清，2010,『大学生の友人関係における同性・異性の 2 側面について：信頼感・依存欲求からの検討』関西学院大学大学院文学研究科ポスター発表.
松永真由美・岩元澄子，2008,「現代青年の友人関係に関する研究」『久留米大学院心理学研究』7: 77-86.
溝上慎一，2001,『大学生と自己の生き方：大学生固有の意味世界に迫る大学生心理学』ナカニシヤ出版.

資料　調査票

大学生の日常生活と意識に関するアンケート

2011 年　10 月

調査項目作成・実施

甲南大学文学部社会学科　専門教育科目
「社会調査実践研究②」（社会調査士 G 科目）
2011 年度履修者

担当教員

甲南大学文学部　准教授
星　敦士
（hoshi@center.konan-u.ac.jp）

〔 ご記入にあたってのお願い 〕

1．調査票には、必ず調査票を受け取った**ご本人**がご回答・ご記入ください。

2．該当する質問には、**すべて**お答えください。

3．アンケートの結果は、表やグラフの形で数値として表現しますので、他の方が集計結果を見たときに特定の個人がどのような回答をしたのか分かることはありません。どうぞありのままをお答えください。

4．お答えは、それぞれの問いの指示にしたがって、あてはまる番号に○をつけるか、文字や数字を記入して下さい。問いの番号と矢印（→）にそってお答えください。

5．ご記入は、黒または青の筆記用具でお願いいたします。黒または青であれば、ボールペンでも鉛筆でもかまいません。

6．設問の内容など、不明な点がありましたら、近くの調査担当者にお尋ねください。

I はじめに、あなたご自身についておたずねします。

問 1　あなたの性別はどちらですか。**あてはまるものどちらかに**○をつけてください。

1．男性　　2．女性

問 2　あなたが現在所属している学部・学科をご記入ください。

[　　] 学部　[　　] 学科

問 3　あなたは現在何年生ですか。入学年（西暦）もお答えください。

[　　] 年　[　　] 年入学

問 4　あなたは現在、部活またはサークルに参加していますか。**あてはまるものどちらかに**○をつけてください。

1．はい　　2．いいえ

問 5　あなたは現在一人暮らし(寮も含みます)ですか。**あてはまるものどちらかに**○をつけてください。

1．はい　　2．いいえ

問 6　あなたのきょうだい関係について、**あてはまるものすべてに**○をつけてください。

1．兄または姉がいる　　2．弟または妹がいる　　3．兄弟姉妹はいない

II あなたの友人関係についておたずねします。

問 7　あなたは普段の大学生活においてグループ行動をしていると思いますか。**あてはまるもの 1 つに**○をつけてください。（なお、ここでの「グループ」とは大学生活における授業や食事、休み時間などを共に過ごすある程度そのメンバーが固定化された集団のことを指します。）

1．大抵の場合していると思う 2．日による/場合による 3．大抵の場合していないと思う

問 8　あなたは現在、相談や悩みを実際に会って話せる友人がいますか。**あてはまるものどちらかに**○をつけてください。「2．いる」に○をつけた場合は、おおよその数も記入してください。

1．いない　　2．いる → [　　] 人くらい

↓

問 9 へ進んでください

（2 ページの問 8 で「2.いる」に○をつけた方のみお答えください）そのなかで、就職活動に対する不安や悩みについて実際に会って話せる友人は何人くらいいると思いますか。

□ 人くらい

問 9　以下の各項目の内容は、最近のあなたにどのくらいあてはまりますか。以下のそれぞれの項目について、**あてはまるもの 1 つに**○をつけてください。

		あてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない
A.	できるだけ友人と同じであろうと気を使うことがある	1	2	3	4
B.	友人から自分がどう見られているか気になる	1	2	3	4
C.	あまり目立つようなことはしたくない	1	2	3	4
D.	友人から変わった人だと思われたくない	1	2	3	4

問 10　あなたは次にあげるような行動を、同じ大学に所属しているもっとも親しい友人に対して、どの程度していると思いますか。**あてはまるもの 1 つに**○をつけてください。

		よくする	時々している	あまりしていない	ほとんどしていない
A.	盛り上がれるように気を使っている	1	2	3	4
B.	誘われたときはできるだけ応じる	1	2	3	4
C.	会話の内容は流行や当たり障りのないものにしている	1	2	3	4
D.	一緒に外出する	1	2	3	4
E.	悩み事を相談する	1	2	3	4

問 11　仮にあなたが次のような状況にいるとしたら、どの程度孤独を感じると思いますか。**あてはまるもの 1 つに**○をつけてください。

		とても感じる	まあまあ感じる	あまり感じない	まったく感じない
A.	周囲の人たちとうまくいかない	1	2	3	4
B.	人との付き合いが少ない	1	2	3	4
C.	親しい仲間達の中で自分の存在意義をあまり感じない	1	2	3	4
D.	とても親しいと言える人があまりいない	1	2	3	4
E.	周囲の人たちとの関係が上辺だけ	1	2	3	4

III 食生活、ソーシャル・ネットワーク・サービスの利用、ファッション、海外旅行、授業など、あなたの普段の生活全般についておたずねします。

問 12　あなたの普段の食生活についてお伺いします。以下のそれぞれの項目について、**あてはまるもの 1 つに**○をつけてください。

		あてはまる	やや あてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない
A.	朝食をぬくことがある	1	2	3	4
B.	夜遅くに食事をすることがある	1	2	3	4
C.	栄養のバランスをあまり気にしていない	1	2	3	4
D.	野菜や果物はあまりとっていない	1	2	3	4
E.	塩分の取りすぎなどについてあまり気にしていない	1	2	3	4
F.	間食が多い	1	2	3	4
G.	ファーストフードやインスタント食品をよく食べる	1	2	3	4
H.	外食が多い	1	2	3	4

問 13　あなたは以下のような事柄についてどのくらいあてはまりますか。**あてはまるもの 1 つに**○をつけてください。

		あてはまる	やや あてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない
A.	毎日家計簿（お小遣い帳）をつけている。	1	2	3	4
B.	予定外の出費というものはない。	1	2	3	4
C.	衝動買いはしない。	1	2	3	4
D.	親や友人からお金を借りることはない。	1	2	3	4

問 14　あなたが普段、「他人の日記を読む」「日記を書く」「他人の日記にコメントをつける」「コメントを読む」といった目的で mixi を利用する頻度はどの程度ですか。**あてはまるもの 1 つに**○をつけてください。また、「利用頻度」のなかで **2～6 に○をつけた場合**は、1 回あたりの利用時間についても、**あてはまるもの 1 つに**○をつけてください。

【利用頻度】

1. 利用していない・ほとんどしない
2. 月に 1～2 回程度
3. 週に 1～2 回程度
4. 1 日に 1 回程度
5. 1 日に 2～3 回程度
6. 1 日に 4 回以上

【利用時間】

1. 1 分以内
2. 5 分以内
3. 10 分以内
4. 30 分以内
5. 1 時間以内
6. それ以上

問 15　あなたは大学生になって、どのぐらいの頻度で洋服（下着、靴下は含みません）を購入していますか。**あてはまるもの１つに**○をつけてください。

1．月に数回　　2．月に１回くらい　　3．年に数回　4．年に１回くらい 5．自分ではほとんど洋服を買わない

問 16　あなたはファッションに関して、流行っているものを積極的に取り入れようとする傾向がありますか。**あてはまるものどちらかに**○をつけてください。

1．はい　　2．いいえ

問 17　あなたは現在、「痩せたい」と思う気持ちがありますか。**あてはまるもの１つに**○をつけてください。

1．ある　　2．少しある　　3．あまりない　　4．まったくない

問 18　あなたは現在、以下のようなことをしていますか。または、過去に以下のようなことをしていましたか。**あてはまるものすべてに**○をつけてください。

1．ヘアカラー　　2．ヘアパーマ　　3．ピアス　　4．したことがない

問 19　あなたはこれから大学を卒業するまでに海外旅行に行きたいと思いますか。**あてはまるもの１つに**○をつけてください。すでに行ったことのある人はまた行きたいと思うかお答えください。

1．行きたい 2．どちらかと言えば行きたい 3．どちらかと言えば行きたくない 4．行きたくない

問 20　あなたの家族やあなたの周囲の友人はだいたいどのくらいの頻度で海外に旅行していますか。**あてはまるもの１つに**○をつけてください。

【あなたの家族】

1．１年に１回以上は行っている 2．2〜3 年に１回くらいは行っている 3．4 年に１回くらいは行っている 4．ほとんど行っていない

【あなたの周囲の友人】

1．年に１回以上は行っている人が多い 2．2〜3 年に１回くらいは行っている人が多い 3．4 年に１回くらいは行っている人が多い 4．ほとんど行っていない人が多い

問 21　今年度の前期にあなたが履修していた科目の中で、内容に関心がもてるものはどのくらいありましたか。**あてはまるもの 1 つに**○をつけてください。

1．ほとんどすべての科目に関心があった
2．ある程度の科目に関心があった
3．あまり関心がもてる科目はなかった
4．ほとんどの科目に関心がもてなかった

問 22　以下の各項目の内容は、普段のあなたにどのくらいあてはまりますか。以下のそれぞれの項目について、**あてはまるもの 1 つに**○をつけてください。

	あてはまる	やや あてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない
A.　不安である	1	2	3	4
B.　物事に集中できない	1	2	3	4
C.　悩みがある	1	2	3	4
D.　疲れている	1	2	3	4
E.　イライラする	1	2	3	4

問 23　以下の各項目の内容は、普段のあなたにどのくらいあてはまりますか。以下のそれぞれの項目について、**あてはまるもの 1 つに**○をつけてください。

	あてはまる	やや あてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない
A.　いつもせかせかしている	1	2	3	4
B.　いつも忙しくしているのが好きだ	1	2	3	4
C.　毎日時間が過ぎるのが早い	1	2	3	4
D.　注目されることが好きだ	1	2	3	4
E.　めだちたがり屋だ	1	2	3	4
F.　無視されるのは我慢できない	1	2	3	4
G.　自分の意見をつき通す方だ	1	2	3	4
H.　人に指図をするのは好きな方だ	1	2	3	4
I.　何事も先頭に立ってする方だ	1	2	3	4

問 24　以下の各項目の内容は、普段のあなたにどのくらいあてはまりますか。以下のそれぞれの項目について、**あてはまるもの１つに**○をつけてください。

		あてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない
A.	できれば様々な経験をしてみたい	1	2	3	4
B.	目新しくて変化に富んだいろいろなことをしてみたい	1	2	3	4
C.	興奮したり、わくわくすることは好きだ	1	2	3	4
D.	特殊で変わった仕事をしてみたい	1	2	3	4
E.	変わった体験のできるアルバイトをしてみたい	1	2	3	4

問 25　以下の各項目の内容は、普段のあなたにどのくらいあてはまりますか。以下のそれぞれの項目について、**あてはまるもの１つに**○をつけてください。

		あてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない
A.	自分なりの生き方を大切にしている	1	2	3	4
B.	自分に正直に生きている	1	2	3	4
C.	しようと思うことが次々と頭に浮かんでくる	1	2	3	4
D.	これからの人生や生き方に関心がある	1	2	3	4
E.	将来の目標を持っている	1	2	3	4
F.	大体の将来計画を持っている	1	2	3	4

問 26　以下の各項目の内容は、普段のあなたにどのくらいあてはまりますか。以下のそれぞれの項目について、**あてはまるもの１つに**○をつけてください。

		あてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない
A.	毎日が楽しい	1	2	3	4
B.	生活の中で生きる喜びや実感を味わっている	1	2	3	4
C.	自分にとってプラスの存在になる人との関わりが多い	1	2	3	4
D.	問題解決行動に積極的になれる	1	2	3	4
E.	困難な状況でもあきらめずに努力できる	1	2	3	4
F.	欲求を実現するためにはどんな努力も惜しまない	1	2	3	4

問 27　以下の各項目の内容は、普段のあなたにどのくらいあてはまりますか。**あてはまるもの１つに**○をつけてください。

		あてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない
A.	自分が失敗した時、すぐに謝ることができる	1	2	3	4
B.	自分は違った考えの人とも上手くやっていける	1	2	3	4
C.	初対面の人との会話、自己紹介がスムーズにできる	1	2	3	4
D.	自分にとって重要な人には自分のことをわかってほしい	1	2	3	4
E.	人の顔色や言動は気になってしまう	1	2	3	4
F.	周りの人から気に入られたい	1	2	3	4

Ⅳ 阪神・淡路大震災、ボランティア活動についておたずねします。

問 28　阪神・淡路大震災が起こった平成７年（1995 年）１月 17 日、あなたはどの地域に居住していましたか。**あてはまるもの１つに**○をつけてください。「14．その他」の場合はカッコ内に市区町村名（政令指定都市は区名まで）を記入してください。

1．神戸市東灘区　2．神戸市灘区　3．神戸市中央区　4．神戸市兵庫区
5．神戸市長田区　6．神戸市須磨区　7．神戸市垂水区　8．神戸市西区
9．神戸市北区　10．尼崎市　11．芦屋市　12．西宮市
13．淡路市　14．その他（　　）

問 29　阪神・淡路大震災が起こった際、あなた（家族を含む）はボランティアから何らかの支援を受けましたか。**あてはまるもの１つに**○をつけてください。ここでの支援とは救助、復旧作業の手伝い、支援物資の提供、炊き出しを指します。

1．支援を受けた　2．少し支援を受けた　3．あまり支援を受けていない
4．支援を受けていない

問 30　あなた(家族を含む)は現在、どのような防災対策を行っていますか。**あてはまるものすべてに**○をつけてください。

1．懐中電灯の準備　2．携帯ラジオの準備　3．非常用飲料・食料の準備
4．家具の転倒防止　5．避難経路・避難場所の認知
6．緊急時の家族・親族との連絡手段の確認　7．いずれも行っていない

問 31　あなたは現在、何らかのボランティア活動に参加していますか。または、過去にボランティア活動に参加したことがありますか。**あてはまるものどちらかに**○をつけてください。

1．参加している/していた　　2．参加したことはない

問 32　以下の各項目の内容は、普段のあなたにどのくらいあてはまりますか。**あてはまるもの 1 つに**○をつけてください。

		いつもしている	数回したことがある	一度はしたことがある	したことがない
A.	見知らぬ人が落し物をした時、拾ってあげる	1	2	3	4
B.	授業を休んだ友人のためにプリントをもらう	1	2	3	4
C.	気分が悪くなった友人を介抱する	1	2	3	4
D.	バスや電車でお年寄りや体の不自由な人に席をゆずる	1	2	3	4

問 33　あなたは将来、何らかのボランティア活動に参加したいと思いますか。**あてはまるもの 1 つに**○をつけてください。

1．ぜひ参加したいと思う
2．機会があれば参加したい
3．あまり参加したいとは思わない
4．参加したくない

V 就職への準備、就職活動についておたずねします。

問 34　あなたは、現在、就職活動に対してどの程度不安を感じていますか。**あてはまるもの 1 つに**○をつけてください。

1．不安　　2．やや不安　　3．あまり不安ではない　　4．不安ではない

問 35　あなたは、この一年間で甲南大学のキャリアセンターをどの程度利用しましたか。(A) 個別の相談と、(B) イベント・セミナー・講座(「ハレ晴れセミナー」「就活の壺」など)それぞれについて、**あてはまるもの 1 つに**○をつけてください。

【(A)個別の相談】

1．よく利用している
2．ときどき利用している
3．あまり利用していない
4．ほとんど利用していない

【(B)イベント・セミナー・講座】

1．よく出席している
2．ときどき出席している
3．あまり出席していない
4．ほとんど出席していない

問 36　あなたは、現在、インターネット上のコミュニティサイト（mixi など）で、就職活動に関する不安や悩みの相談を１カ月当たり、どの程度していますか。**あてはまるもの１つに**○をつけてください。

1．頻繁にしている　　2．まあまあしている　　3．あまりしていない
4．ほとんどしていない/まったくしていない

問 37　現在、あなたが就きたいと思っている職業について、**もっとも近いもの１つに**○をつけてください。

1．専門職・技術的職業　[教員、医師、弁護士、芸術家、芸能人など]
2．管理的職業　[自治体の首長、会社役員、会社経営者など]
3．事務的職業　[会社事務員、銀行員、秘書など]
4．販売的職業　[小売店主、飲食店主、販売店員、セールスマンなど]
5．運輸・通信の職業　[鉄道員、船員、運転手、バスガイドなど]
6．技能工・生産工程の職業　[自動車整備士、大工、部品製造、食品製造など]
7．サービス的職業　[美容師、料理人など]
8．保安的職業　[警察官、自衛隊員など]
9．農業・林業・漁業
10．専業主婦・専業主夫
11．わからない

Ⅵ ご両親との関係、ご両親のお仕事についておたずねします。

問 38　ご両親(父親と母親両方、または片方のみも含みます)との会話についてお聞きします。現在、親と同居していない人はメールや電話を含めて、以下のそれぞれについて、**あてはまるもの１つに**○をつけてください。

A．普段、ご両親とはどのくらいの頻度で会話しますか。

1．ほぼ毎日　　2．週３日程度　　3．週１日程度　　4．２週間に１日程度以下

B．ご両親と政治や経済、社会一般の出来事についてどのくらい話しますか。

1．ほぼ毎日する　　2．たまにする　　3．あまりしない　　4．まったくしない

C．悩み事や困ったことが起きたとき、どのくらいご両親に相談をしますか。

1．必ず相談する　　2．ほぼ相談する　　3．あまり相談しない
4．まったく相談しない

問 39　あなたは現在、大学生活に関する費用（学費、生活費、サークル・部活、娯楽に関する費用すべてを含みます）について、親にどのくらい負担してもらっていますか。**あてはまるもの１つに**○をつけてください。

1．全額　　2．3 分の 2 程度　　3．3 分の 1 程度　　4．ほとんど負担してもらっていない

問 40　あなたは以下のような意見についてどのように思いますか。**あてはまるもの１つに**○をつけてください。

		そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思わない
A.	親からの経済的な援助をもらっている人は感謝した方がよい	1	2	3	4
B.	親は子供が大学を出るまで経済的な援助をした方がよい	1	2	3	4
C.	親から経済的援助を受けた場合、子供は将来、親への恩返しをするべきだ	1	2	3	4

問 41　あなたの父親と母親の職業について、**あてはまるもの1つを選んで**下の枠内に記入してください。複数の仕事をお持ちの場合や離職/転職をされた場合は、就業期間が最も長い(長かった)仕事についてお答え下さい。

1．専門職・技術的職業　[教員、医師、弁護士、芸術家、芸能人など]
2．管理的職業　[自治体の首長、会社役員、会社経営者など]
3．事務的職業　[会社事務員、銀行員、秘書など]
4．販売的職業　[小売店主、飲食店主、販売店員、セールスマンなど]
5．運輸・通信の職業　[鉄道員、船員、運転手、バスガイドなど]
6．技能工・生産工程の職業　[自動車整備士、大工、機械部品製造、食品製造など]
7．サービス的職業　[美容師、料理人など]
8．保安的職業　[警察官、自衛隊員など]
9．農業・林業・漁業
10．専業主婦・専業主夫
11．いない

父親の職業 [　　]　　母親の職業 [　　]

VII 最後に自由記述式の質問への回答をお願いします。

問 42　あなたが“青春”についてもっているイメージについてお聞きします。あなたにとって“青春”とはどのようなものだと思いますか。以下の枠内にご自由にお答えください。

以上で質問は終わりです。

長時間にわたって調査にご協力いただき、まことにありがとうございました。

＊このアンケート調査の結果は、今後データクリーニング、基礎集計、分析を経て、2012 年 2 月頃に専門教育科目「社会調査実践研究②」の調査報告書として公表される予定です。調査にご協力いただいた方のなかで、ご希望の方には報告書の PDF ファイルをお送りいたしますので、下の枠内に大学から指定されている学籍番号によるメールアドレス（@以下が center.konan-u.ac.jp になっているもの）をご記入ください。
＊なお、ご記入いただいたメールアドレスは、本調査の報告書送付のみに使用します。

アンケート調査の報告書送付を希望するメールアドレス

@center.konan-u.ac.jp

甲南大生のキャンパス・ライフ・デザイン

2011 年度「社会調査実践研究（②クラス）」
調査実習報告書

2012 年 3 月 20 日　発行

【編集・発行】
甲南大学文学部社会学科
〒658-8501　神戸市東灘区岡本 8-9-1

【印刷】
甲南大学生活協同組合　複写センター